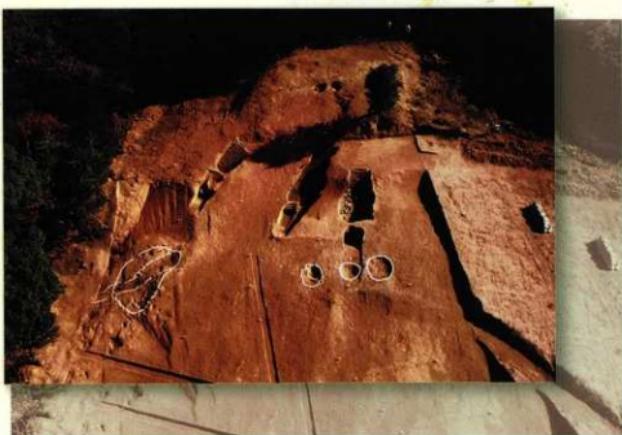


深廻間 B 古窯跡群

～大府深廻間特定土地区画整理地内埋蔵文化財発掘調査報告Ⅱ～



2006年

大府市教育委員会

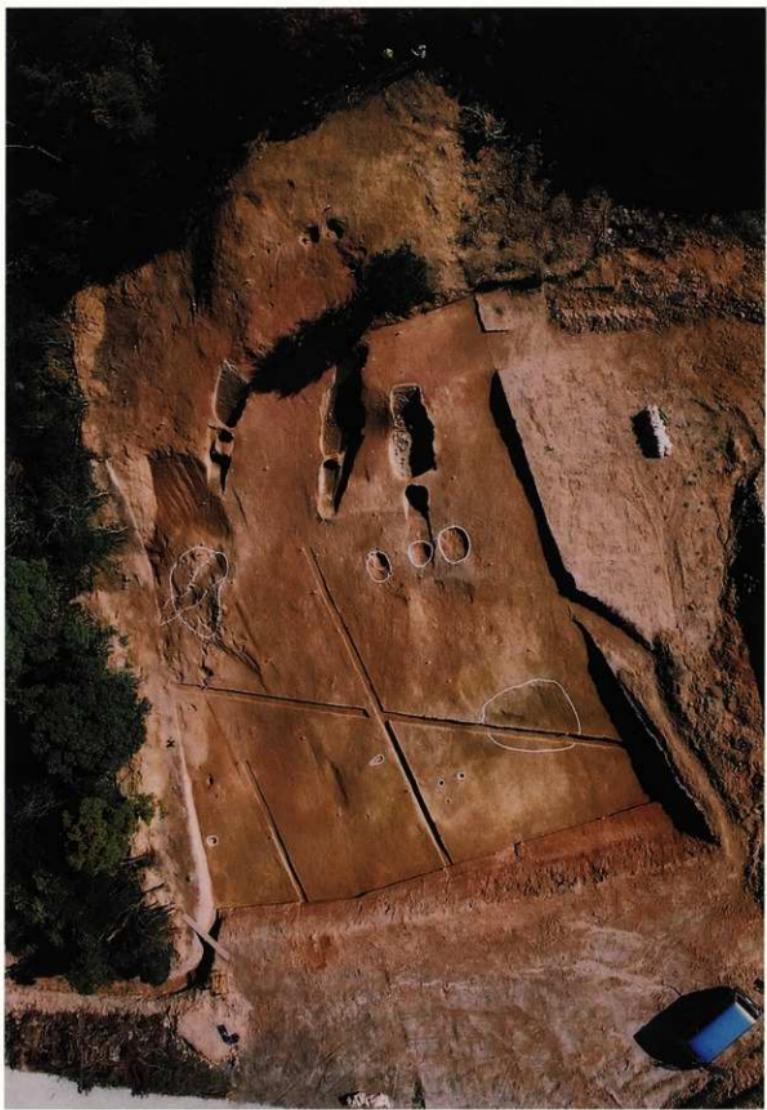
ふか は ざま こ よう せき ぐん
深廻間 B 古窯跡群

～大府深廻間特定土地区画整理地内埋蔵文化財発掘調査報告Ⅱ～

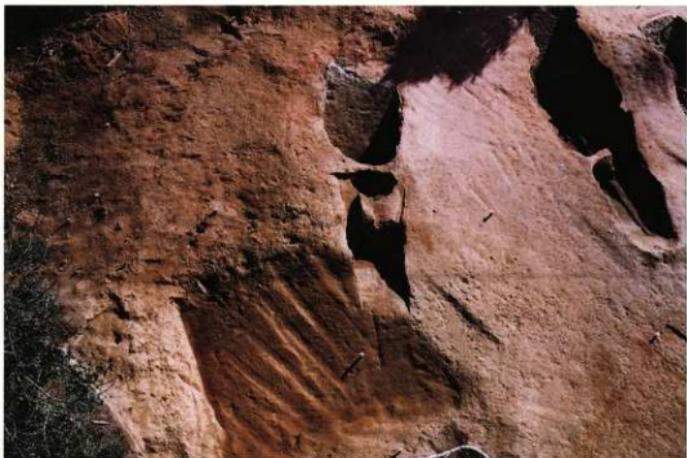
2006年

大府市教育委員会

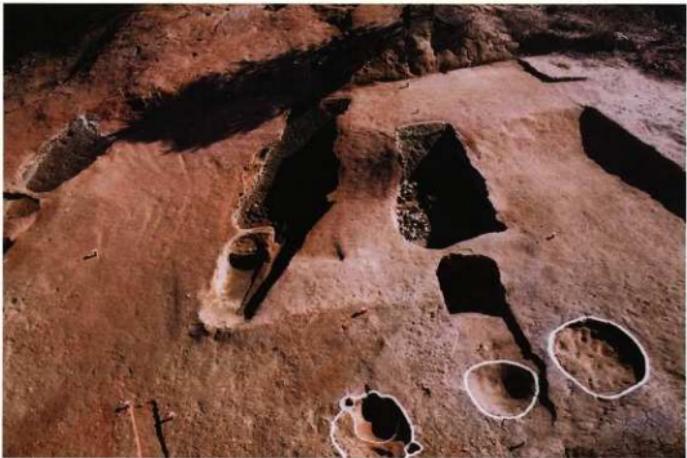




卷頭1 調査区遠景 南から



卷頭2 調査区近景 1号窯 南西から



卷頭3 調査区近景 2号窯・3号窯 西から

序

大府市を含む知多半島は、現在も常滑焼に代表される焼き物の一大生産地であります。その歴史は、古代に遡ると言われ、中世には、緩やかな丘陵地を利用した窯が各地で築窯され、多くの焼き物が生産されてきました。窯に利用された丘陵地は名古屋市南部から東部そして瀬戸・猿投山山麓まで続き、古代に操業を開始したと言われる猿投窯の窯もこの丘陵地に点在しています。大府市は、古代の猿投窯と常滑焼の影響を受けた地域ととらえられており、現在約140箇所の窯業遺跡が確認しております。

大府市は名古屋市に南接した都市で、区画整理事業・道路建設・民間開発事業が展開され、それに重なるように埋蔵文化財の発見・調査が増加しています。埋蔵文化財は歴史的にも文化的にも貴重な人類共通の遺産で、それを後世に伝えていくことは国民の義務であると考えます。

本市では、ここ12年間各地で発掘調査が実施され、海陸庵古窯群（平成6）・神明古窯群（平成7）・円通寺古墓（平成7）・森岡第1号窯（平成8）・ガンジ山A古窯群（平成9）・深廻間A古窯群（平成9）・羽根山古窯群（平成10）・深廻間B古窯群（平成11）・深廻間C古窯群・砂原古窯・石龜戸古窯群（以上平成15）・奥谷古窯・瀬戸B古窯群・瀬戸C古窯群（以上平成16）・久分古窯群（平成17）など、着々と窯業遺跡調査が実施され、多くの成果が得られています。

今回の深廻間B古窯跡群の発掘調査は、平成11年11月から行ったもので、ここに報告書として上梓いたしました。

最後になりましたが、発掘調査に指導された調査員の方々のご苦労とご協力に心から感謝いたします。また調査に際して、ご指導とご援助を賜りました愛知県教育委員会、大府市役所都市開発部区画整理課（現産業建設部都市整備課）、株式会社花卉組、発掘調査作業にご参加された方々、この事業に対して、特別なご理解とご高配をいただきました大府深廻間特定土地区画整理組合理事長小島久夫氏（故人）はじめ役員の方々には厚くお礼を申し上げます。

平成18年3月吉日

大府市教育委員会

教育長 梶 谷 修

例　言

1. 本書は愛知県大府市長草町深廻間28番地、同15番地の197他に所在した深廻間B古窯跡群の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は大府深廻間特定土地地区画整理事業にともなう事前調査として大府市教育委員会の委託を受けた朝日航洋株式会社名古屋支店が支援した。現場の体制は安田幸市・村井志高（以上朝日航洋株式会社名古屋支店）が担当した。
3. 調査期間は平成8年3月27日に範囲確認調査を、平成11年11月1日から平成11年12月21日まで本調査を行った。なお遺物洗浄作業は調査現場で実施した。平成13・14年度に出土品整理作業とその図化作業を、その後随時原稿の執筆をしながら、平成17年度に報告書編集作業を実施した。
4. 発掘調査にあたっては、次の各機関をはじめ多くの方々からのご指導、ご協力を得た。記して感謝の意を表す次第である。
　愛知県教育委員会文化財課、株式会社花井組、大府深廻間特定土地地区画整理組合、大府市役所都市開発部区画整理課の各関係機関
5. 出土品整理（マーキング・接合・仕分など）と実測図作成は平成13・14年度に緊急地域雇用対策基金などを利用して、アイシン精機株式会社新規事業企画室に委託した。
6. 発掘調査と整理作業には以下の方々が参加協力された。お名前は以下のとおりである。
　現場作業および洗浄作業29名
　木下信雄、村野實、前田美江、舟崎千春、澤山昭八、児玉五市、真島知恵、井上純子、相木千津子、浅田レイ子、土井シズ、上飯坂日出美、牧野みゆき、児玉五市、酒向正三、柳原則夫、政時久、大川恵三、長谷川敏朗、石田素美子、井村米孝、大橋乃理江、田中信也、柘植幹子、土工久美子、藤澤尚代、間瀬澄恵、松原敬子、山田恒美（以上作業員）、鈴木智恵
　出土品整理作業9名
　木下信雄、村野實、前田美江、石田尚子、石田由紀、井上純子、大橋乃理江、山田恒美、白木公子（以上アイシン精機株式会社新規事業企画室）
　出土品図化作業8名
　岸本勝江、伊藤菜知子、垣見実梨、岩月栄理香、越野恵美子、古川笑子、渡辺恵美子、近藤恵子（以上アイシン精機株式会社新規事業企画室）
7. 手書きによる地層断面図のデジタルトレースを平成14年度にアイシン精機株式会社委託した。
8. 熱残留磁気測定と炭化物分析はそれぞれ富山大学理学部教授広岡公夫氏と株式会社パレオ・ラボ・植田弥生氏に依頼し、それぞれ玉稿を賜った。
9. 本書の編集は古田功治が総括し、事務を鈴木智恵が行なった。執筆の分担は第2章と第3章を鈴木が、第5章を近藤英正が、それ以外を古田が行った。また第4章の熱残留磁気測定は富山大学理学部教授広岡公夫氏（当時）が、炭化物分析は、株式会社パレオ・ラボ・植田弥生氏の執筆したものである。
10. 窯体と調査区の測量および図化は愛知玉野情報システム株式会社が行い、座標は国土座標第Ⅷ系に準拠する。
11. 土色には、小林正忠・竹原秀雄『新版標準土色帖』を使用した。
12. 調査記録および出土遺物は大府市歴史民俗資料館で保管している。

目 次

第 1 章 調査概要

第 1 節	位置と地形	2
第 2 節	歴史的環境	5
第 3 節	発掘調査に至る経緯と調査過程等	8

第 2 章 遺 構

第 1 節	窯体について	12
第 2 節	前庭部と灰原について	30

第 3 章 遺 物

第 1 節	器形分類	34
第 2 節	窯内と灰原などの遺物	38
第 3 節	考察	70

第 4 章 科学分析

第 1 節	深廻間 B 古窯跡群の考古地磁気	74
第 2 節	深廻間 B 古窯跡群の出土炭化材の樹種同定	91

第 5 章 総 論

遺構について	98
遺物について	98
炭化材について	99
築窯年代について	99
報告書抄録	100

挿図目次

第1図 遺跡位置図（国土地理院 1/5万地形図「名古屋南」）	3
第2図 大府市の表層地質図	4
第3図 調査地点地形図	6
第4図 周辺遺跡分布図（1/13万）	6
第5図 調査前地形図	9
第6図 遺構配置図	13
第7図 1号窯窓体実測図	15
第8図 1号窯断面セクション図1	16
第9図 1号窯断面セクション図2	17
第10図 2号窯窓体実測図	20
第11図 2号窯断面セクション図1	21
第12図 2号窯断面セクション図2	22
第13図 2号窯断面セクション図3	23
第14図 3号窯窓体実測図	26
第15図 3号窯断面セクション図1	27
第16図 3号窯断面セクション図2	28
第17図 3号窯断面セクション図3	29
第18図 SK01-SK02 平面図・セクション図	31
第19図 灰原セクション図	32
第20図 部位等名称図	34
第21図 碗類・皿類器形分類図	35
第22図 鉢類器形分類図	36
第23図 1号窯碗類遺物実測図	38
第24図 1号窯皿類器形分類別組成図	39
第25図 2号窯碗類器形分類別組成図	40
第26図 2号窯皿類遺物実測図	41
第27図 2号窯皿類器形分類別組成図	42
第28図 2号窯皿類遺物実測図	42
第29図 2号窯台遺物実測図	44
第30図 2号窯灰原皿類遺物実測図	46
第31図 2号窯灰原土師質壺遺物実測図	46
第32図 3号窯碗類器形分類別組成図	47
第33図 3号窯碗類遺物実測図	47
第34図 3号窯碗類特殊品遺物実測図（その1）	48
3号窯碗類特殊品遺物実測図（その2）	49
第35図 3号窯皿類器形分類別組成図	54
第36図 3号窯皿類遺物実測図	54

第37図	3号窯床面上碗類遺物実測図	57
第38図	3号窯床面上皿類遺物実測図	58
第39図	3号窯鉢類遺物実測図	59
第40図	3号窯焼台遺物実測図	60
第41図	3号窯灰原碗類器形分類別組成図	60
第42図	3号窯灰原碗類遺物実測図	61
第43図	3号窯灰原皿類器形分類別組成図	61
第44図	3号窯灰原皿類遺物実測図	62
第45図	3号窯灰原鉢類遺物実測図	62
第46図	SK01 碗類器形分類別組成図	63
第47図	SK01 碗類遺物実測図	63
第48図	SK01 皿類器形分類別組成図	65
第49図	SK01 皿類遺物実測図	65
第50図	SK02 碗類遺物実測図	66
第51図	SK02 皿類器形分類別組成図	67
第52図	SK02 皿類遺物実測図	67
第53図	SK03 碗類遺物実測図	68
第54図	SK03 皿類遺物実測図	68
第55図	表探碗類遺物実測図	69
第56図	過去2,000年間の西南日本版考古磁気年変化(細線)(広岡、1977) および西暦500~1550年の東海版永年変化(太線)(広岡・藤澤、1998)と深廻間B古窯群の 考古磁気測定結果	78

表目次

第1表	大府市遺跡一覧表	7
第2表	発掘調査に伴う法的手手続き	10
第3表	1号窯碗類観察表	38
第4表	1号窯碗類器形分類別組合せ表	39
第5表	1号窯皿類観察表	39
第6表	1号窯灰原碗類観察表	39
第7表	1号窯灰原皿類観察表	39
第8表	2号窯出土碗類器形分類別組合せ表	40
第9表	2号窯碗類観察表(その1)	40
＊	2号窯碗類観察表(その2)	41
第10表	2号窯出土皿類器形分類別組合せ表	42
第11表	2号窯皿類観察表(その1)	43
＊	2号窯皿類観察表(その2)	44

第12表 2号窯焼台観察表	44
第13表 2号窯床面下碗類観察表	45
第14表 2号窯床面下皿類観察表	45
第15表 2号窯灰原碗類観察表	46
第16表 2号窯灰原皿類観察表	46
第17表 2号窯灰原土師質場観察表	46
第18表 3号窯出土碗類器形分類別組合せ表	47
第19表 3号窯碗類観察表（その1）	49
タ 3号窯碗類観察表（その2）	50
タ 3号窯碗類観察表（その3）	51
タ 3号窯碗類観察表（その4）	52
タ 3号窯碗類観察表（その5）	53
第20表 3号窯重ね皿類観察表	53
第21表 3号窯出土皿類器形分類別組合せ表	54
第22表 3号窯皿類観察表（その1）	55
タ 3号窯皿類観察表（その2）	56
タ 3号窯皿類観察表（その3）	57
第23表 3号窯重ね皿類観察表	57
第24表 3号窯床面上碗類観察表（その1）	57
タ 3号窯床面上碗類観察表（その2）	58
第25表 3号窯床面上皿類観察表	58
第26表 3号窯鉢類観察表	59
第27表 3号窯焼台観察表	60
第28表 3号窯灰原出土碗類器形分類別組合せ表	60
第29表 3号窯灰原碗類観察表	61
第30表 3号窯灰原出土皿類器形分類別組合せ表	61
第31表 3号窯灰原皿類観察表	62
第32表 3号窯灰原重ね皿類観察表	62
第33表 3号窯灰原鉢類観察表	62
第34表 SK01出土碗類器形分類別組合せ表	63
第35表 SK01碗類観察表	64
第36表 SK01出土皿類器形分類別組合せ表	65
第37表 SK01皿類観察表	65
第38表 SK02碗類観察表	66
第39表 SK02出土皿類器形分類別組合せ表	67
第40表 SK02皿類観察表	67
第41表 SK02重ね皿類観察表	67
第42表 SK03碗類観察表	68

第43表 SK03皿類観察表	68
第44表 南北トレンチ碗類観察表	69
第45表 南北トレンチ皿類観察表	69
第46表 表採碗類観察表	69
第47表 表採皿類観察表	69
第48表 表採鉢類観察表	69
第49表 碗類皿類の法量比較表	70
第50表 碗類器形分類別組合せ表	71
第51表 皿類高台別法量平均表	71
第52表 皿類器形分類別組合せ表	72
第53表 深廻間B古窯第1・2・3号窯で採取した考古磁気試料番号	79
第54表 深廻間B古窯第1号窯のNRMの磁化測定結果	79
第55表 深廻間B古窯第1号窯の2.5mT消磁後の磁化測定結果	80
第56表 深廻間B古窯第1号窯の5.0mT消磁後の磁化測定結果	80
第57表 深廻間B古窯第1号窯の7.5mT消磁後の磁化測定結果	81
第58表 深廻間B古窯第1号窯の10.0mT消磁後の磁化測定結果	81
第59表 深廻間B古窯第1号窯の15.0mT消磁後の磁化測定結果	82
第60表 深廻間B古窯第1号窯の20.0mT消磁後の磁化測定結果	82
第61表 深廻間B古窯第2号窯のNRMの磁化測定結果	83
第62表 深廻間B古窯第2号窯の2.5mT消磁後の磁化測定結果	83
第63表 深廻間B古窯第2号窯の5.0mT消磁後の磁化測定結果	84
第64表 深廻間B古窯第2号窯の7.5mT消磁後の磁化測定結果	84
第65表 深廻間B古窯第2号窯の10.0mT消磁後の磁化測定結果	85
第66表 深廻間B古窯第2号窯の15.0mT消磁後の磁化測定結果	85
第67表 深廻間B古窯第2号窯の20.0mT消磁後の磁化測定結果	86
第68表 深廻間B古窯第3号窯のNRMの磁化測定結果	86
第69表 深廻間B古窯第3号窯の2.5mT消磁後の磁化測定結果	87
第70表 深廻間B古窯第3号窯の5.0mT消磁後の磁化測定結果	87
第71表 深廻間B古窯第3号窯の7.5mT消磁後の磁化測定結果	88
第72表 深廻間B古窯第3号窯の10.0mT消磁後の磁化測定結果	88
第73表 深廻間B古窯第3号窯の15.0mT消磁後の磁化測定結果	89
第74表 深廻間B古窯第3号窯の20.0mT消磁後の磁化測定結果	89
第75表 深廻間B古窯第1・2・3号窯の考古磁気測定結果	90
第76表 深廻間B古窯群出土炭化材樹種同定結果一覧	94

写真目次

卷頭 1 調査区遠景 南から	i
卷頭 2 調査区近景 1号窯 南西から	ii
卷頭 3 調査区近景 2号窯・3号窯 西から	ii
写真 1 調査区とその周辺 南から	2
写真 2 作業風景	10
写真 3 作業風景	10
写真 4 1号窯全体 西から	14
写真 5 1号窯断割全体 西から	14
写真 6 1号窯焼成室埋土 (d-d') 西から	14
写真 7 1号窯燃焼室埋土 (b-b') 西から	14
写真 8 1号窯焼成室北壁 南西から	14
写真 9 1号窯分焰柱断割 (B-B') 西から	14
写真 10 2号窯全体 西から	19
写真 11 2号窯断割全体 西から	19
写真 12 2号窯焼成室埋土 (b-b') 西から	19
写真 13 2号窯焼成室遺物出土状況 西から	19
写真 14 2号窯煙道部付近の床面状況 西から	19
写真 15 2号窯分焰柱のダンパー部分 西から	19
写真 16 3号窯全体 西から	25
写真 17 3号窯断割全体 西から	25
写真 18 3号窯焼成室埋土 (c-c') 西から	25
写真 19 3号窯分焰柱部分 (b-b') 西から	25
写真 20 3号窯焼成室断割 (D-D') 西から	25
写真 21 3号窯焼成室遺物出土状況 南から	25
写真 22 1号窯灰原全体 西から	30
写真 23 3号窯灰原全体 西から	30
写真 24 SK01・SK02・SK03 全体 西から	31
写真 25 SK01 西から	31
写真 26 SK02 南から	31
写真 27 SK03 (前庭部) 北から	31
写真 28 1号窯皿類	38
写真 29 2号窯皿類	41
写真 30 2号窯皿類 (その1)	42
2号窯皿類 (その2)	43
写真 31 2号窯焼台	44
写真 32 2号窯灰原皿類	46
写真 33 2号窯灰原土師賈場	46

写真 34 3号窯碗類	48
写真 35 3号窯碗類特殊品	49
写真 36 3号窯皿類（その1）	54
3号窯皿類（その2）	55
写真 37 3号窯床面上碗類	57
写真 38 3号窯床面上皿類	58
写真 39 3号窯鉢類	59
写真 40 3号窯焼台	60
写真 41 3号窯灰原碗類	61
写真 42 3号窯灰原皿類	62
写真 43 3号窯灰原壺類	63
写真 44 SK01 碗類	63
写真 45 SK01 皿類	65
写真 46 SK02 碗類	66
写真 47 SK02 皿類	67
写真 48 SK03 碗類	68
写真 49 SK03 皿類	68
写真 50 表採碗類	69
写真 51 出土炭化材樹種1	95
写真 52 出土炭化材樹種2	96



第1章 調査概要



調査前全景 西から

第1節 位置と地形

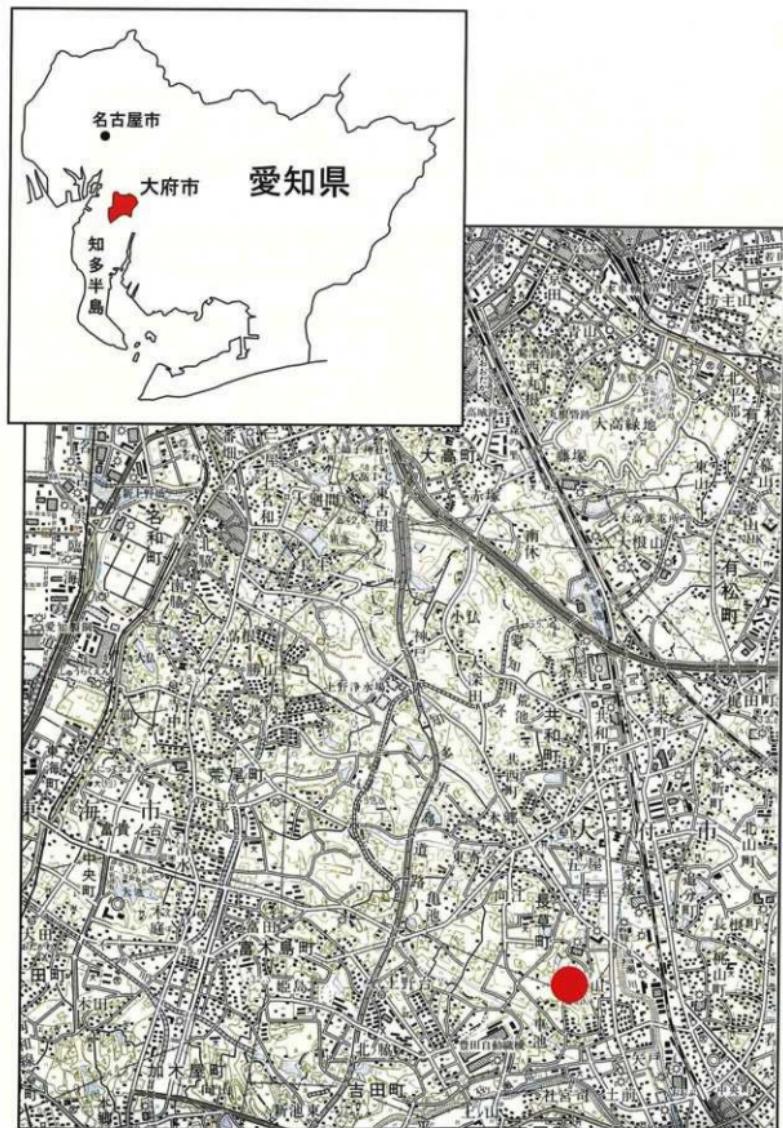
大府市は知多半島の基部に位置し、南西の端を頂点とする二等辺三角形の市域を形成する。面積は33.68km²である。市域は主に丘陵地から成るが、中央部には丘陵地を二分する北西—南東方向の低地があり、そこをJR東海道線が通っている。東部は尾張丘陵と総称される名古屋市の東部の丘陵につながっている。西部は大府丘陵と呼ばれている。これらの丘陵は北東—南西方向に標高を下げ、市域では丘陵の最も高いところで40~50mとなっている。このため大府丘陵の方がややなだらかな地形となっている。丘陵は常滑層群と呼ばれる地層からなり、礫層、砂層、シルト層から構成される。常滑累層は下部から上部にかけて構成粒子が大きくなり、上部層の表出している尾張丘陵では礫層が多く挟まるようになる。このような地層的な特徴を有する大府丘陵に深廻間B古窯跡群は立地している①。

本古窯跡群は市道東浦共和線に隣接しており、西へ約100m程入った北西方向にゆるやかに傾斜した畑に位置していた。当地はほとんどが丘陵を人力で開墾したところで、周辺は雑木林にかこまれた畑であった。発見時は窯体の一部が畑と雑木林の境界を画する削りだされた崖に露出していた。発見時はどの程度残存していたのかは不明であったが、範囲確認調査により3基の存在を確認し、しかもかなり良好な状態であることが明らかとなった。

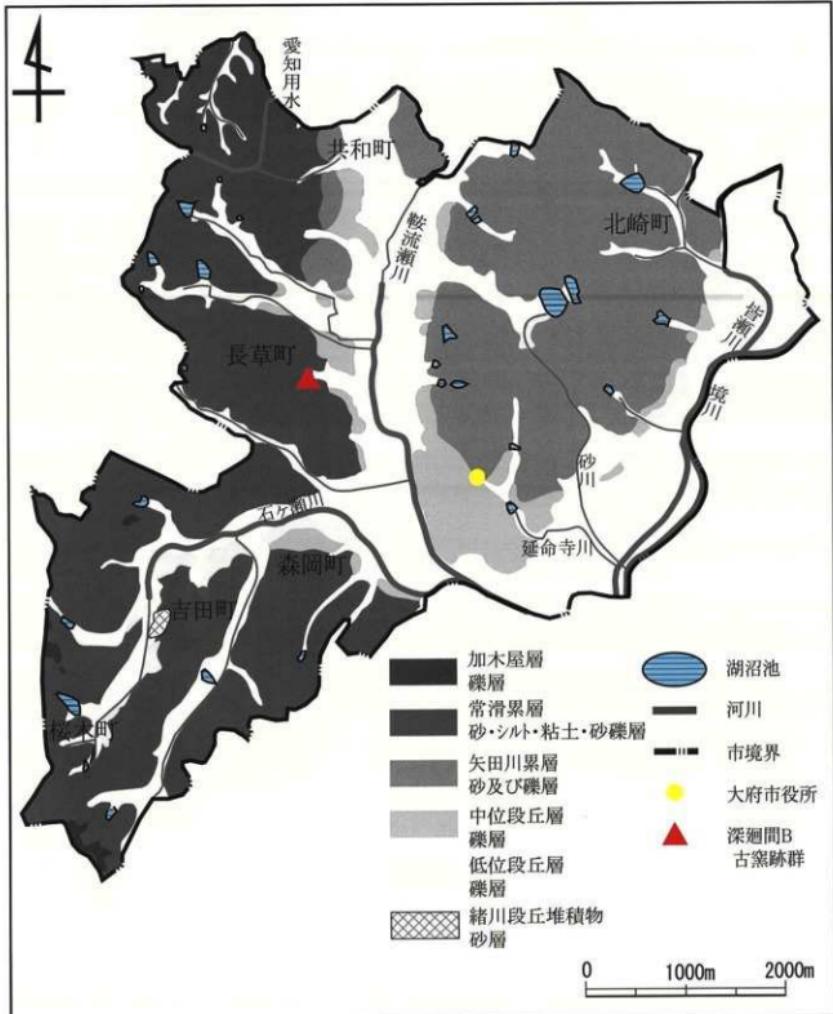
註①『大府市誌』資料編 自然 3~18頁（1988年刊、大府市役所）



写真1 調査区とその周辺 南から



第1図 遺跡位置図（国土地理院 1／5万地形図「名古屋南」）



第2図 大府市の表層地質図

引用文献：『日本地質図体系』(名古屋南部、知多半島より加筆・修正)

第2節 歴史的環境

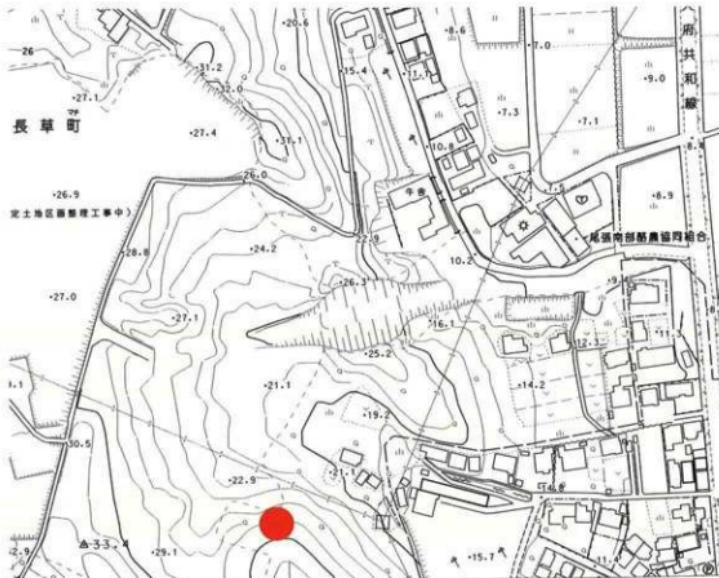
深廻間B古窯跡群は市中心部に近接し、市庁舎やJR大府駅のある市中心街から直線距離にして北西約1.2kmの場所である。ここは前述したように大府丘陵の一角であるが、地形的には境川に注ぐ鞍流瀬川水系の丘陵地のやや奥まった所である。北東側に緩やかに傾斜した斜面に立地し、標高約25～30mである。

周辺には縄文から古代までの遺跡は発見されていない。中世に入る頃より古代（5世紀）から焼き物生産が始まられた流れを受け継いだ、猿投山山麓における灰釉陶器窯（いわゆる猿投山西南麓古窯群）が進出し、その系譜を引くと言われる中世山茶碗窯が丘陵地で生産を開始する。成立は12世紀初頭といわれ、常滑古窯群とも知多古窯群とも称される。大府市はいずれの古窯群とも境を接する地区で、尾野善裕氏は猿投山西南麓古窯群と知多古窯群との境を市の中心を通る東海道本線で分けている^②。この想定でいけば、深廻間B古窯跡は後者に含まれる。これが妥当かどうかは調査遺跡の増加と新発見の古窯から、検討の余地があると思われるが今は從っておくことにする。

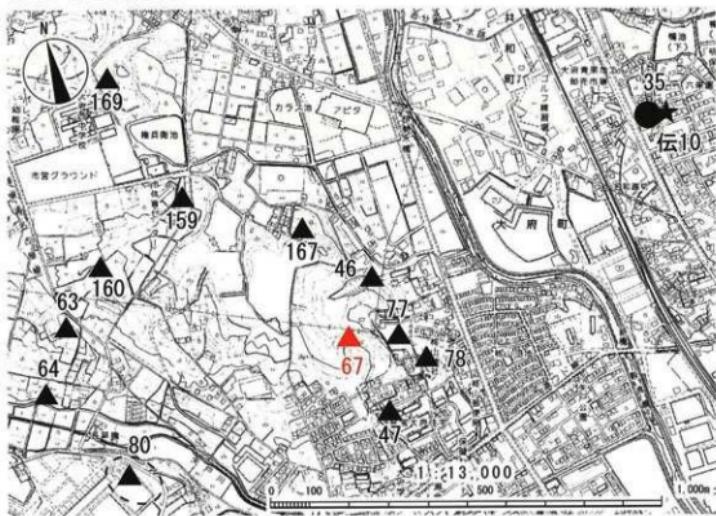
平安時代になると、猿投山西南麓古窯群と目される灰釉陶器系の野々宮古窯跡や高根山C古窯群を最古の事例としてこの地域でも窯業生産が丘陵地に登場し、その流れを汲むと思われ、碗と皿を中心と焼成した中世山茶碗窯が市内全域で展開する。代表的な遺跡として12世紀代に鳥羽離宮安楽寺院の瓦を生産した吉田第1・第2号窯（吉田町1968・69市教委調査）、大量の広口長頸瓶を焼いた神明古窯群（吉田町1995市教委調査）やへら描文をもつ壺が出土した森岡第1号窯群（森岡町1996県埋文セ調査）がある。これらは石ヶ瀬川水系の丘陵地で、年代的に古い窯跡が多く、大府市での窯業生産の歴史となすことができる。一方鞍流瀬川水系の深廻間B古窯跡群周辺には平安時代の遺跡は知られていないが、同古窯群から西に伸びる丘陵地には深廻間A古窯群（長草町1997市教委調査）、深廻間C古窯群（2004市教委調査）、桜山A古窯・桜山B古窯・桜山C古窯・車池A古窯・車池B古窯（以上長草町）などの窯業遺跡が確認でき、いずれも丘陵地に存在している。時代的には12世紀末期から14世紀頃と想定される、いわゆる中世山茶碗窯である。

大府市では現在までに174カ所の遺跡を確認しているが、そのうち149カ所が窯業関連遺跡で、85.6%に及んでいる。遺跡の分布をみると、空白地帯が存在するが、ほぼ市内全域に古窯が確認され、その立地はすべて丘陵地である。すべての古窯跡の築窯年代が解明されているわけではないが、焼成品や調査結果から推測すると、この地は平安時代末期から鎌倉時代末期の約200年間ほどに集中している。つまり、この時期当地は一大窯業地帯だったのではないかと想像される。今後、遺跡分布調査が進展すれば、さらに多くの窯跡が発見され、この仮説が裏付けされると確信される。

註② 尾野善裕編『NN330号窯発掘調査報告書』137頁（1994年刊、名古屋市教育委員会）



第3図 調査地点地形図



第4図 周辺遺跡分布図（1／1.3万）

平成17年3月9日現在

番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	子安神社遺跡	弥生～中世	59	海陸庵古窯群	鎌倉中期	117	山中遺跡	古代～中世
2	共栄遺跡	绳文	60	円通寺古墓	近世	118	兒子廻間A遺跡	古代
3	東光寺経塚	江戸	61	上入道古窯	中世	119	兒子廻間B遺跡	古代
4	賀聖院貝塚	中世	62	長根山A古窯群	中世	120	下入道子窯	中世
5	惣作遺跡	弥生～鎌倉	63	立根B古窯群	中世	121	坊主山A古窯群	中世
6	桜敷貝塚	绳文晚期	64	立根C古窯群	中世	122	井田B古窯	中世
7	高山古墳	古墳後期	65	立根D古窯群	中世	123	梶田B古窯群	中世
8	正官塙	中世	66	立根E古窯	中世	124	石畠土古窯群	中世
9	南島貝塚	不明	67	深瀬廻間古窯群	中世	125	箕手E古窯群	中世
10	石丸遺跡	中世	68	西浜田遺跡	不明	126	古井戸A古窯	中世
11	源吾遺跡	古墳	69	二ツ池東古窯	中世	127	長峰北A古窯	中世
12	野々宮古窯	平安中期	70	藤井宮御酒瓶子出土地	中世	128	長峰北B古窯	中世
13	森岡第1号窯群	12世紀中	71	子古窯	中世	129	長峰北C古窯群	中世
14	森岡第2号窯	13世紀	72	鴨池北古窯群	中世	130	越染西古窯	古代
15	北向古窯	13世紀	73	鴨池東古窯	中世	131	井戸場古窯群	中世
16	旧中部病院第1号窯	12世紀	74	下北山古窯群	中世	132	西定保根A古窯群	中世
17	旧中部病院第2号窯	不明	75	川池東古窯	不明	133	高根山B古窯群	古代～中世
18	旧中部病院第3号窯	不明	76	石龜古窯	不明	134	高根山C古窯群	古代
19	ハンヤ古窯	13世紀	77	桃山B古窯	不明	135	山手C古窯群	中世
20	吉田第1号窯	12世紀	78	桃山C古窯	中世	136	上り坂古窯	中世
21	吉田第2号窯	12世紀	79	兩瀬池西古墳	古墳	137	山之神社北古窯	中世
22	律粉古窯	13世紀	80	山口古窯群	不明	138	八代山A古窯	中世
23	越染第1号窯	13世紀	81	大高山西古窯	不明	139	八代山B古窯	中世
24	越染第2号窯	不明	82	越染第3号窯	中世	140	八代山C古窯	中世
25	大日古窯	不明	83	円通寺経塚	江戸中期	141	西定保根B古窯群	古代～中世
26	外輪第1号窯	不明	84	大通間古窯	中世	142	箕手D古窯	中世
27	外輪第2号窯	不明	85	みどり公園古窯	中世	143	箕手E古窯群	中世
28	外輪第3号窯	不明	86	高根山西古窯	中世	144	上東山A古窯	中世
29	外輪第4号窯	不明	87	口無池西古窯	中世	145	上東山B古窯	中世
30	骨田未古窯	12世紀	88	北崎大池北古窯	平安	146	立合池東古窯群	中世
31	吉川城跡	室町	89	箕手A古窯	中世	147	立合池西A古窯群	中世
32	横根城跡	戦国	90	箕手B古窯	中世	148	立合池西B古窯群	中世
33	追分城跡	室町	91	ガンジ山A古窯群	13世紀	149	古井戸B古窯	中世
34	石ヶ瀬古戦場跡	室町	92	律粉東古窯	中世	150	鷺ノ烟A古窯	中世
35	大清水井戸跡	室町	93	上代古窯群	中世	151	鷺ノ烟B古窯	中世
36	もしも井戸跡	不明	94	丸根城跡	不明	152	鷺ノ烟C古窯	中世
37	芦沢井戸跡	中世	95	大澤田古窯	12世紀	153	馬場東古窯	中世
38	福池古窯	中世	96	荒池古窯群	中世	154	東端B古窯	中世
39	大根古窯	中世	97	砂原古窯	中世	155	毛分田A古窯	中世
40	高根山古窯群	中世	98	木根A古窯群	中世	156	毛分田B古窯	中世
41	梶田古窯	中世	99	木根B古窯群	中世	157	家下古窯	中世
42	別所古窯群	中世	100	久分古窯群	中世	158	上家下古窯	中世
43	椎兵衛池古窯	中世	101	湘戸A古窯群	中世	159	車池A古窯	中世
44	名高山西古窯群	中世	102	奥古窯群	中世	160	車池B古窯	中世
45	立根A古窯群	中世	103	湘戸A古窯	中世	161	森東古窯	中世
46	深瀬廻間A古窯群	鎌倉	104	北山古窯	中世	162	前田A古窯	中世
47	桃山A古窯群	中世	105	石屋古窯群	中世	163	前田B古窯	中世
48	石ヶ瀬古窯	中世	106	長草城跡	不明	164	前田C古窯	中世
49	江幡古窯	中世	107	長根山B古窯	中世	165	森前古窯	中世
50	延命寺貝塚	不明	108	普門寺遺跡	中世	166	骨田池南古窯	中世
51	割木A古窯群	中世	109	寺田遺跡	中世	167	深瀬廻間C古窯群	中世
52	東端古窯	中世	110	大高山西古窯群	中世	168	子安古窯	古代～中世
53	才田A古窯	中世	111	影清屋敷跡	不明	169	上田ノ松古窯	中世
54	才田B古窯	中世	112	外輪南古窯	中世	170	瀬戸G古窯群	中世
55	山手A古窯	不明	113	炭焼遺跡	中世	171	中村遺跡	古代～中世
56	山手B古窯	不明	114	上り戸古窯	中世	172	ウドA古窯	古代
57	羽根山古窯群	中世	115	井田古窯群	中世	173	ウドB古窯	古代
58	神明古窯群	平安末期	116	池之分古窯	不明	174	森岡平子古窯	中世

第1表 大府市遺跡一覧表

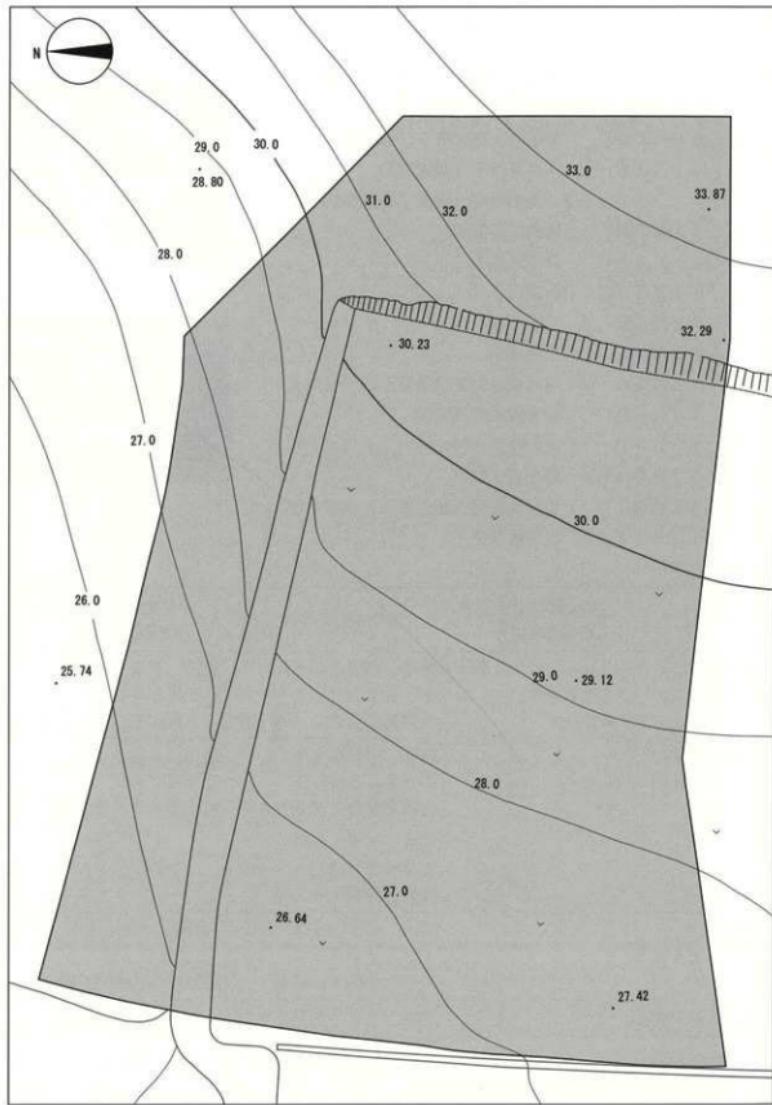
第3節 発掘調査に至る経緯と調査経過等

深廻間B古窯跡群は、当地区で区画整理事業が行なわれることに先行して、遺跡分布調査の実施により新たに確認された遺跡である。この窯跡は、地主以外は知られていない場所であった。

市内での区画整理事業立案が活発であった1980年代後半には長草町深廻間地区でも計画があり、平成7年9月には区画整理組合が設立され、大府深廻間特定土地区画整理事業として事業化された。組合設立前後から大府市役所区画整理課から愛知県教育委員会へ提出された「埋蔵文化財の有無の照会」により、愛知県教育委員会文化財課（現文化財保護室）と協力して区域内における埋蔵文化財の把握するための分布調査を実施した。それにより、2箇所の遺跡を確認または発見するに及び、それぞれ深廻間A古窯群と深廻間B古窯群と命名し、埋蔵文化財包蔵地をして「大府市遺跡等分布図」に掲載した。その後、造成計画が決まり、造成工事前の事前調査として調査に着手した。本調査に先立ち、平成8年3月27日に範囲確認調査（遺跡の範囲・規模・残存状況などを確認）を実施し、畑の中と雑木林との境界とにトレーンチを設定し、その結果、3基の窯体を確認した。

平成11年10月に本調査の準備に入り、10月20日から草刈と樹木の伐採、同26日から表土剥ぎ、10月29日に国土座標VII系に基づいて5m×5mのグリッドを設定後、本調査を開始した。調査は、市から発掘調査の業務委託を受けた朝日航洋株式会社名古屋支店が行い、市歴史民俗資料館と愛知県教育委員会が調査進行を監督する形で行った。調査面積は約1000m²である。

抜根と表土剥ぎの段階で窯跡が3基と灰原2箇所であることが再確認された。調査の通例として、灰原の検出を優先し、その後窯体掘削に移行する手順で調査を開始した。灰原はほとんど消滅した状態であったが、窯体はほぼ全体が残り、3基が平行して並んでいた。区別するために窯に対面して左から順に1号窯・2号窯・3号窯と名付けることにした。窯内には縦方向（窯体と平行）1本と横方向（窯体と直交）3本ベルトを設定した上でそこを残す形で掘削し、断層図面作成後、12月2日に窯内掘削は完了した。12月4日の午前には空撮を行い、窯体構造解明のための床面の断制作業に移行した。12月7日には富山大学による熱残留磁気測定調査のサンプリングを行なわれた後、各窯の床面断制作業に進んだが、いずれの窯の焼成室にも床面下施設と呼ばれる人工的な排水施設は施されていなかったため、これが存在しないことを確認したところで、すべての作業を終え、12月21日に調査が終了した。その後24日には出土品・作業道具・機器や事務所を調査区から搬出して、現場撤収が終了した。



第5図 調査前地形図

1 : 200
0 1 5 10m

調査日誌抄

平成 11 年 10 月 20 日 調査区設定および伐採作業開始
 10 月 26 日 表土剥ぎ
 10 月 29 日 基準および杭打ち、調査打合せ
 11 月 2 日 作業員投入と調査開始
 (遺構検出と灰原等掘削開始)
 11 月 5 日 窯内掘削開始
 11 月 18 日 調査区拡張
 11 月 30 日 調査打合せ
 12 月 2 日 窯内完掘
 12 月 4 日 空撮測量
 12 月 7 日 热残留磁気測定調査サンプリング
 12 月 8 日 窯体断製作業開始
 12 月 9 日 大府西中学校生徒（45名）見学
 12 月 20 日 調査完了検査
 12 月 21 日 出土品を資料館へ搬入、調査終了
 12 月 24 日 現場撤収完了



写真2 作業風景



写真3 作業風景

区分	大府深廻間特定土地 区画整理組合	大府市教育委員会	愛知県教育委員会 (愛知県警)
文化財保護法 第57条の2 (旧法)	届出、平成11年 9月24日 第28号	進達、平成11年 10月25日 大教生発第170-1号	通知、平成11年 10月25日 11教文第63-331号
文化財保護法 第98条の2 (旧法)		通知、平成11年 11月25日 大教生発第185-1号	通知、平成11年 12月7日 教文第62-50号
終了届		届出 平成11年 12月22日 大教生発第193号	
遺失物法 第1条による届出		届出 平成11年 12月24日 大教生発第194号	(受理 平成11年 12月24日 愛知県東海警察署)
埋蔵文化財保管証		平成11年12月22日 大教生発第193号	

第2表 発掘調査に伴う法的手続き

第2章 遺構



調査区全景 西から



写真4 1号窯全体 西から



写真5 1号窯断面全体 西から



写真6 1号窯焼成室埋土（d-d'） 西から



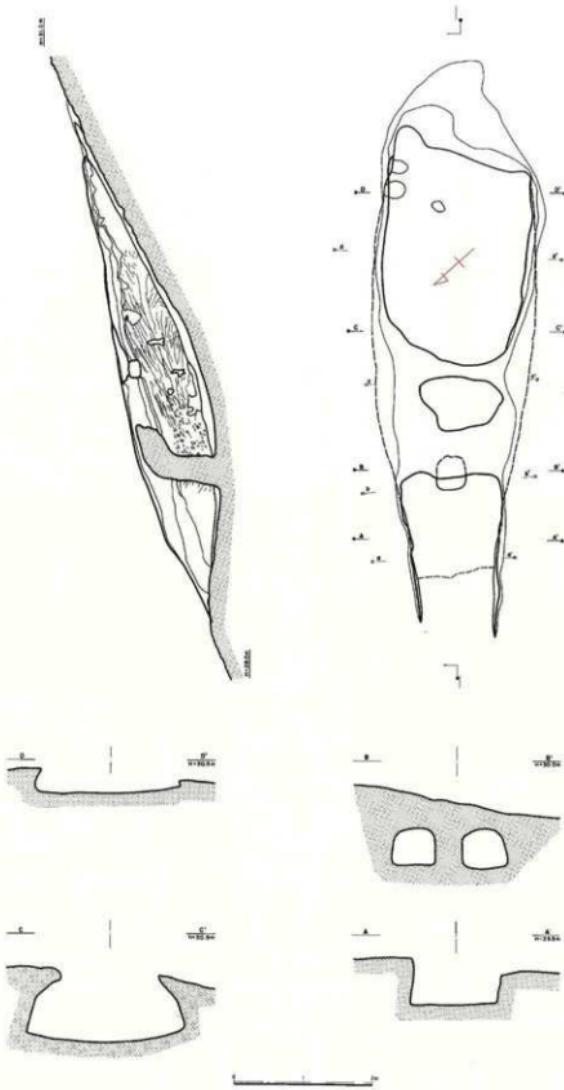
写真7 1号窯焼成室埋土（b-b'） 西から



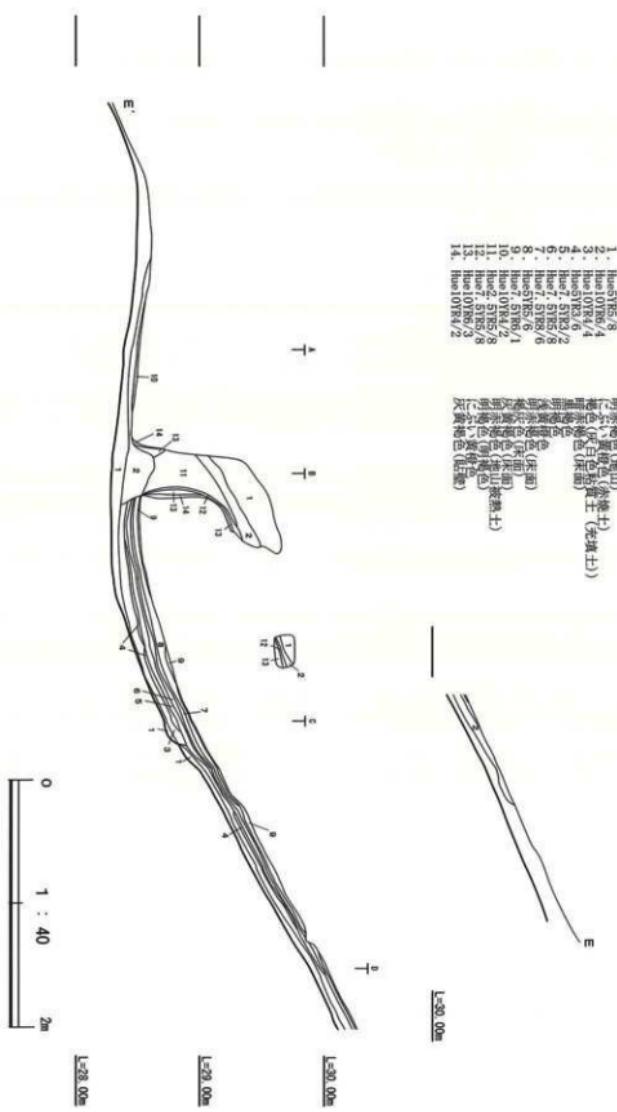
写真8 1号窯焼成室北壁 南西から



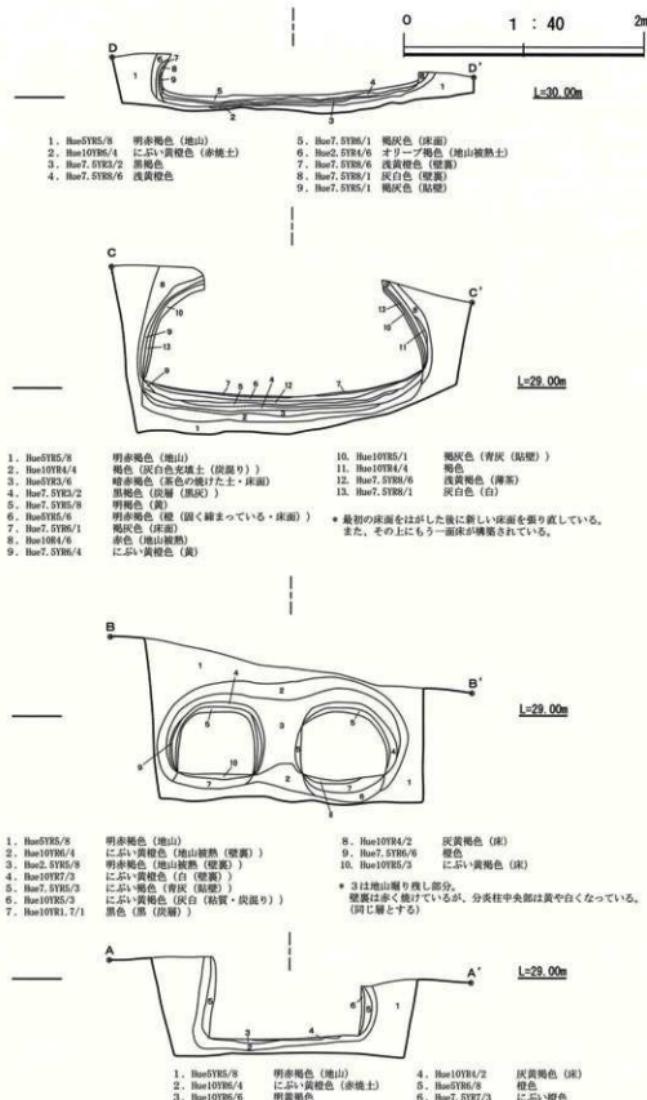
写真9 1号窯分焰柱断面（B-B'） 西から



第7图 1号窑窑体实测图



第8図 1号窓断面セクション図1



第9図 1号窯断面セクション図2

2号窯

2号窯は、3基の窯体の真中に位置し、全体の残存状態は良好な窯体である。焚口・燃焼室・分焰柱・焼成室と煙道部の床面が一部残っていた。天井も一部存在するがほとんどが崩落している。

窯体の主軸方向はS-52.5°-Eで、残存長は11.5mである。焚口付近の標高は28.6mで窯体高は3.0m（標高31.6m）である。

燃焼室は焚口から分焰柱に向かって徐々に開くように広がり、焚口入口の幅が1.1mで分焰柱手前の幅は1.6mである。床面の傾斜は-10°で緩やかに下っている。床面の被熱部分も合わせた深さは最大で32cmである。側壁は床面から直立するように立ち上がり、高さが60cmで天井は崩落している。

分焰柱は1号窯同様に地山を掘り残して表面に粘土を施している。分焰柱左側の天井は残存するが右側の天井は崩落していた。分焰柱の焼成室側は、床面を貼り直した際に大きく修築した痕が見受けられる。通焰孔の両方ともに全体を粘土で補修している。分焰柱の平面形は梢円で、窯と同じ南東方向に梢円であった。大きさは継軸方向に74cm、これと直交する幅が64cmである。通焰孔は左側が88cmで高さが84cm、右側は76cmで高さは天井が崩落していて不明である。

通焰孔左側の燃焼室と焼成室の境目床面にはダンバーが作られていた。ダンバーの機能については、窯内に効率よく火を送るための風を調節する説と同様の役割をするものだと考えられる。ここでは床面に焼台を2段に重ねたものを6列並べ、その周りを粘土で固めている。その残存状態は良好で、高さは15cmあり、床面と接触する部分の幅は40cmであった。このダンバーは分焰柱を貼り土で一度修復した横に設置されていた。

焼成室は全長が6.5mで高さが2.3mである。床面の平面形は分焰部の所から緩やかに広がる。床面の最大幅は分焰柱より1.5m上がった所で2.8m、そこから徐々に狭くなる。床面の傾斜は、ほとんど屈折しない弧を描く形である。焼成室上部の煙道部に近い床面には、ナデではなく押し当てた手の跡が付着し、そこには焼台が並べられた形跡は無かった。焼成室の幅が一番広い部分から入口にかけて、所々抜けて無くなっていたが、焼台がそのままの位置に多く残されていた。

また分焰柱中心点から3m上がった所の床面下では、大きく掘り込まれて改修した痕が見受けられる。一次面の床面を20cm掘り込んで二次面を築き、その上に最終床面を形成している。灰白色粘土層を敷いているが床面を貼る時はどの丁寧さではなく、いくつかの塊のブロックで床下を整えているよう見える。床下を何故このように深く掘り込まれているのかは不明である。

煙道部の残りは悪く、床面のほんの一部被熱した部分が薄く残っているだけである。焼成室と煙道部の境目部分から大きく削平されているため詳細は不明である。床面は赤く焼け締まっている程度でその他のことは確認出来なかった。



写真10 2号窯全体 西から



写真11 2号窯断面全体 西から



写真12 2号窯焼成室埋土(b-b') 西から



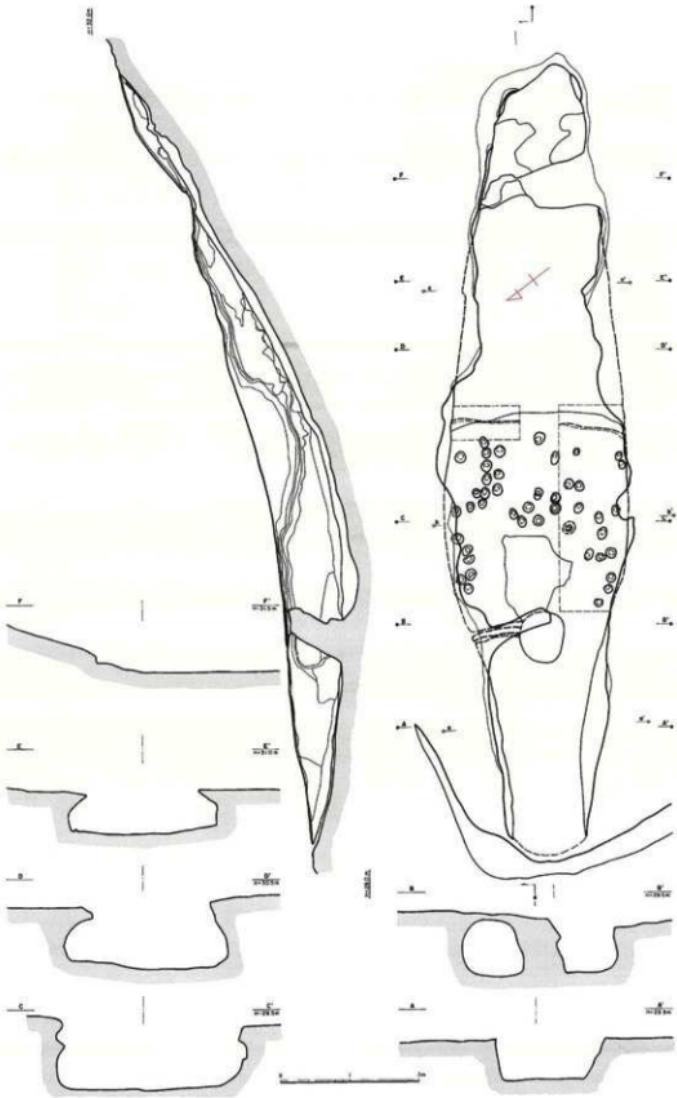
写真13 2号窯焼成室遺物出土状況 西から



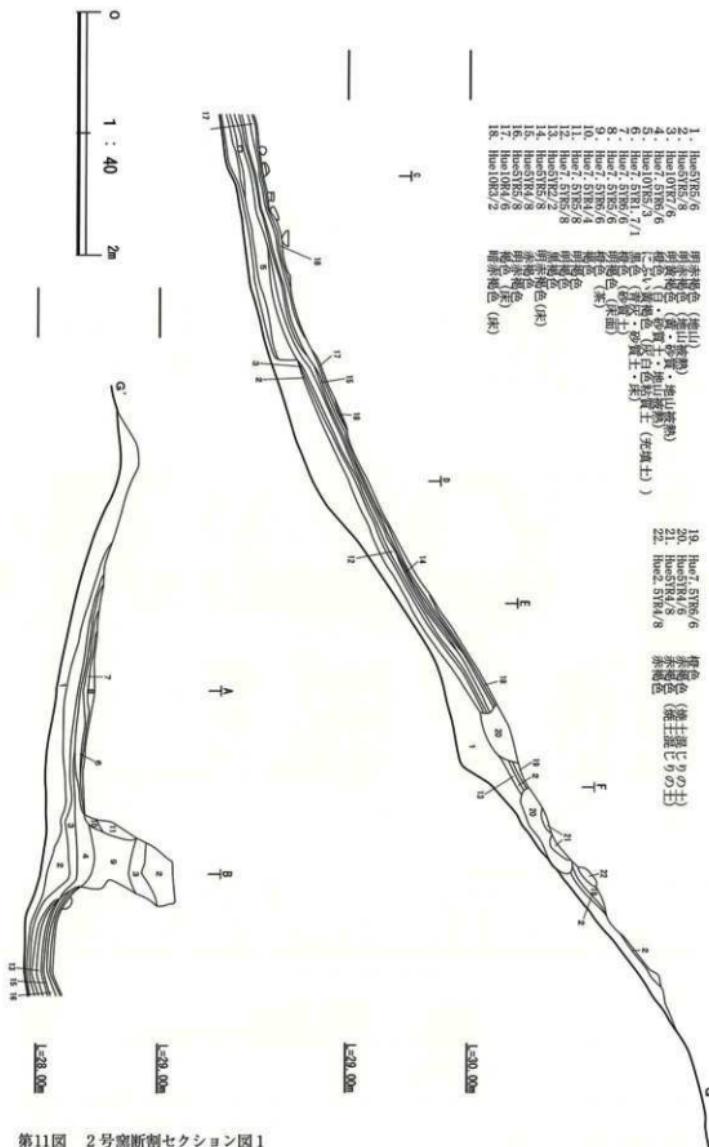
写真14 2号窯煙道部付近の床面状況 西から



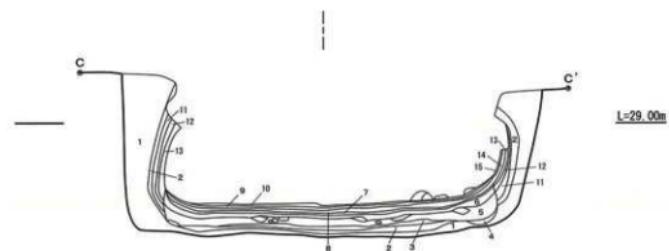
写真15 2号窯分焰柱のダンパー部分 西から



第10図 2号窯窯体実測図

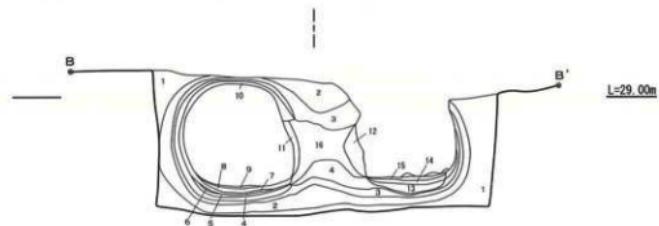


第11図 2号窓断面セクション図1



1. Hue5YR5/6 明赤褐色(地山)
2. Hue5YR5/8 明赤褐色(地山被熱)
3. Hue10YR7/6 明黄褐色(地山被熱, 伏牴有)
4. Hue7.5YR5/6 天井の崩れ落ちたもの
5. Hue10YR5/3 にぶい黄褐色(灰白粘質土(充填土))
6. Hue5YR2/2 黒褐色(灰(灰・床面))
7. Hue5YR4/8 明赤褐色(黄)
8. Hue5YR4/6 明赤褐色(黄)
9. Hue10R4/6 明赤褐色(黄)
10. Hue10R3/2 脈赤褐色(青(床面))
11. Hue10YR6/6 明黄褐色(黄)(白)
12. Hue10YR6/4 にぶい黄褐色(灰)
13. Hue10YR4/3 明褐色(黄)
14. Hue10YR3/3 明褐色(黄)
15. Hue7.5YR2/3 脉褐色(壁(2回目の壁))

* 1 床をはがし張り直している。

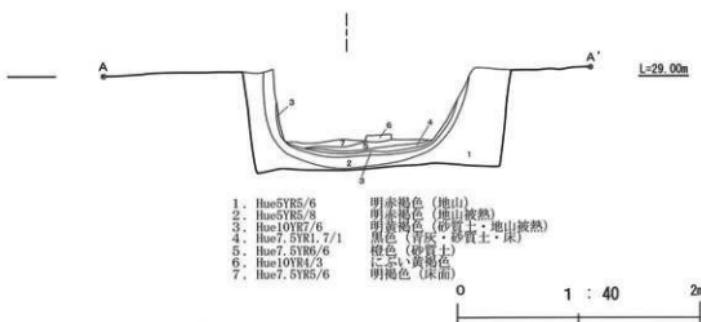


1. Hue5YR5/6 明赤褐色
2. Hue5YR5/8 明赤褐色
3. Hue10YR7/6 明黄褐色
4. Hue7.5YR6/6 にぶい黄褐色
5. Hue10YR4/3 にぶい黄褐色
6. Hue7.5YR3/4 明褐色
7. Hue5YR2/2 明褐色
8. Hue7.5YR5/6 明赤褐色
9. Hue5YR5/6 明赤褐色
10. Hue5YR4/1 極灰色
11. Hue7.5YR5/6 明褐色
12. Hue5YR4/4 脉褐色
13. Hue10YR3/1 明褐色
14. Hue10YR5/4 脉褐色
15. Hue5YR5/4 脉褐色
16. Hue7.5YR5/6 橙色

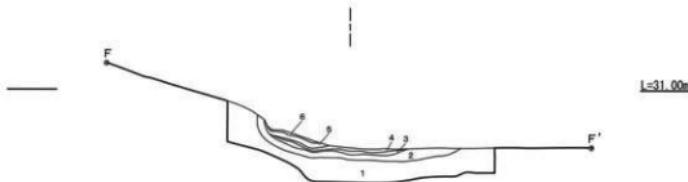
* 脊壁が最終床面の下に入り込んでいる。

床は2面みられる。

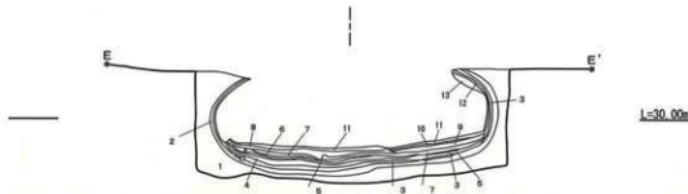
分岐性は施り残して造られ、その周りに貼壁をしている。



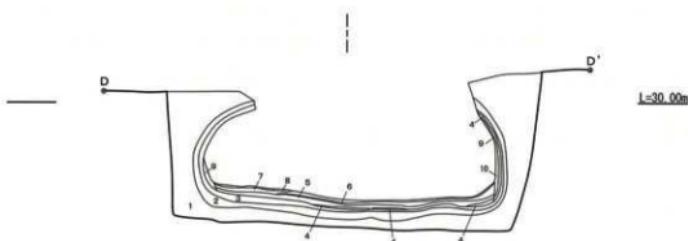
第12図 2号窯断面セクション図2



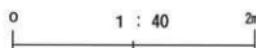
1. Hue5YR5/6 明赤褐色 (地山)
 2. Hue5YR5/8 明赤褐色 (地山被熟)
 3. Hue5YR2/2 黑褐色
 4. Hue7.5YR5/8 棕色
 5. Hue5YR5/6 明茶褐色
 6. Hue5YR2/4 極暗赤褐色



1. Hue5YR5/6 明赤褐色 (地山)
 2. Hue5YR5/8 明赤褐色 (地山被熟)
 3. Hue10YR7/6 明黄褐色
 4. Hue7.5YR5/8 棕色
 5. Hue5YR5/6 明茶褐色 (床)
 6. Hue5YR2/2 黑褐色 (黑灰)
 7. Hue5YR4/8 赤褐色
 8. Hue5YR5/8 明赤褐色
 9. Hue6/8 棕色
 10. Hue10R4/6 棕色
 11. Hue10R3/2 明茶褐色 (床)
 12. Hue7.5YR8/1 极白色
 13. Hue10YR5/1 極灰色 (贴壁)



1. Hue5YR5/6 明赤褐色
 2. Hue5YR5/8 明赤褐色
 3. Hue10YR7/6 明黄褐色
 4. Hue7.5YR5/8 棕色
 5. Hue5YR2/2 黑褐色
 6. Hue5YR4/8 赤褐色
 7. Hue5YR5/8 明赤褐色
 8. Hue10YR5/1 棕色
 9. Hue7.5YR8/1 极白色
 10. Hue10YR5/1 極灰色 (壁)



第13図 2号窯断面セクション図3

3号窯

3号窯は、3基の内一番南に位置し、全体の残存状態は良好で、前庭部に唯一3つの作業用と思われる土坑（SK）を伴う窯体である。焚口・燃焼室・分焰柱・焼成室の半ばまで残存し、その上部は1号窯同様に土取りにより滅失していた。天井は、分焰柱付近以外の所は崩落し消滅している。

窯体の主軸方向は、S-70°-Eで残存長は7.95mである。焚口付近の標高は28.65mで、窯体高は2.35m（標高31.0m）である。

燃焼室は焚口から奥へ直線的に開き幅に大きな変化は見られない。焚口入口の幅は1.2mで分焰柱手前では幅が1.36mである。床面の傾斜は入口で-12°、入口から分焰柱側へ1m行った所で22.5°に傾斜が変化している。他の窯体で床面下が直線的で緩やかであったのに対し、3号窯の床面はやや急な作りになっている。側壁は床面から直立するように立ち上がっている。

分焰柱は、後に大きく改修され、焼成室側の分焰柱は深くはないが削り採られて壁を貼り、それに伴って両通焰孔の側壁・天井も貼り壁で補修されている。分焰柱の平面形はほぼ楕円であるが、窯内センターラインを中心として45°傾いた窯体に直交しない形である。最大幅は1mで最小幅は80cmである。通焰孔の左幅は80cmで高さが80cmである。右幅は85cmで高さが90cmである。3基の中で一番大きな通焰孔である。燃焼室までの床面は直線的であったが、分焰柱部分に差し掛かると屈曲し、断面図B-B'部分では幅が1.8mに広がっている。

焼成室は分焰柱中心点からセンターライン上に5m残存し、高さが2.4mである。床面の深さは6cmである。床面の平面形は分焰柱手前付近から緩やかに広がり、最大幅は分焰柱中心点から2m上がった所で2.8mである。床面の残存状態は悪く、剥離した部分が多く見られる。特に中央部が激しく痛み露出した被熱層をさらに掘り下げている。床面傾斜は分焰柱直後から1.5m付近までは平坦であるが、そこから弧を描くように傾斜している。

また、焼成室下半分には焼台がきれいに整然と並べられた状態で、1列あたりの個数は12個であった。入口付近の焼台の中には、小皿だけを乗せた焼台も一部見受けられた。また、焼台の上には遺物も多く残されていた。床面は改修されており、一次面を取り除いた後に二次面を築いている。他の2基とは異なり焼成室の上半分が大きく改修されており、下半分には改修痕が見られなかった。床面は少なくとも2回以上築かれたと考えられる。

側壁は燃焼室の時とは違い丸く立ち上がる。最大で1.3mの高さまで残る所がある。また、天井の崩落は焼成室内に遺物が存在することから、焼成中に崩落したものと思われる。床面下には排水溝などの施設は見受けられなかった。



写真16 3号窯全体 西から



写真17 3号窯断面全体 西から



写真18 3号窯焼成室埋土 (c-c') 西から



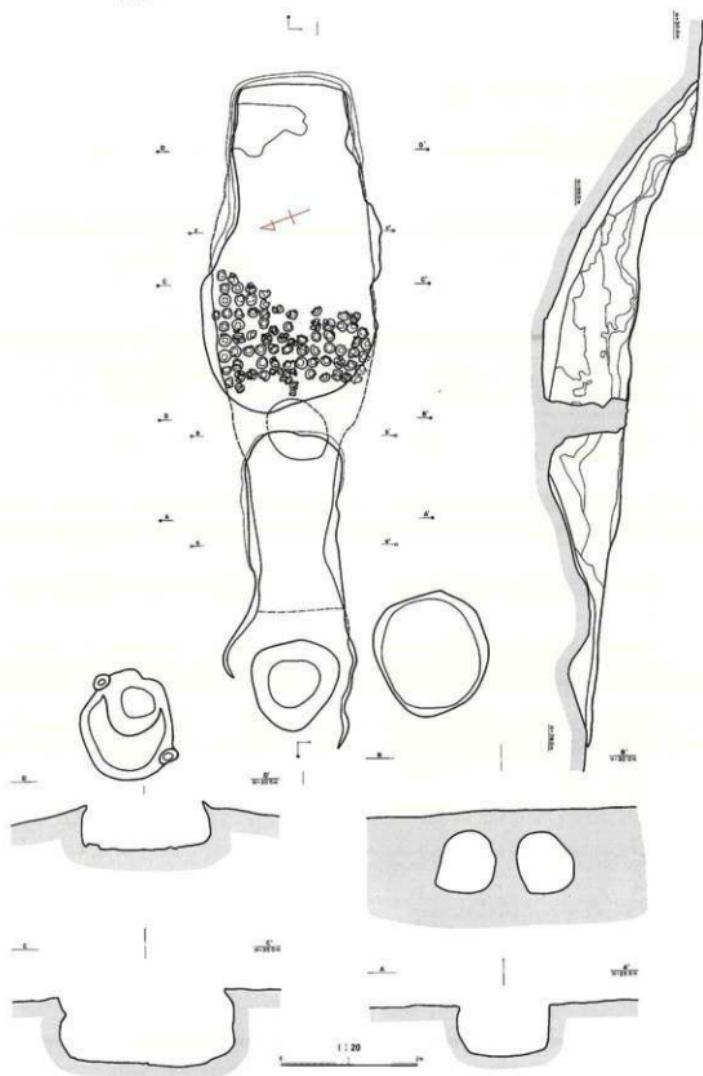
写真19 3号窯分焰柱部分 (b-b') 西から



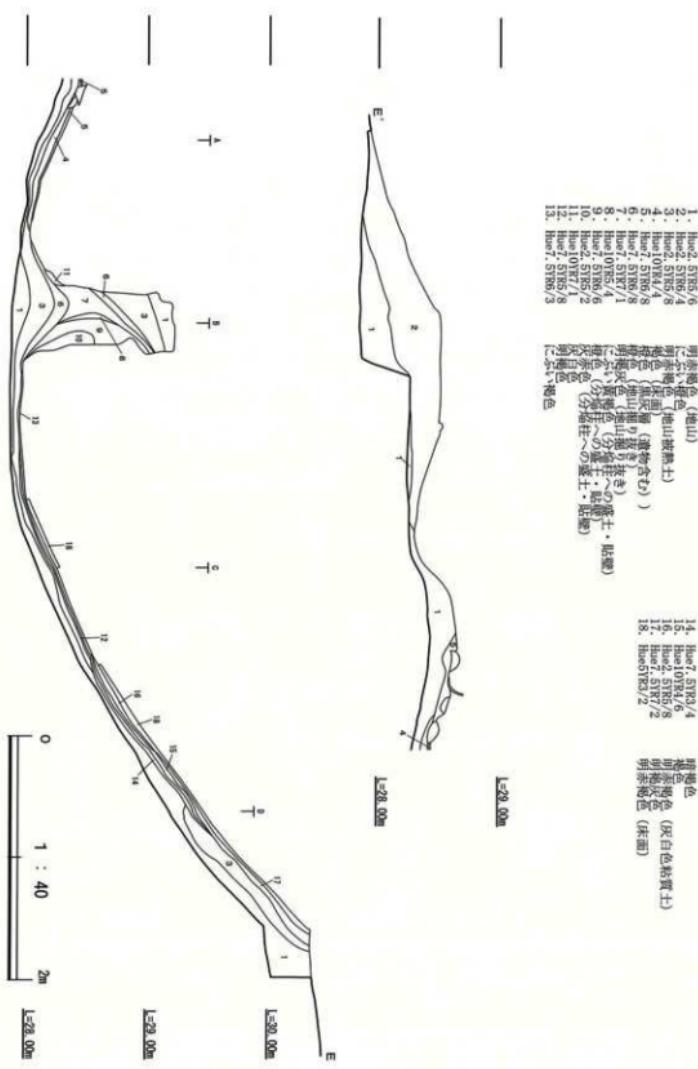
写真20 3号窯焼成室断面 (D-D') 西から



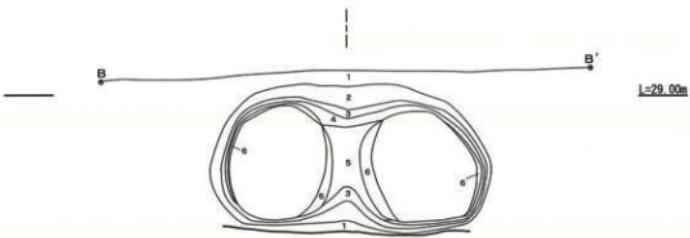
写真21 3号窯焼成室遺物出土状況 南から



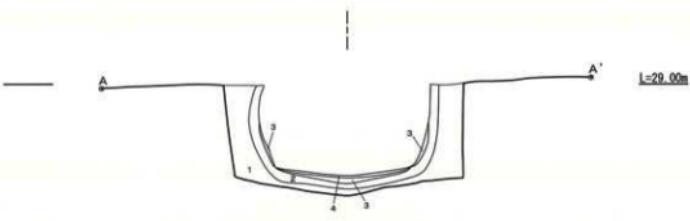
第14图 3号窑窑体实测图



第15図 3号窯断面セクション図1



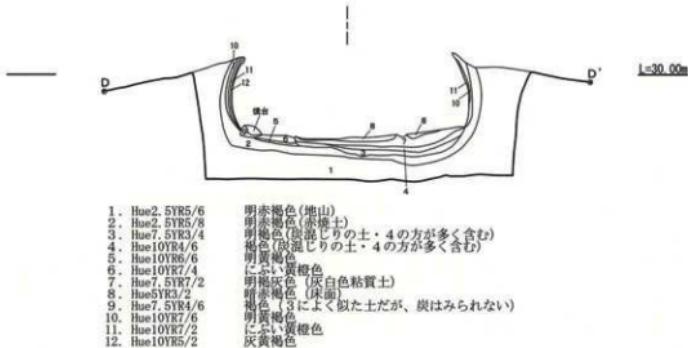
1. Hue2.5YR5/6 明赤褐色(地山・砂質土)
 2. Hue2.5YR5/8 明赤褐色(赤埴土)
 3. Hue7.5YR6/8 棕色(地山・盛り抜き)
 4. Hue7.5YR7/1 明褐色(地山・盛り抜き)
 5. Hue7.5YR6/6 棕色(分岐柱への盛土)
 6. Hue7.5YR2/1 黒色(底盤)



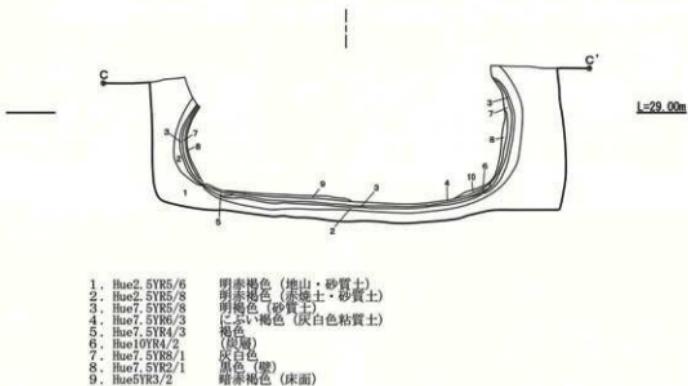
1. Hue2.5YR5/6 明赤褐色(地山)
 2. Hue2.5YR5/8 明赤褐色(赤埴土)
 3. Hue10YR4/4 棕色(表面)
 4. Hue7.5YR6/8 棕色(焦灰層(遺物含む))

0 1 : 40 2m

第16図 3号窯断面セクション図2



*床面を一度貼り直している



0 1 : 40 2m

第17図 3号窓断面セクション図3

第2節 前庭部と灰原について

今回調査した3基の窯体の中で前庭部を伴う窯体は3号窯のみであった。斜面の上方向及び、1号窯・2号窯焚口の入口直後から灰原があったと思われる部分は後に削平されたため、1・2号窯の前庭部を確認することは出来なかった。

3号窯の前庭部は、焚口から直線上に少し下りた所に一つと、その両脇に一つずつの土坑で合計3基の遺構を検出した。焚口直線上の遺構の略称を、SK03とし、窯左側（北側）を、SK01、窯右側（南側）を、SK02とした。なお、SKは土坑をさす。

SK01の遺構は、長径が1.63m、短径が1.30m、深さを30cmとする楕円形の遺構である。埋土は炭化物混じりの土で、遺物を多く含んでいる。上層からは比較的形のある遺物が出土している。下層からは細かい破片の方が多く出土した。

SK02の遺構は、長径が1.85m、短径が1.60m、深さを2.2cmとする楕円形の遺構である。埋土はSK01同様に炭化物混じりの土で遺物を多く含み、上層には比較的形のある遺物が出土している。下層には細かい破片の遺物を多く含む。

SK03の遺構は、焚口から30cm下った直下に作られた長径が1.35m、短径が1.20m、深さを30cmとする楕円形の遺構である。埋土は他の遺構と同様に炭化物混じりの土で、遺物を多く含む。上層からも他と同じように比較的形のある遺物が出土し、下層からは細かい破片の方が多く出土している。

灰原と確認できたのは1号窯と3号窯の2ヶ所であるが、ほとんどが消滅していて残りが悪く2号窯の灰原と思われる範囲を確認することは出来なかった。1号窯の灰原は焚口入口から約5m下の斜面に位置し、範囲は直径5mほどの茶褐色灰層で、厚さは薄く10~20cmで遺物を多く含んでいる。位置は1号窯のセンターラインからまっすぐ下った所で、灰原の上には耕作土は堆積しておらず、ほぼ現状の表土層であった。3号窯の灰原は、焚口から10mほど離れた下の斜面に位置し、厚みと範囲はどちらも1号窯と同様で遺物も多く含んでいる。なお、灰原は、窯の主軸に対して左側に寄っている。



写真22 1号窯灰原全体 西から



写真23 3号窯灰原全体 西から

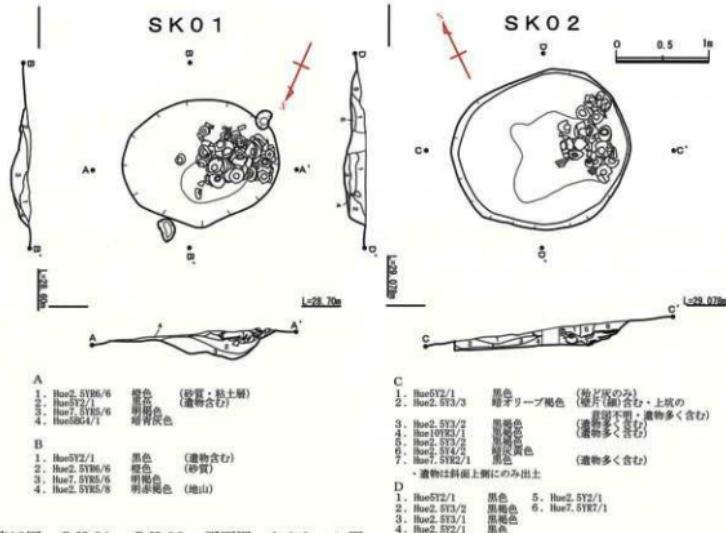


写真18図 SK 01・SK 02 平面図・セクション図



写真24 SK 01・SK 02・SK 03 全体 西から



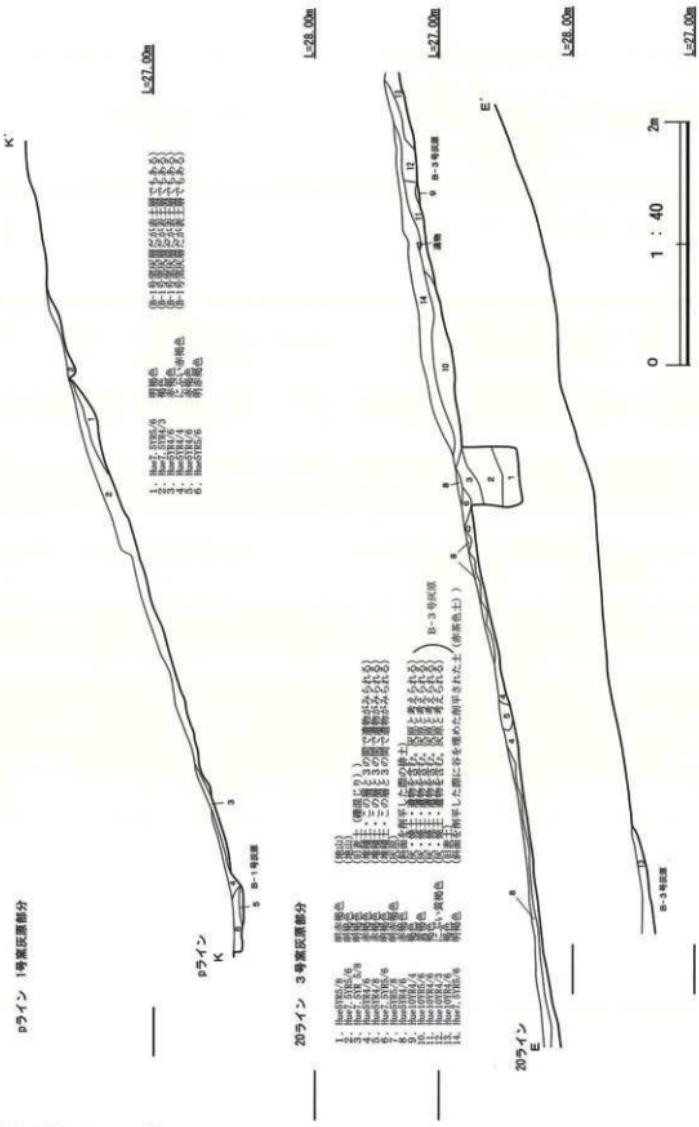
写真25 SK 01 西から



写真26 SK 02 南から



写真27 SK 03 (前庭部) 北から



第19図 灰原セクション図

第3章 遗物



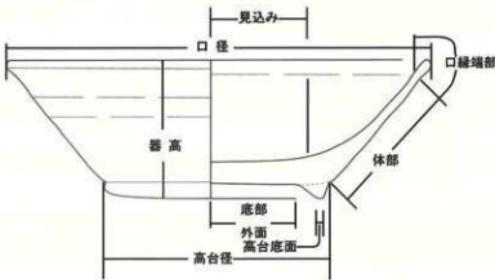
3号窑遗物出土状况

第1節 器形分類

今回の遺跡から出土した遺物は、容量36リットルのコンテナで54箱である。その遺物の多くは、碗や皿といった器種がほとんどで、その他に鉢・壺・土師質壠がわずかに出土している。これら以外に窯道具である焼台が加わる。また、主に出土した遺物の碗類と皿類は、中世に生産された無釉陶器である。

この出土遺物の個体数については、碗・皿ともに底部が1/2以上残存するものを1個体と数えたが、碗については一部例外も存在する。それ以外の遺物については、出土した破片の状況からみて1個体と判別可能なものを数えることにした。以下に記述する個体数は、すべてこの方式を用いて分類した。総個体数は2028点で、そのうち碗は1338点出土し、全体の約66%で記録データ化出来たものが528点であった。皿は610点出土し、全体の約30%で、記録データ化出来たものは278点であった。

また、出土した遺物（碗や皿・鉢）の部位説明は下記の第20図に従って行うこととする。



第20図 部位等名称図

碗と皿の器形分類については共通する形態が多く、体部と口縁端部をほぼ共通形態の分類とした。体部については、碗類と皿類のAからD類までは共通の分類ではあるが、皿類については分類を1つ多く加えた。皿類はその他に底部の形態も含めて下記のように分類した。

【体部】

碗・皿類 (共通部分)

- A類 体部から口縁にかけて直線的に立ち上がるもの
- B類 体部から口縁にかけて曲線的に立ち上がるもの
- C類 体部が直線的に立ち上がるが、口縁部付近で外反するもの
- D類 体部が曲線的に立ち上がるが、口縁部付近で外反するもの
- E類 体部がくの字に屈曲するもの (皿類のみ)

【口縁端部】

碗・皿類 (すべて共通)

1類 丸みを帯びたもの

2類 端部の内側の極点が外側の曲点より鈍角になるもの

3類 口縁端部の内と外の曲点がそれぞれほぼ直角なもの

【底部 皿類のみ】

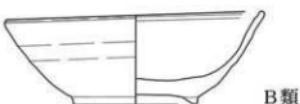
I系 高台の無いもの

II系 底部が円柱状に突出するもの

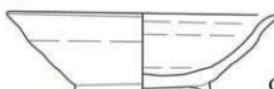
碗類 体部



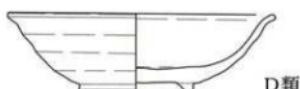
A類



B類



C類



D類

口縁端部



1類

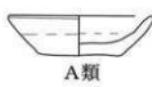


2類

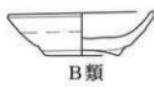


3類

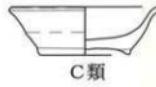
皿類 体部



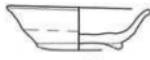
A類



B類



C類



D類



E類

口縁端部



1類



2類



3類

第21図 碗類・皿類器形分類図

鉢は全体で41点出土し、そのうち記録データ化出来たものは6点であった。鉢についても碗とは
ば同様の体部と口縁端部の形態をもとに下記のように分類した。

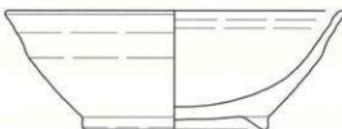
【体部】

- A類 体部から口縁にかけて曲線的に立ち上がるもの
- B類 体部が曲線的に立ち上がるが口縁付近で外反するもの

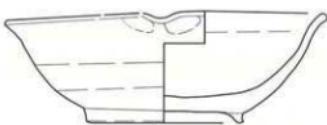
【口縁端部】

- 1類 丸みを帯びたもの

鉢類 体部

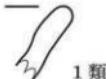


A類



B類

口縁端部



1類

第22図 鉢類器形分類図

出土遺物観察表の凡例

【法量の計測】

- 口 径 実測できるものは、そのまま計測した。1/2以下は測定値を記し、()で記入した。
測定が困難な個所は「測定不能」とし、測定個所が欠損している場所は「-」とした。
- 高台径 実測できるものは、そのまま計測した。1/2以下は測定値を記し、()で記入した。
測定が困難な個所は「測定不能」とし、測定個所が欠損している場所は「-」とした。
高台径で高台が欠けているものは底径として数値を入れた。
- 器 高 実測できるものは、そのまま計測した。1/2以下は測定値を記し、()で記入した。
測定が困難な個所は「測定不能」とし、測定個所が欠損している場所は「-」とした。

【各部位の法量】

高台底面付着痕

高台底面には様々な痕跡が認められているが、ここでは初痕、砂、センイ痕を観測した。
小皿については高台がないものが出土しているため、その場合のみ「-」を記した。

底面外面 底面外面には様々な痕跡が認められているが、ここでは回転台から切り離す工程で出来た糸切り痕と糸切り後にナデたものなどを観察した。糸切りしたもの、糸切り後に指ナデしてあるもの、指で全面をナデているものとした。

見込み 内面底部中央のことで、その個所の状態を記した。ロクロで回転させただけで終わっているものを回転ナデ、回転ナデをした後に指で表面をナデているものを横ナデ、釉などがかかっていてわからないものを不明とした。

焼 成 均一に上手く焼けたものを最良、生焼けのものは不良、それ以外を良とした。

胎 土 粒子が細かく砂粒が少ないものを最良、やや砂粒の混じるものを良、砂粒を多く含むものを不良とした。

備 考 相当項目がないか、記入した方がよい点のある場合は適宜記入した。
砂粒付着は胎土に含まれるものではなく、表面に付着していることを示す。

第2節 窯内と灰原などの遺物

1号窯に関する遺物

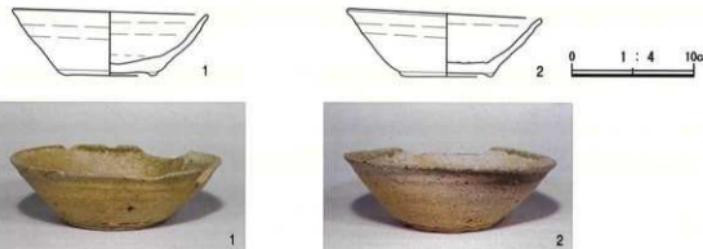
窯内の焼成室・焚口と灰原から出土しているが、窯内から出た遺物は非常に数が少ない。

碗

出土したもののうち、分類可能なものは3点であった。そのうち2点は完形品に近い状態のものであった。

各部の法量は、口径が16.0～15.9cm、高台径が8.5～7.7cm、器高が5.2～5.1cmを測定した。その平均は、口径16.0cm、高台径8.1cm、器高5.1cmである。高台底面の付着痕は粗痕2点、砂が1点である。底面外面の調整痕はすべて糸切り後ナデである。内面底部の見込みは回転ナデ1点、横ナデ2点である。胎土は粘土が均質で最良なもの・砂は混じるが良質なもの・砂粒が多く含んで粗雑なもの（以後は、最良・良・不良で表記する）に分けることにしたが、ここではすべて良であった。焼成についても最高に上手く火が入っている最良なもの、最良にやや劣る良質なもの・火が上手く入らない不良なもの（以後は、最良・良・不良）に分けたが、すべて良であった。

器形分類は、体部A類1点、C類1点、D類1点である。口縁端部は1類2点、2類が1点である。



第23図 1号窯碗類遺物実測図 写真28 1号窯碗類

遺物番号	出土位置	法量(cm)			高台底面 付着痕	底面外面	見込み	焼成	胎土	器形分類	備考
		口径	高台径	器高						体部	口縁端部
1	1号窯 焼成室	16.0	8.1	5.2	砂	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	A	1 ほぼ完形品
2	1号窯 焼成室	15.9	7.7	5.1	もみ	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	C	1 重ね焼片付着、所々白っぽい、ほぼ完形品
88	1号窯 焚口	16.0	8.5	5.1	もみ	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	D	2 重ね焼片付着

第3表 1号窯碗類観察表

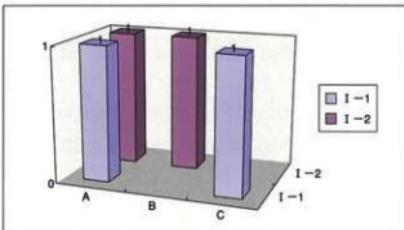
皿

出土したもののうち、分類可能なものは4点であった。各部の法量は、口径が7.4cm、高台径が4.1～3.6cm、器高2.0cmを測定した。その平均は、口径7.4cm、高台径3.9cm、器高2.0cmである。高台底面の付着痕はすべて粗痕である。高台底面の調整痕は糸切り1点、糸切り後ナデ2点である。内面底部の見込みは回転ナデ2点、横ナデ2点である。胎土と焼成は両方とも良である。

器形分類については、下記の表で記すことにした。

	高台 口縁端部		
	I系	I系計	総計
体部	1類	2類	
A類	1	1	2
B類	0	1	1
C類	1	0	1
総計	2	2	4

第4表 1号窯碗類器形分類別組合せ表



第24図 1号窯皿類器形分類別組成図

遺物番号	出土位置	法量(cm)			高台底面 付着痕	底面外面	見込み	焼成	胎土	器形分類			備考
		口径	高台径	器高						高台	体部	口縁端部	
603	1号窯 灰口	(8.4)	4.1	(2.3)	-	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	I	B	2	
604	1号窯 灰口	(7.8)	3.6	(2.1)	-	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	I	A	2	
605	1号窯 灰口	(8.2)	3.9	(2.3)	-	糸切り	横ナデ	良	良	I	A	1	
606	1号窯 灰口 灰刷	7.4	3.9	2.0	-	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	I	C	1	重ね焼片付着

第5表 1号窯皿類観察表

灰原

碗

出土したもののうち、分類可能なものは1点であった。各部の法量は、すべて推定値になってしまふが口径(15.6)cm、高台径(9.0)cm、器高(4.6)cmである。高台底面の付着痕は糊・砂痕である。底面外面の調整痕は糸切り後ナデである。内面底部の見込みは底部中心部分が剥離しているため不明であった。胎土と焼成は両方とも良である。

器形分類は、体部がC類で、口縁端部が1類である。

遺物番号	出土位置	法量(cm)			高台底面 付着痕	底面外面	見込み	焼成	胎土	器形分類			備考
		口径	高台径	器高						高台	体部	口縁端部	
402	1号窯 灰原	(15.6)	(9.0)	(4.6)	もみ・砂	糸切り後ナデ	不明	良	良	C	1	底部中心部分ハクリ、重ね焼片付着	

第6表 1号窯灰原碗類観察表

皿

出土したもののうち、分類可能なものは1点である。各部の法量は、碗と同様に推定値になつまうが、口径(9.2)cm、高台径(4.9)cm、器高(2.9)cmである。高台底面の付着痕は糊痕である。底面外面の調整痕はナデである。内面底部の見込みは回転ナデである。胎土と焼成は両方とも良である。

器形分類は、体部がC類で、口縁端部が1類で、高台底部はII系である。

遺物番号	出土位置	法量(cm)			高台底面 付着痕	底面外面	見込み	焼成	胎土	器形分類			備考
		口径	高台径	器高						高台	体部	口縁端部	
748	1号窯 灰原	(9.2)	(4.9)	(2.9)	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	II	C	1	重ね焼片付着

第7表 1号窯灰原皿類観察表

2号窯に関する遺物

焼成室・燃焼室・焚口と灰原から碗・皿と鉢・土師質堀の遺物が出土している。

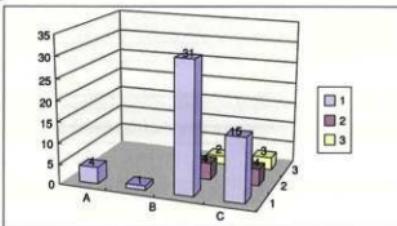
碗

出土したもののうち、分類可能なものは64点である。各部の法量は、口径が17.8~15.5cm、高台径が9.5cm~7.0cm、器高が5.8~4.4cmを測定した。その平均は、口径16.3cm、高台径8.1cm、器高5.2cmである。高台底面の付着痕は糸痕47点(73.4%)、糸・砂痕12点(18.8%)、砂痕1点(1.6%)、高台なし4点(6.2%)である。この高台なしは剥離して無いわけではなく、すべて「付着していた形跡がない」ものである。底面外面の調整痕は糸切り9点(14.1%)、糸切り後ナデ46点(71.8%)、ナデ9点(14.1%)である。内面底部の見込みは回転ナデ52点(81.2%)、横ナデ9点(14.1%)、不明3点(4.7%)である。この不明はすべて天場ものである。胎土はすべて良である。焼成は良49点(76.6%)、不良15点(23.4%)である。

器形分類については、下記の表で記すことにした。

番号	口縁端部			
	1類	2類	3類	計
A類	4(6.3%)	0	0	4(6.3%)
B類	(1.6%)	0	0	1(1.6%)
C類	31(48.4%)	(6.3%)	2(3.1%)	37(57.8%)
D類	15(23.4%)	4(6.3%)	3(4.7%)	22(34.3%)
総計	51(79.7%)	8(12.5%)	(7.8%)	64(100%)

第8表 2号窯出土碗類器形分類別組合せ表



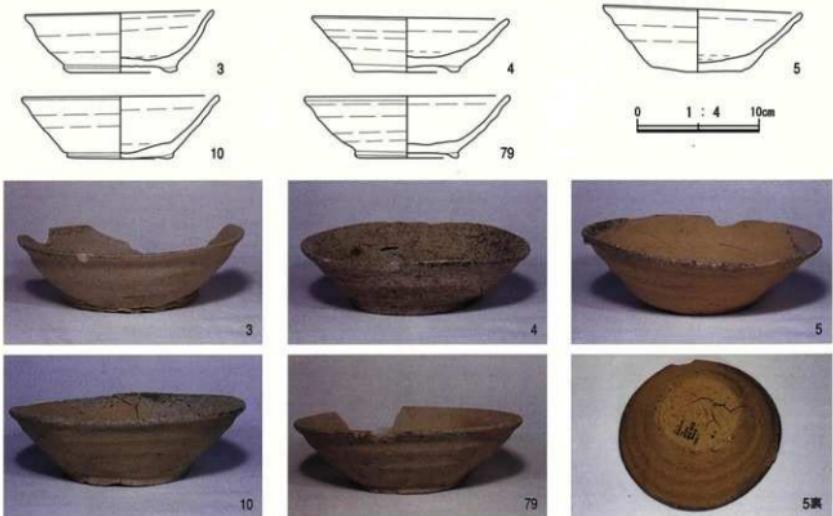
第25図 2号窯碗類器形分類別組成図

遺物番号	出土位置	法量(cm)			高台底面 付着痕	底面外面	見込み	焼成	胎土	器形分類	備考
		口径	高台径	器高							
31号窯 焼成室	15.5	9.2	4.9	もみ・砂	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	
41号窯 焼成室	16.2	8.8	4.4	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	A	1	重ね焼片付着、ほぼ完形品、全体に黒っぽい
51号窯 焼成室	16.2	底径7.5	5.1	-	糸切り	回転ナデ	良	良	A	1	重ね焼片付着、高台付着していた形跡なし、ほぼ完形品
61号窯 焼成室	(16.3)	7.6	(5.5)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	C	1	天場もの、内面に口縁の破片・全面に軸付着
71号窯 焼成室	15.7	8.0	5.1	もみ	糸切り	回転ナデ	良	良	C	1	
81号窯 焼成室	16.0	7.1	5.3	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	D	3	
91号窯 焼成室	16.0	8.0	5.2	もみ	ナデ	回転ナデ	不良	良	C	1	ほぼ完形品
101号窯 焚口	16.0	8.8	5.1	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	C	1	高台に指の痕らしきものあり、ほぼ完形品
89号窯 焼成室	(15.2)	8.6	(5.1)	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	重ね焼片付着
90号窯 焼成室	(16.2)	8.5	(5.7)	もみ・砂	ナデ	横ナデ	良	良	C	1	
91号窯 焼成室	16.7	7.3	5.4	もみ	糸切り後ナデ	不明	良	良	A	1	天場もの、内面全体に軸かかる、高台だけ黒っぽい
92号窯 焼成室	16.9	8.9	5.3	もみ	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	C	1	
93号窯 焼成室	16.5	8.4	5.6	もみ	糸切り後ナデ	横ナデ	不良	良	C	2	
94号窯 焼成室	17.8	8.8	5.3	もみ	糸切り	回転ナデ	良	良	C	3	砂粒付着
95号窯 焼成室	16.5	9.5	5.0	もみ・砂	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	D	1	
96号窯 焼成室	(16.3)	(8.7)	(5.5)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	C	1	高台ほとんどのハカリ、底部にひび割れ
97号窯 焼成室	(16.0)	8.1	(5.2)	もみ	ナデ	回転ナデ	不良	良	C	2	重ね焼片付着
98号窯 焼成室	(15.4)	8.2	(5.2)	もみ・砂	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	C	1	砂粒付着
99号窯 焼成室	17.2	(8.1)	(5.1)	砂	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	3	高台ほとんどのハカリ、底部にひび割れ
100号窯 焼成室	(16.4)	底径7.6	4.8	-	糸切り	回転ナデ	良	良	C	1	
101号窯 焼成室	(15.8)	7.2	(4.7)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	2	高台付着していた形跡なし、重ね焼片付着
102号窯 焼成室	(16.2)	7.6	(6.1)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	C	1	
103号窯 焼成室	16.8	7.8	5.8	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	C	1	
104号窯 焼成室	(16.0)	7.9	(5.8)	もみ	糸切り	回転ナデ	不良	良	C	1	
105号窯 焼成室	(16.2)	8.0	(5.7)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	D	1	
106号窯 焼成室	(15.6)	7.7	(5.3)	もみ・砂	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	C	1	高台凹円
107号窯 焼成室	(15.6)	8.5	(5.3)	もみ・砂	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	C	1	
108号窯 焼成室	16.2	底径5.5	5.3	-	糸切り	回転ナデ	良	良	C	3	高台付着していた形跡なし、ゆがむ
109号窯 焼成室	16.4	7.9	5.0	もみ	糸切り	不明	良	良	D	1	天場もの、カマクサ・輪・砂粒・重ね焼片付着
110号窯 焼成室	(14.8)	8.0	(5.4)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	砂粒付着、ゆがむ

第9表 2号窯碗類観察表 (その1)

遺物番号	出土位置	法量(cm)		高台底面 付着痕	底面外面	見込み	焼成	胎土	器形分類	参考
		口径	高台径							
111	2号窯 焼成室	16.0	7.7	5.3	6.5cm-砂	系切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	C 1 ゆがむ
112	2号窯 焼成室	15.9	7.6	5.5	6.5cm-砂	系切り後ナデ	回転ナデ	良	良	C 1 ゆがむ
113	2号窯 焼成室	(16.0)	(8.3)	(5.6)	6.5cm	系切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D 3 底部にひび割れ
114	2号窯 焼成室	16.2	7.0	5.3	6.5cm	系切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D 1 ゆがむ
115	2号窯 焼成室	(15.6)	(8.4)	(5.0)	6.5cm	系切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D 1 ゆがむ
116	2号窯 灰口	16.2	7.3	5.4	6.5cm-砂	系切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D 1 砂粒付着、底部にひび割れ
117	2号窯 灰口	(16.4)	8.0	(5.2)	6.5cm	系切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D 1 天場もの、重ね焼片付着
118	2号窯 灰口	16.7	9.2	4.8	6.5cm	系切り後ナデ	不明	良	良	C 1 天場もの、カマクソ-輪付着、体部の一部に厚みあり
119	2号窯 灰口	(16.2)	7.5	(4.8)	6.5cm	系切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D 2 重ね焼片付着
120	2号窯 灰口	16.1	7.7	5.2	6.5cm	系切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D 1 釉たれ、ゆがむ、胎土に0.5cm大の小石含む
121	2号窯 灰口	16.8	8.0	5.6	6.5cm	系切り後ナデ	回転ナデ	良	良	C 1 重ね焼片付着、ゆがむ
122	2号窯 灰口	15.7	8.0	5.2	6.5cm	系切り後ナデ	回転ナデ	良	良	C 1 口縁稍円
123	2号窯 灰口	(16.4)	8.4	(5.5)	6.5cm	系切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	C 1 ゆがむ
124	2号窯 灰口	16.0	7.9	5.3	6.5cm 不良	ナデ	回転ナデ	良	良	C 1 重ね焼片付着、ゆがむ、体部にひび割れ
125	2号窯 灰口	(16.0)	8.0	5.1	6.5cm	系切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D 1 重ね焼片付着、ゆがむ
126	2号窯 灰口	(16.4)	9.1	(4.9)	6.5cm-砂	系切り後ナデ	横ナデ	良	良	D 1 高台付着していた形跡なし、重ね焼片付着
127	2号窯 灰口	(15.8)	7.8	(5.3)	6.5cm-砂	系切り後ナデ	回転ナデ	良	良	C 2 砂粒付着
128	2号窯 灰口	16.3	(7.5)	5.2	6.5cm	系切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	D 1 ゆがむ
129	2号窯 燃焼室	(16.4)	7.8	(5.6)	6.5cm	系切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	C 1 体部にひび割れ
130	2号窯 灰口	16.5	7.9	5.3	6.5cm	系切り後ナデ	回転ナデ	良	良	C 2 全体にスス付着
131	2号窯 灰口	測定値	8.5	測定不能	6.5cm-砂	系切り後ナデ	横ナデ	良	良	C 1 重ね焼片付着
132	2号窯 灰口	16.4	底径8.5	4.8	-	系切り	回転ナデ	良	良	C 1 高台付着していた形跡なし、重ね焼片付着
133	2号窯 灰口	16.6	7.5	4.8	6.5cm	系切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D 2 砂粒付着
134	2号窯 燃焼室	16.5	7.8	5.5	6.5cm	系切り後ナデ	回転ナデ	良	良	C 1 ゆがむ
135	2号窯 燃焼室	16.5	8.4	5.3	6.5cm	系切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	C 1 体部にひび割れ
136	2号窯 灰口	16.0	7.5	5.2	6.5cm	ナデ	回転ナデ	不良	良	A 1 全体にスス付着
137	2号窯 灰口	(16.4)	8.2	(5.3)	6.5cm	系切り後ナデ	回転ナデ	良	良	C 1 口縁ゆがむ、内面に砂粒付着
138	2号窯 灰口	15.8	9.1	5.3	6.5cm	系切り後ナデ	横ナデ	良	良	C 1 重ね焼片・砂粒付着
139	2号窯 灰口	(16.0)	8.2	(5.3)	6.5cm	系切り後ナデ	横ナデ	良	良	B 1 重ね焼片付着
140	2号窯 灰口	(16.4)	8.2	(4.6)	6.5cm	系切り後ナデ	回転ナデ	良	良	C 1 重ね焼片付着
141	2号窯 燃焼室	(15.8)	7.9	(4.9)	6.5cm	系切り後ナデ	横ナデ	良	良	D 2 全体にスス付着
142	2号窯 燃焼室	(15.2)	7.9	(5.7)	6.5cm	ナデ	回転ナデ	良	良	D 1 体部にひび割れ
143	2号窯 燃焼室	(16.2)	8.0	(5.4)	6.5cm	ナデ	回転ナデ	良	良	C 1 重ね焼片付着
144	2号窯 燃焼室	(15.8)	(7.6)	(5.4)	6.5cm	系切り	回転ナデ	良	良	C 1 重ね焼片付着

第9表 2号窯碗類觀察表 (その2)



第26図 2号窯碗類遺物実測図 写真29 2号窯碗類

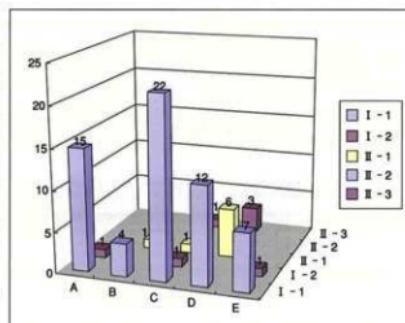
III

出土したもののうち、分類可能なものは76点である。各部の法量は、口径が10.0~8.1cm、高台径が5.3~3.6cm、器高が3.1~2.2cmを測定した。その平均は、口径8.7cm、高台径4.4cm、器高2.6cmである。高台底面の付着痕は初痕13点(17.1%)、高台無し63点(82.9%)である。底面外面の調整痕は糸切り19点(25%)、糸切り後センイ痕3点(4.0%)、糸切り後ナデ44点(57.9%)、ナデ10点(13.1%)である。内面底部の見込みは回転ナデ38点(50%)、横ナデ19点(25%)、コロシ2点(2.6%)、不明17点(22.4%)である。胎土は最良1点、良75点である。焼成は良63点(82.9%)、不良13点(17.1%)である。

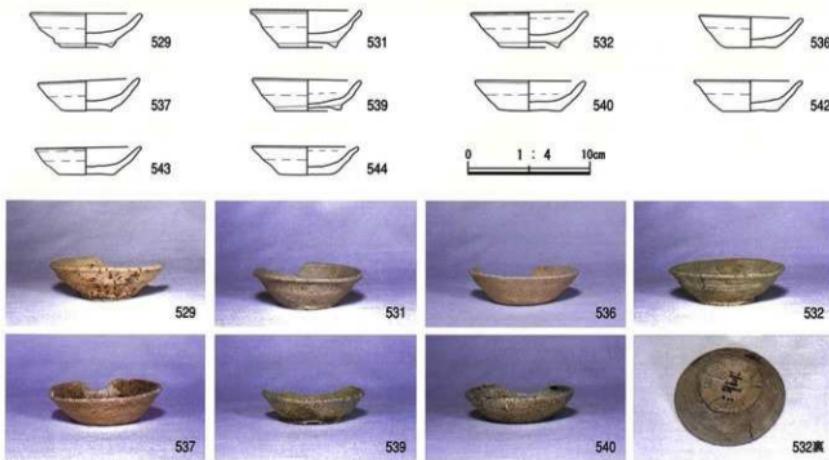
器形分類については、下記の表で記すことにした。

高台 口縁端部									
	I系		II系		III系				総計
部体	1類	2類		1類	2類	3類			
A類	15(19.7%)	1(1.3%)	16(21.1%)	0	0	0	0	16(21.1%)	
B類	4(5.3%)	0	4(5.3%)	1(1.3%)	0	0	1(1.3%)	5(6.8%)	
C類	22(28.9%)	1(1.3%)	23(30.1%)	1(1.3%)	1(1.3%)	1(1.3%)	3(3.9%)	26(34.2%)	
D類	12(15.8%)	0	12(15.8%)	6(7.9%)	0	3(3.9%)	9(11.8%)	21(27.6%)	
E類	7(9.2%)	1(1.3%)	8(10.5%)	0	0	0	0	8(10.5%)	
総計	60(78.9%)	3(3.9%)	63(82.8%)	8(10.5%)	1(1.3%)	4(5.3%)	13(17.1%)	76(100%)	

第10表 2号窯出土皿類器形分類別組合せ表



第27図 2号窯皿類器形分類別組成図



第28図 2号窯皿類遺物実測図

写真30 2号窯皿類（その1）

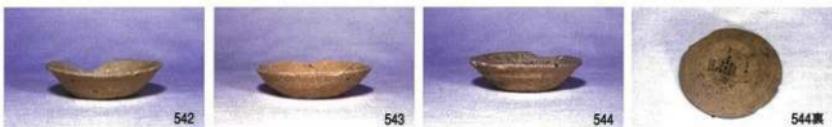


写真30 2号窯皿類（その2）

遺物番号	出土位置	法量 (cm)		高台底面 付着部	底面外面	見込み	焼成	胎土	器形分類			備考	
		口径	高台径						高台	体部	口縁部		
529	2号窯 燃成室	9.0	4.3	2.8	6.5み	ナデ	回転ナデ	不良	最良	B	D	1	
530	2号窯 燃成室	(9.9)	5.3	(5.0)	6.5み	ナデ	回転ナデ	不良	良	B	D	1	
531	2号窯 燃成室	8.9	4.8	3.0	6.5み	系切り後ナデ	回転ナデ	良	真	B	C	1	
532	2号窯 燃成室	9.5	4.9	2.9	6.5み	系切り後ナデ	回転ナデ	良	真	B	C	2	
533	2号窯 燃成室	8.5	4.0	2.6	-	系切り後セイシ回転ナデ	回転ナデ	良	真	I	C	1	
534	2号窯 燃成室	8.5	3.9	2.6	-	系切り後ナデ	回転ナデ	良	真	I	A	1	
535	2号窯 焼口	8.7	3.9	2.4	-	系切り後ナデ	回転ナデ	良	真	I	A	1	
536	2号窯 焼口	8.3	4.1	2.5	-	系切り後ナデ	回転ナデ	良	真	I	A	1	
537	2号窯 焼口	8.3	4.2	2.4	-	系切り後ナデ	回転ナデ	良	真	I	D	1	
538	2号窯 焼口	8.5	4.8	2.5	-	系切り	横ナデ	良	真	I	D	1	
539	2号窯 焼口	8.7	5.4	2.5	6.5み	ナデ	横ナデ	良	真	B	D	1	
540	2号窯 焼口	8.9	5.2	2.4	-	系切り	横ナデ	良	真	I	A	1	
541	2号窯 焼口	8.4	4.4	2.7	-	系切り後ナデ	回転ナデ	良	真	I	C	1	
542	2号窯 燃成室	8.7	4.6	2.5	-	系切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	I	C	1	
543	2号窯 燃成室	8.7	4.5	2.2	-	系切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	I	B	1	
544	2号窯 燃成室	8.6	4.4	2.3	-	ナデ	不明	良	良	I	C	1	
545	2号窯 燃成室	8.7	4.1	2.7	-	系切り	回転ナデ	不良	良	I	C	1	
546	2号窯 燃成室	8.5	4.1	2.3	-	系切り	回転ナデ	良	真	I	C	1	
607	2号窯 燃成室	8.5	4.4	2.8	-	系切り後ナデ	不明	真	真	I	E	1	
608	2号窯 燃成室	9.7	(5.4)	(3.0)	6.5み	ナデ	回転ナデ	不良	良	B	D	3	
609	2号窯 燃成室	9.4	4.9	3.1	6.5み	ナデ	系切り後ナデ	回転ナデ	良	真	B	D	1
610	2号窯 燃成室	10.0	(5.5)	(3.4)	6.5み	ナデ	系切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	B	D	1
611	2号窯 燃成室	(8.8)	(5.0)	(3.1)	6.5み	ナデ	系切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	B	C	3
612	2号窯 燃成室	(9.4)	4.7	(2.7)	6.5み	ナデ	系切り後ナデ	回転ナデ	良	真	B	D	3
613	2号窯 燃成室	8.6	4.3	2.6	-	ナデ	系切り後ナデ	回転ナデ	良	真	I	C	1
614	2号窯 燃成室	8.7	4.6	2.5	-	ナデ	不明	良	真	I	C	1	
615	2号窯 燃成室	8.3	4.5	2.5	-	系切り	不明	良	真	I	C	2	
616	2号窯 燃成室	(9.2)	(4.4)	(2.7)	-	系切り後セイシ回転ナデ	良	真	I	A	1	天場もの、カマクソ・輪付着	
617	2号窯 燃成室	8.7	4.7	2.5	-	系切り後ナデ	不明	良	真	I	A	1	
618	2号窯 焼口	9.0	4.4	2.5	-	系切り後ナデ	回転ナデ	良	真	I	A	1	
619	2号窯 焼口	8.7	4.1	2.6	-	系切り後ナデ	回転ナデ	良	真	I	C	1	
620	2号窯 焼口	8.1	4.0	2.6	-	系切り後ナデ	回転ナデ	良	真	I	C	1	
621	2号窯 焼口	9.1	5.0	2.7	6.5み	ナデ	系切り後ナデ	横ナデ	良	真	B	D	3
622	2号窯 焼口	(8.8)	4.6	(2.4)	-	ナデ	系切り	横ナデ	良	真	I	C	1
623	2号窯 焼口	(8.2)	4.7	(2.5)	-	ナデ	系切り	横ナデ	良	真	I	E	1
624	2号窯 焼口	8.8	4.8	2.7	-	ナデ	系切り	不明	真	真	I	A	1
625	2号窯 焼口	8.8	4.9	2.9	6.5み	ナデ	系切り	横ナデ	良	真	B	D	1
626	2号窯 焼口	8.6	4.8	2.4	-	ナデ	系切り後ナデ	回転ナデ	真	真	B	B	1
627	2号窯 焼口	8.4	4.9	2.6	-	ナデ	系切り後ナデ	横ナデ	良	真	I	C	1
628	2号窯 焼口	8.8	4.1	2.6	-	ナデ	系切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	I	D	1
629	2号窯 焼口	(8.6)	4.1	(2.5)	-	ナデ	系切り後セイシ回転ナデ	良	真	I	A	1	
630	2号窯 焼口	8.6	4.1	2.5	-	ナデ	系切り	不明	良	真	I	C	1
631	2号窯 燃成室	8.3	4.4	2.5	-	ナデ	系切り	不明	良	真	I	C	1
632	2号窯 燃成室	8.5	4.6	2.5	-	ナデ	系切り後ナデ	不明	良	真	I	C	1
633	2号窯 燃成室	8.1	4.2	2.6	-	ナデ	系切り	回転ナデ	良	真	I	C	1
634	2号窯 焼口	8.4	4.4	2.6	-	ナデ	系切り後ナデ	横ナデ	良	真	I	C	1
635	2号窯 焼口	8.5	4.6	2.6	-	ナデ	系切り	回転ナデ	良	真	I	C	1
636	2号窯 焼口	8.4	3.6	2.5	-	ナデ	系切り	回転ナデ	良	真	I	C	1
637	2号窯 焼口	8.5	4.9	2.6	-	ナデ	系切り後ナデ	不明	真	真	I	E	1
638	2号窯 焼口	(8.6)	4.1	(2.0)	-	ナデ	系切り後ナデ	横ナデ	良	真	I	D	1
639	2号窯 焼口	8.4	4.3	2.5	-	ナデ	系切り	横ナデ	良	真	I	D	1
640	2号窯 焼口	8.4	4.2	2.5	-	ナデ	系切り	回転ナデ	良	真	I	A	1
641	2号窯 焼口	8.6	4.6	2.5	-	ナデ	系切り	不明	良	良	I	E	1
642	2号窯 焼口	9.3	4.7	2.7	-	ナデ	系切り後ナデ	不明	良	良	I	D	1
643	2号窯 焼口	8.9	4.2	2.5	-	ナデ	系切り後ナデ	不明	良	良	I	E	1
644	2号窯 焼口	8.5	4.8	2.5	-	ナデ	系切り後ナデ	不明	良	良	I	E	1
645	2号窯 燃成室	8.7	4.5	2.4	-	ナデ	系切り後ナデ	不明	良	真	I	A	1
646	2号窯 燃成室	(8.8)	4.6	(2.5)	-	ナデ	系切り	回転ナデ	良	真	I	B	1

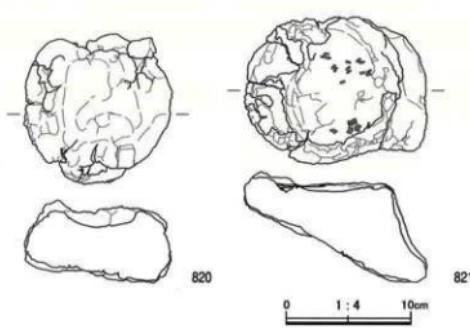
第11表 2号窯皿類觀察表（その1）

遺物番号	出土位置	法量 (cm)			高台底面付着痕	底面外面	見込み	焼成	胎土	器形分類	備考
		口径	高台径	器高							
647	2号窯 燃焼室	8.2	4.2	2.6	-	糸切り後ナデ	回転ナデ	良 良	I E	1	重ね焼片付着、ゆがむ
648	2号窯 燃焼室	8.5	4.1	2.7	-	糸切り後ナデ	コロシ	良 良	I E	2	天場もの、カマクソ・輪付着、重ね焼片付着
649	2号窯 燃焼室	(8.0)	3.9	(2.5)	-	糸切り	コロシ	良 良	I A	1	
650	2号窯 燃焼室	8.8	5.0	2.6	ちみ	ナデ	横ナデ	良 良	II B	1	重ね焼片付着、ゆがむ、高台作り不整形
651	2号窯 燃焼室	8.5	4.5	2.7	-	糸切り後ナデ	横ナデ	不良	I A	1	
652	2号窯 燃焼室	8.5	4.2	2.8	-	糸切り後ナデ	回転ナデ	良 良	I A	2	重ね焼片付着、ゆがむ
653	2号窯 燃焼室	(8.4)	4.1	(2.7)	-	糸切り後ナデ	横ナデ	良 良	I B	1	重ね焼片付着、ゆがむ、カマクソ付着
654	2号窯 燃焼室	8.4	4.3	2.5	-	糸切り後ナデ	回転ナデ	良 良	I D	1	
655	2号窯 燃焼室	(8.2)	4.5	(2.3)	-	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	I C	1	
656	2号窯 燃焼室	8.3	4.5	2.5	-	糸切り後ナデ	不明	良 良	I D	1	
657	2号窯 燃焼室	(8.4)	4.5	(2.3)	-	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	I E	1	天場もの、輪付着
658	2号窯 燃焼室	8.4	4.5	2.5	-	糸切り後ナデ	横ナデ	不良	I C	1	ゆがむ
659	2号窯 燃焼室	8.2	4.1	2.3	-	糸切り後ナデ	回転ナデ	良 良	I C	1	
660	2号窯 燃焼室	8.8	4.1	2.4	-	糸切り後ナデ	不明	良 良	I D	1	天場もの、カマクソ・輪・重ね焼片付着
661	2号窯 燃焼室	8.6	5.1	2.4	-	ナデ	回転ナデ	良 良	I D	1	
662	2号窯 火口	8.3	4.3	2.3	-	糸切り後ナデ	横ナデ	良 良	I A	1	底部の糸切り跡
788	2号窯 燃焼室	9.0	4.8	2.6	-	糸切り	不明	良 良	I D	1	天場もの、重ね焼片付着、ゆがむ
789	2号窯 燃焼室	9.3	5.2	2.6	-	糸切り後ナデ	横ナデ	良 良	I D	1	ゆがむ、外側が黒っぽい

第11表 2号窯皿類観察表(その2)

焼台

窯道具として焼成室に焼台が残されていた。その中でも状態の良いものを2点紹介する。遺物番号820は一部欠損しているが、最大長が11.8cm、最大幅が12.0cm、最大高が(4.4)cmである。上面平坦部に凹みが見受けられない。この焼台は上面平坦部と底部の厚みが平行で、底部の傾斜角度が平坦にちかい。そのため、燃焼室付近の平坦な場所に置かれたものではないかと思われる。遺物番号821は完形品で、最大長が16.3cm、最大幅が11.9cm、最大高が6.7cmである。上面平坦部は馬蹄形で粗痕が認められる。色調は両方ともにぶい赤褐色である。



第29図 2号窯焼台遺物実測図と写真



写真31 2号窯焼台

遺物番号	出土位置	法量 (cm)			焼成	備考
		最大長	最大幅	最大高		
820	2号窯 燃焼室	11.8	12.0	(4.4)	良	一部欠損、平たい
821	2号窯 燃焼室	16.3	11.9	6.7	良	完形品、遺物との接触面にもみ痕付着

第12表 2号窯焼台観察表

窯体内の掘り込みの遺物（焼成室）と焚口床面から出土した遺物

分焰柱から煙道部に向かって約3mのところで床面を掘り下げて改修を行なっている。その最終床面よりも下から遺物が数点出土している。

碗（41頁に図面あり）

焼成室から出土したもののうち、分類可能なものは2点である。各部の法量は、口径が16.7～16.5cm、高台径が9.1～8.5cm、器高が5.0～4.8cmを測定した。その平均は、口径16.6cm、高台径8.8cm、器高4.9cmである。高台底面の付着痕はすべて粉痕ある。底面外面の調整痕はすべて糸切り後ナデである。内面底部の見込みは回転ナデ1点、横ナデ1点である。胎土はすべて良である。焼成は良1点、不良1点である。

器形分類は、体部がD類2点である。口縁端部は1類1点、2類1点である。

遺物番号	出土位置	法量(cm)			高台底面付着痕	底面外面	見込み	焼成	胎土	器形分類		備考
		口径	高台径	器高						体部	口縁端部	
79	2号窯焼成室 床面下 床面下	16.5	8.5	5.0	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	D	2	ほぼ完品
500	2号窯焼成室 床面下 床面下	16.7	9.1	4.8	もみ	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	D	1	ゆがむ

第13表 2号窯床面下碗類観察表

皿

皿の場合点数が少ないため、焚口の床面から出土した遺物もここに加えた。

焚口と焼成室から1点ずつ分類可能なものが出土している。各部の法量は、口径が8.7cm、高台径が4.9～4.6cm、器高が2.8cmを測定した。その平均は、口径8.7cm、高台径4.8cm、器高2.8cmである。底面外面の調整痕は糸切り1点、糸切り後ナデ1点である。内面底部の見込みは横ナデ1点、不明1点である。胎土と焼成は両方ともすべて良である。

器形分類は、体部のC類1点、D類1点、口縁端部はすべて1類、高台底部はすべてI系である。

遺物番号	出土位置	法量(cm)			高台底面付着痕	底面外面	見込み	焼成	胎土	器形分類		備考	
		口径	高台径	器高						高台	体部		
786	2号窯 焚口 床面下 床面下 (8.8)	4.9	(2.4)	-	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	I	C	1	重ね焼片付着、ゆがむ	
787	2号窯 焚成室 床面下 床面下	8.7	4.6	2.8	-	糸切り	不明	良	良	I	D	1	カマクソ・輪付着、ひび割れ

第14表 2号窯床面下皿類観察表

灰原

2号窯の灰原の遺構は検出確認することは出来なかったが、2号窯のものと思われる遺物が数点出土している。

碗

出土したもののうち、分類可能なものは4点である。各部の法量は、口径が15.9cm、高台径が9.2～7.6cm、器高が5.3cmを測定した。その平均は、口径15.9cm、高台径8.4cm、器高5.3cmである。高台底面の付着痕は粉痕3点、粉・砂痕1点である。底面外面の調整痕はすべて糸切りである。内面底部の見込みは回転ナデ3点、横ナデ1点である。胎土は良3点、不良1点である。焼成は最良1点、良2点、不良1点である。

器形分類は、体部がB類1点、C類2点、D類1点である。口縁端部はすべて1類である。

遺物番号	出土位置	法量(cm)			高台底面付着痕	底面外面	見込み	焼成	胎土	器形分類		備考
		口径	高台径	器高						体部	口縁端部	
403	2号窯 底原	(16.8)	7.7	(5.7)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	
404	2号窯 底原	15.9	7.6	5.3	もみ・砂	糸切り後ナデ	回転ナデ	較良	良	C	1	
405	2号窯 底原	(17.6)	8.9	(4.4)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	C	1	砂粒付着
406	2号窯 底原	(17.0)	9.2	(5.0)	もみ	糸切り後ナデ	横ナデ	不良	不良	B	1	

第15表 2号窯底原碗類観察表

III

出土したもののうち、分類可能なものは3点である。各部の法量は、口径が8.6~8.5cm、高台径が5.1~4.3cm、器高が2.7~2.4cmを測定した。その平均は、口径8.6cm、高台径4.8cm、器高2.6cmである。高台底面の付着痕はすべて糊痕である。底面外面の調整痕は糸切り後ナデ2点、ナデ1点である。内面底部の見込みは横ナデ2点、不明1点である。胎土と焼成は両方ともすべて良である。

器形分類は、体部のC類2点、D類1点、口縁端部はすべて1類、高台底部は、すべてII系である。



第30図 2号窯底原皿類遺物実測図 写真32 2号窯底原皿類

遺物番号	出土位置	法量(cm)			高台底面付着痕	底面外面	見込み	焼成	胎土	器形分類		備考
		口径	高台径	器高						高台	体部	
582	2号窯 底原	8.6	5.0	2.7	もみ	糸切り後ナデ	不明	良	良	II	C	1 天場もの、ひび割れ。全体に黒い、完形品
749	2号窯 底原	8.5	4.3	2.4	もみ	ナデ	横ナデ	良	良	II	D	1 重ね焼片付着、ゆがむ
750	2号窯 底原	(9.6)	5.1	(2.8)	もみ	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	II	C	1

第16表 2号窯底原皿類観察表

土師質壺

灰原から伊勢型鍋の口縁付近の破片が1点出土している。口縁端部は、短く内側に折り返されて肥厚している。胎土は浅橙色であるが、表面が鮮やかな橙色である。首と体部の切り変わるところに段が入っている。遺物の状態はもうろい。



第31図 2号窯底原土師質壺遺物実測図

写真33 2号窯底原土師質壺

遺物番号	出土位置	法量(cm)					残存率(%)				状態	備考
		口径	頸基部径	胸部最大径	底径	器高	口頭部高	口縁	頭部	胸部	底部	
825	2号窯 底原	(24.0)	(20.9)	-	-	-	1.3	5	10	-	-	もうろい 口縁付近の破片のみ

第17表 2号窯底原土師質壺観察表

3号窯に関する遺物

焼成室・燃焼室・焚口と灰原から碗・皿と鉢・壺の破片が出土している。窯内からの遺物が一番多く出土した。碗には、文字や模様状のものが入るものがあった。

碗

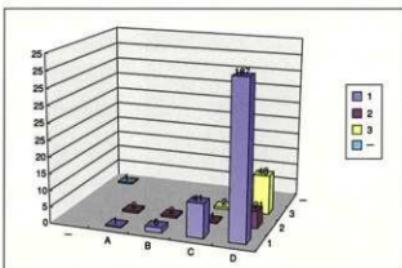
出土したもののうち、分類可能なものは312点である。これは、碗類全体の中で最も多く、約60%を占めていた。

各部の法量は、口径が18.2~15.1cm、高台径が9.9~6.6cm、器高が6.0~4.4cmを測定した。その平均は、口径16.6cm、高台径8.1cm、器高5.1cmである。高台底面の付着痕は粉痕260点(83.3%)、粉・砂痕37点(11.8%)、不明2点(1%)、高台なし13点(4.2%)である。高台が無いもののうち6点は「高台を付着させた形跡の無いもの」である。底面外面の調整痕は糸切り16点(5%)、糸切り後センイ痕6点(2%)、糸切り後ナデ240点(76%)、糸切り後ナデ後板目2点(1%)、ナデ42点(13%)、ナデ後板目2点(1%)、ナデ後センイ痕3点(1%)、底部欠損のもの1点(1%)である。内面底部の見込みは回転ナデ256点(82%)、横ナデ44点(14%)、不明11点(3%)、底部欠損のもの1点(1%)である。胎土は最良15点、良292点、不良5点である。

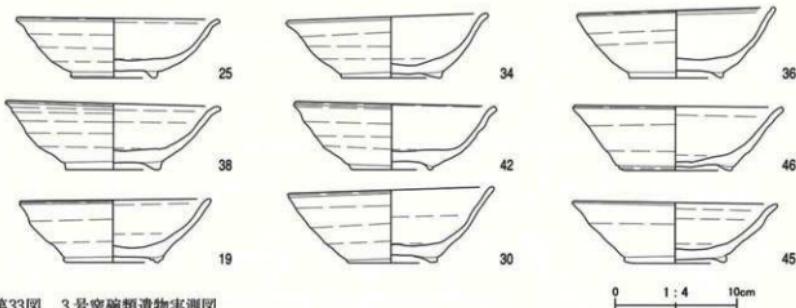
器形分類については、下記の表で記すことにした。

	口縁端部				
体部	1類	2類	3類	底部欠損	総計
A類	1(0.3%)	2(0.6%)	0	0	3(1%)
B類	6(1.9%)	2(0.6%)	0	0	8(2.6%)
C類	41(13.1%)	1(0.3%)	2(0.6%)	0	44(14.1%)
D類	187(59.9%)	21(6.7%)	48(15.4%)	0	256(82%)
底部欠損	0	0	0	1(0.3%)	1(0.3%)
純計	235(75.3%)	26(8.3%)	50(16%)	1(0.3%)	312(100%)

第18表 3号窯出土碗類器形分類別組合せ表



第32図 3号窯碗類器形分類別組成図

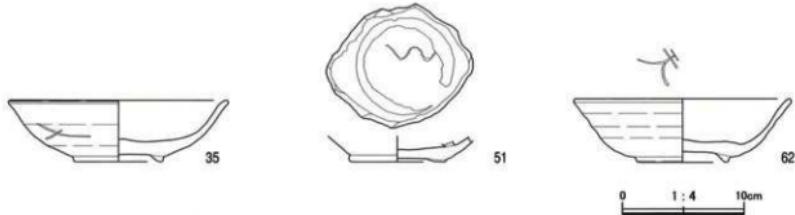


第33図 3号窯碗類遺物実測図



写真34 3号窯碗類

碗の中には、文字や模様状のものが入る遺物が4点見つかっている。焼成室で3点、燃焼室で1点出土した。遺物番号35には外面体部に「×」状の模様、遺物番号51には内面底部にアルファベットの「W」に類似した模様、遺物番号62には内面底部に漢字の「天」の字、遺物番号260には外面体部に浅く不鮮明ではあるが文字状の線が入っているものもあった。



第34図 3号窯碗類特殊品遺物実測図（その1）



第34図 3号窯碗類特殊品遺物実測図（その2）写真35 3号窯碗類特殊品

遺物番号	出土位置	法量(cm)	高台底面	底面外観	見込み	焼成	鉄土	器形分類	備考	
		口径	高台口径		付着痕			体部	口縁端部	
11	3号窯 焼成室	165	90	45	6mm	系切り後ナデ	回転ナデ	良	C 1	ほぼ完形品
12	3号窯 焼成室	162	91	51	6mm	系切り後ナデ	横ナデ	良	D 1	完形品
13	3号窯 焼成室	153	82	55	6mm	系切り後ナデ	回転ナデ	不良	C 3	
14	3号窯 焼成室	158	91	49	6mm・砂	ナデ後板目	横ナデ	良	D 1	重ね焼片付着、ほぼ完形品
15	3号窯 焼成室	164	85	44	6mm・砂	系切り後ナデ	横ナデ	良	D 1	重ね焼片・砂粒付着、完形品
16	3号窯 焼成室	155	95	56	6mm	系切り後ナデ	回転ナデ	良	D 1	重ね焼片・砂粒付着、ゆがむ
17	3号窯 焼成室	158	90	54	6mm	系切り後ナデ	回転ナデ	良	C 1	
18	3号窯 焼成室	157	84	51	6mm	系切り後ナデ	回転ナデ	良	D 1	重ね焼片付着
19	3号窯 焼成室	155	81	51	6mm	系切り後ナデ	回転ナデ	良	C 1	重ね焼片付着、ほぼ完形品、全体に黒っぽい
20	3号窯 焼成室	155	69	52	6mm	系切り後ナデ	横ナデ	最良	A D 3	
21	3号窯 焼成室	163	80	50	6mm	ナデ	回転ナデ	良	C 1	底部にひび割れ
22	3号窯 焼成室	162	74	48	6mm	系切り後ナデ	回転ナデ	最良	A D 1	
23	3号窯 焼成室	164	75	52	6mm	ナデ	回転ナデ	良	D 3	
24	3号窯 焼成室	168	76	53	6mm	系切り後ナデ	回転ナデ	良	D 3	重ね焼片・カマクツ付着、ほぼ完形品
25	3号窯 焼成室	165	71	48	6mm・砂	系切り後ナデ	回転ナデ	良	D 3	ほぼ完形品
26	3号窯 焼成室	165	79	52	6mm	系切り後ナデ	回転ナデ	良	D 3	内面底部に砂粒付着、ほぼ完形品
27	3号窯 焼成室	172	80	53	6mm	系切り後ナデ	回転ナデ	良	D 3	完形品
28	3号窯 焼成室	168	86	50	6mm	ナデ	回転ナデ	良	D 3	ほぼ完形品、外底底面に穴あり
29	3号窯 焼成室	163	78	50	6mm	系切り後ナデ	回転ナデ	良	D 3	口縁に砂粒付着、ほぼ完形品
30	3号窯 焼成室	168	74	59	6mm	系切り後ナデ	横ナデ	不良	A 1	体部にひび割れ、完形品
31	3号窯 焼成室	165	76	51	6mm	ナデ	回転ナデ	良	D 3	
32	3号窯 焼成室	160	77	53	6mm	系切り後ナデ	回転ナデ	良	D 1	砂粒付着、完形品、釉たれ
33	3号窯 焼成室	157	74	49	6mm	ナデ	回転ナデ	良	D 1	
34	3号窯 焼成室	163	83	50	6mm	系切り後ナデ	回転ナデ	良	D 1	重ね焼片付着、完形品
35	3号窯 焼成室	(176)	74	(50)	6mm	系切り後ナデ	回転ナデ	良	D 1	「×」のような模様、黒いもの・砂粒付着
36	3号窯 焼成室	158	77	55	6mm	系切り後ナデ	回転ナデ	良	B 1	ゆがむ、ほぼ完形品、黒いもの・キズ・砂粒付着
37	3号窯 焼成室	169	79	54	6mm	ナデ	回転ナデ	良	D 1	完形品
38	3号窯 焼成室	172	78	54	6mm・砂	系切り後ナデ	回転ナデ	良	D 1	良形品
39	3号窯 焼成室	163	80	53	6mm	系切り後ナデ	回転ナデ	良	D 3	底部にひび割れ
40	3号窯 焼成室	160	75	50	6mm	ナデ	横ナデ	良	D 3	砂粒付着、完形品、釉たれ
41	3号窯 焼成室	169	78	53	6mm	系切り後ナデ	回転ナデ	良	D 1	底部にひび割れ
42	3号窯 焼成室	163	68	54	6mm	系切り後ナデ	回転ナデ	良	D 3	ほぼ完形品
43	3号窯 焼成室	165	75	53	6mm	系切り後ナデ	回転ナデ	良	D 1	
44	3号窯 焼成室	165	83	54	6mm	系切り後ナデ	回転ナデ	不良	D 3	ほぼ完形品、黒っぽい生焼け
45	3号窯 焼成室	165	84	49	6mm	系切り後ナデ	横ナデ	良	C 1	完形品、口縁にひび割れ

第19表 3号窯碗類觀察表（その1）

遺物番号	出土位置	法量(cm)			高台底面 付着部	底面外観	見込み	焼成	胎土	器形分類	備考
		口径	高台径	器高						部体	口縁端部
46 3号窯 慶應室	16.8 9.3 5.2	もみ	糸切り後ナデ	横ナデ	真	良	C	3	はほ完形品、内面底部指で整形		
47 3号窯 慶應室	16.9 8.1 6.0	もみ	糸切り	回転ナデ	良	良	C	1	底部にひび割れ、胎土に3~6mmの大いな石含む		
48 3号窯 慶應室	16.0 8.9 5.0	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	C	1			
49 3号窯 慶應室	15.8 7.6 5.2	もみ	糸切り	横ナデ	良	良	D	1			
50 3号窯 慶應室	15.4 7.8 4.8	もみ・砂	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	D	2			
51 3号窯 慶應室	- (7.9) -	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	-	-	底部のみ残存、「W」状の模様、重ね焼片付着		
52 3号窯 慶應室	15.8 7.8 5.0	もみ	糸切り	回転ナデ	良	良	D	1			
53 3号窯 慶應室	16.1 9.0 5.3	もみ・砂	糸切り後ナデ	回転ナデ	真	良	C	1	内面底部に黒い砂粒が一部付着、はほ完形品		
54 3号窯 慶應室	16.3 7.6 5.1	もみ	糸切り後ナデ	横ナデ	真	良	D	1	高台の作りがきれい		
55 3号窯 慶應室	15.7 8.8 5.3	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	C	1			
56 3号窯 慶應室	15.6 8.7 4.6	もみ	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	D	1	重ね焼片付着		
57 3号窯 慶應室	16.1 7.0 5.2	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	はほ完形品、口縁・体部にひび割れ		
58 3号窯 慶應室	16.9 8.2 5.8	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	完形品		
59 3号窯 慶應室	16.6 7.7 5.1	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	はほ完形品		
60 3号窯 慶應室	16.5 7.2 5.2	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	3			
61 3号窯 慶應室	17.4 7.8 5.4	もみ	糸切り	回転ナデ	良	良	D	3	はほ完形品		
62 3号窯 慶應室	(17.5) 7.5 (5.2)	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	D	2	「天」の文字		
63 3号窯 黄口	16.6 7.5 5.0	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	3			
64 3号窯	16.1 9.3 4.7	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	C	1	重ね焼片付着、完形品、体部にひび割れ		
145 3号窯 烧成室	(16.0) 8.0 (4.8)	砂	糸切り	横ナデ	良	不良	C	1			
146 3号窯 烧成室	(16.4) 8.4 (5.4)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	砂粒付着		
147 3号窯 烧成室	15.8 8.7 5.2	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	D	1			
148 3号窯 烧成室	(16.2) 9.3 (4.8)	もみ・砂	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	2	重ね焼片付着、底部1/2ハクリ		
149 3号窯 烧成室	16.0 9.6 4.8	もみ	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	D	1	ゆがむ		
150 3号窯 烧成室	16.9 8.9 5.3	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	C	1	重ね焼片付着、ゆがむ		
151 3号窯 烧成室	16.4 8.1 5.0	もみ	糸切り	回転ナデ	良	良	D	1	底面にひび割れ		
152 3号窯 烧成室	15.5 9.0 5.0	もみ・砂	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	ゆがむ、底面にひび割れ		
153 3号窯 烧成室	16.4 8.8 4.8	砂	ナデ	回転ナデ	不明	良	D	1	天場もの、ゆがむ、重ね焼片付着、はほ完形品		
154 3号窯 烧成室	16.4 8.5 4.7	もみ	糸切り	回転ナデ	良	良	C	1	はほ完形品		
155 3号窯 烧成室	15.9 8.3 4.8	もみ	ナデ後板目	横ナデ	良	良	C	1	ゆがむ、砂粒付着		
156 3号窯 烧成室	(16.4) 8.3 (4.6)	もみ	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	B	1	ゆがむ、高台稍凹		
157 3号窯 烧成室	17.4 8.5 5.4	もみ	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	C	1	重ね焼片付着		
158 3号窯 烧成室	16.2 8.8 5.1	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	2	重ね焼片付着		
159 3号窯 烧成室	16.5 9.4 5.0	もみ	糸切り後ナデ	不明	良	良	D	1	天場もの、ゆがむ、重ね焼片・砂粒付着		
160 3号窯 烧成室	(16.8) 9.2 (5.7)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	天場もの、内面底部に重ねでは無い高台付着		
161 3号窯 烧成室	(16.8) 8.4 (5.0)	もみ	糸切り	回転ナデ	不良	良	C	1			
162 3号窯 烧成室	16.5 9.9 5.7	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	C	1	重ね焼片付着		
163 3号窯 烧成室	(16.0) 8.0 (5.1)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	D	1			
164 3号窯 烧成室	16.3 8.5 5.3	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	2	カマクソ付着、ゆがむ		
165 3号窯 烧成室	17.3 (7.5) (5.3)	もみ・砂	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	底部ひび割れ		
166 3号窯 烧成室	16.5 8.2 5.4	もみ・砂	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	D	1	重ね焼片付着		
167 3号窯 烧成室	17.2 7.7 5.3	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	3	重ね焼片付着		
168 3号窯 烧成室	17.0 (8.0) (5.3)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	3	天場もの、砂粒付着、はほ完形品		
169 3号窯 烧成室	16.8 8.5 5.5	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	3	外面部黒い		
170 3号窯 烧成室	16.6 7.5 5.1	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	D	3	砂粒付着		
171 3号窯 烧成室	16.5 7.3 5.3	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1			
172 3号窯 烧成室	17.3 (8.5) (5.1)	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	D	1			
173 3号窯 烧成室	16.5 8.0 5.3	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1			
174 3号窯 烧成室	16.9 8.5 5.1	もみ・砂	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	3			
175 3号窯 烧成室	17.3 (9.0) (5.7)	もみ	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	D	1	体部にひび割れ		
176 3号窯 烧成室	(16.8) 7.9 (5.2)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	3	高台稍円、砂粒付着		
177 3号窯 烧成室	(16.6) 8.5 (4.8)	砂	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	2			
178 3号窯 烧成室	17.0 8.4 5.4	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	ゆがむ		
179 3号窯 烧成室	17.0 8.0 5.1	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	砂粒付着		
180 3号窯 烧成室	(16.8) 8.5 (5.8)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	D	3	高台稍円		
181 3号窯 烧成室	(15.6) (7.3) (5.6)	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	D	1			
182 3号窯 烧成室	16.4 7.6 5.1	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1			
183 3号窯 烧成室	(16.8) 8.7 (5.4)	もみ	糸切り後ナデ	不明	良	良	D	1	重ね焼片・砂粒付着、ゆがむ、高台稍円		
184 3号窯 烧成室	16.6 7.7 5.2	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	ゆがむ		
185 3号窯 烧成室	17.4 8.5 5.3	もみ・砂	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1			
186 3号窯 烧成室	16.9 7.5 5.4	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	重ね焼片付着、ゆがむ		
187 3号窯 烧成室	16.5 8.1 4.9	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	D	3	砂粒付着		
188 3号窯 烧成室	16.9 7.9 5.1	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	重ね焼片・砂粒付着、ゆがむ		
189 3号窯 烧成室	16.3 7.1 5.2	もみ	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	D	3	カマクソ付着		
190 3号窯 烧成室	16.3 7.3 5.2	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	最良	最良	D	3	砂粒付着、はほ完形品		
191 3号窯 烧成室	(16.8) 7.5 (5.0)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1			
192 3号窯 烧成室	17.5 7.5 4.9	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	砂粒付着		
193 3号窯 烧成室	17.2 7.7 5.4	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	最良	最良	D	1	見込み部分に折痕あり		
194 3号窯 烧成室	16.6 7.1 5.0	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	最良	最良	D	1	砂粒付着、完形品、ゆがむ		
195 3号窯 烧成室	17.4 8.2 5.2	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1			
196 3号窯 烧成室	16.8 8.6 5.4	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	砂粒付着		
197 3号窯 烧成室	16.9 8.3 5.3	もみ・砂	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1			
198 3号窯 烧成室	(17.0) 8.2 (4.7)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	ゆがむ		
199 3号窯 烧成室	16.9 7.8 4.7	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	はほ完形品		

第19表 3号窯瓶類觀察表 (その2)

遺物番号	出土位置	法量(cm)		高台底面 付着痕	底面外観	見込み	焼成	胎土	器形分類 部体 口縁端部	備考
		口径	高台径							
200	3号窯 焼成窓	(18.0)	(8.7)	(5.4)	らみ・砂	系切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D 3	重ね焼片付着
201	3号窯 焼成窓	16.7	8.2	5.1	らみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D 1	重ね焼片付着
202	3号窯 焼成窓	16.2	8.0	5.1	らみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D 1	砂粒付着、完形品
203	3号窯 焼成窓	17.8	8.1	5.3	らみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良 最良	D 1	
204	3号窯 焼成窓	17.5	8.0	4.9	らみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D 1	砂粒付着
205	3号窯 焼成窓	16.6	7.7	5.1	らみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D 1	口縁稍円
206	3号窯 焼成窓	16.7	底径6.6	(4.9)	-	系切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D 3	高台全てハクリ、カマツク付着
207	3号窯 焼成窓	17.6	7.6	5.1	らみ	ナデ	回転ナデ	良 良	D 1	砂粒付着
208	3号窯 焼成窓	17.3	7.8	5.3	らみ	系切り後ナデ	不明	良 良	D 1	見込み部分に指圧痕あり
209	3号窯 焼成窓	15.2	7.5	5.4	らみ	ナデ	回転ナデ	良 良	D 2	砂粒・カマツク付着、ゆがむ
210	3号窯 焼成窓	16.0	6.9	4.9	らみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D 1	砂粒付着
211	3号窯 焼成窓	17.0	8.0	5.4	らみ・砂	系切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D 1	砂粒付着、底部ひび割れ
212	3号窯 焼成窓	16.2	7.6	5.4	らみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D 1	
213	3号窯 焼成窓	16.9	7.8	5.3	らみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D 1	
214	3号窯 焼成窓	16.8	7.9	5.2	らみ	ナデ	回転ナデ	良 良	D 1	
215	3号窯 焼成窓	16.7	7.7	4.9	らみ・砂	系切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D 1	砂粒付着、ゆがむ
216	3号窯 焼成窓	17.1	8.3	5.3	らみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D 1	
217	3号窯 焼成窓	16.7	7.5	5.2	らみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D 1	外表面に細く1条入る
218	3号窯 焼成窓	16.6	(7.9)	(4.9)	らみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D 1	口縁稍円
219	3号窯 焼成窓	17.7	8.1	4.9	らみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D 1	口縁稍円、完形品
220	3号窯 焼成窓	17.3	8.1	5.8	らみ・砂	系切り後ナデ	回転ナデ	不良	D 3	完形品
221	3号窯 焼成窓	17.7	8.1	5.2	らみ・砂	ナデ	回転ナデ	良 良	D 1	
222	3号窯 焼成窓	(16.8)	8.2	(4.7)	らみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D 1	砂粒付着
223	3号窯 焼成窓	16.4	(7.0)	(5.3)	らみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D 1	砂粒付着
224	3号窯 焼成窓	16.6	8.3	5.2	らみ・砂	系切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D 3	底部・体部にひび割れ
225	3号窯 焼成窓	16.7	7.6	5.6	らみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D 3	
226	3号窯 焼成窓	16.9	(8.6)	(5.2)	らみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D 1	高台ほんとハクリ
227	3号窯 焼成窓	(17.6)	7.4	(4.8)	らみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D 3	砂粒付着
228	3号窯 焼成窓	16.7	7.7	5.4	らみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D 1	
229	3号窯 焼成窓	17.0	8.0	4.9	らみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D 2	重ね焼片・砂粒付着
230	3号窯 焼成窓	17.1	8.0	5.1	らみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D 1	
231	3号窯 焼成窓	17.0	7.5	4.8	らみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D 3	内面体部・口縁に砂粒付着
232	3号窯 焼成窓	17.0	8.1	5.4	らみ	ナデ	回転ナデ	良 良	D 2	
233	3号窯 焼成窓	17.9	8.0	5.3	らみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D 1	口縁稍円、底部ひび割れ
234	3号窯 焼成窓	17.2	底径5.1	-	らみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D 1	高台全てハクリ
235	3号窯 焼成窓	(16.8)	7.8	(5.4)	らみ	ナデ	回転ナデ	良 良	D 1	
236	3号窯 焼成窓	16.6	7.5	4.9	らみ	ナデ	回転ナデ	良 良	D 1	砂粒・カマツク付着、ゆがむ
237	3号窯 焼成窓	(17.2)	7.9	(5.3)	らみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D 2	底部にひび割れ
238	3号窯 焼成窓	16.9	7.1	5.2	らみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D 1	砂粒付着
239	3号窯 焼成窓	16.6	7.4	5.0	らみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D 1	砂粒付着
240	3号窯 焼成窓	(17.0)	8.1	(5.5)	らみ	ナデ	回転ナデ	良 良	D 1	ゆがむ
241	3号窯 焼成窓	16.0	7.2	5.0	らみ	ナデ	回転ナデ	良 良	D 1	砂粒付着
242	3号窯 焼成窓	16.9	7.4	4.9	らみ	ナデ	回転ナデ	良 良	D 2	砂粒付着、ゆがむ
243	3号窯 焼成窓	17.1	8.0	5.1	らみ	系切り後ナデ	回転ナデ	A A	A 2	砂粒付着
244	3号窯 焼成窓	17.1	8.1	5.3	らみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D 1	体部・底部にひび割れ、外面部部が黒っぽい
245	3号窯 焼成窓	(16.4)	8.8	(5.0)	らみ	ナデ	回転ナデ	良 良	D 1	
246	3号窯 焼成窓	16.5	(7.4)	(4.9)	らみ・砂	系切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D 3	底部にひび割れ
247	3号窯 焼成窓	17.5	8.0	5.4	らみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D 1	重ね焼片付着、ゆがむ
248	3号窯 焼成窓	17.1	7.7	5.1	らみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D 1	
249	3号窯 焼成窓	16.4	8.5	5.6	らみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D 1	
250	3号窯 焼成窓	17.4	7.9	5.1	らみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D 1	砂粒付着、ゆがむ
251	3号窯 焼成窓	16.6	7.5	5.3	らみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D 3	砂粒付着
252	3号窯 焼成窓	16.7	8.0	5.2	らみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D 1	砂粒付着
253	3号窯 焼成窓	(16.4)	7.3	(5.3)	らみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D 1	
254	3号窯 焼成窓	17.6	8.0	5.4	らみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D 1	
255	3号窯 焼成窓	17.0	7.5	5.1	らみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D 2	砂粒付着、ゆがむ
256	3号窯 焼成窓	15.9	7.4	4.6	らみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D 2	砂粒付着、ゆがむ
257	3号窯 焼成窓	16.6	7.3	5.0	らみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D 3	天窓もの、砂粒付着、ほほ完形品
258	3号窯 焼成窓	16.8	7.6	5.2	らみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D 2	砂粒付着
259	3号窯 焼成窓	16.9	7.4	4.7	らみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D 1	重ね焼片付着、口縁稍円
260	3号窯 焼成窓	(18.6)	-	-	-	-	-	良 良	D 1	口縁と体部の破片のみ、外面部部に文字入る
261	3号窯 焼成窓	17.7	8.3	5.5	らみ	系切り後ナデ	回転ナデ	不良 総良	D 1	体部にひび割れ
262	3号窯 焼成窓	17.6	(8.7)	(5.0)	らみ	系切り後ナデ	回転ナデ	不良 良	D 1	
263	3号窯 焼成窓	17.4	(8.0)	(5.6)	らみ	系切り後ナデ	回転ナデ	不良 良	D 3	生焼け
264	3号窯 焼成窓	18.1	(8.4)	(5.1)	らみ	系切り後ナデ	回転ナデ	不良 良	D 1	生焼け、高台ほんとハクリ
265	3号窯 焼成窓	16.8	7.8	4.9	らみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D 3	重ね焼片・砂粒付着
266	3号窯 焼成窓	16.9	8.2	5.0	らみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D 1	砂粒付着、体部にひび割れ・何かで突き刺した孔
267	3号窯 焼成窓	16.2	8.4	5.5	らみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D 3	底部にひび割れ、ゆがむ
268	3号窯 焼成窓	18.0	7.8	5.3	らみ	系切り後ナデ	回転ナデ	不良 良	D 1	生焼けっぽい、体部にひび割れ
269	3号窯 焼成窓	18.0	(8.5)	(5.2)	らみ	系切り後ナデ	回転ナデ	不良 良	D 1	生焼け
270	3号窯 焼成窓	17.7	8.2	5.7	らみ	系切り後ナデ	回転ナデ	不良 良	D 1	生焼け、体部～底部にひび割れ
271	3号窯 焼成窓	17.6	(7.8)	(5.4)	らみ	系切り後ナデ	回転ナデ	不良 良	D 3	生焼け、高台ほんとハクリ
272	3号窯 焼成窓	18.0	(8.8)	(5.7)	らみ	系切り後ナデ	回転ナデ	不良 良	D 1	生焼け、高台ほんとハクリ
273	3号窯 焼成窓	17.1	(8.4)	(5.5)	不明	系切り後ナデ	回転ナデ	不良 良	D 1	生焼け、高台ほんとハクリ

第19表 3号窯碗類觀察表（その3）

遺物番号	出土位置	法量 (cm)	高台底面 付着板	底面外面	見込み	焼成	胎土	器形分類		備考
								部体	口縁端部	
274 3号窯 燃成室	17.9	8.5	5.6	もみ	ナデ	回転ナデ	不良	良	D	2 生焼け
275 3号窯 燃成室	17.6	8.1	5.6	もみ	系切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	D	1 生焼け
276 3号窯 燃成室	17.4	7.4	5.7	もみ	ナデ	回転ナデ	不良	良	D	1 生焼け、口縁一部体にひび割れ
277 3号窯 燃成室	17.4	(8.2)	(5.7)	不明	系切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	D	3 生焼け、高台ほんじハクリ
278 3号窯 燃成室	18.2	8.1	5.5	もみ	ナデ	回転ナデ	不良	良	D	1 生焼け
279 3号窯 燃成室	18.1	(8.5)	(5.5)	もみ	系切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	D	1
280 3号窯 窓口	(17.0)	8.0	(5.4)	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	C	跡跡・カマツ付着
281 3号窯 窓口	17.0	(7.9)	(5.0)	もみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1 高台ほんじハクリ
282 3号窯 燃焼室	(15.4)	8.6	(5.4)	もみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1 穏妙付着
283 3号窯 燃焼室	8.5	8.5	5.6	もみ・砂	系切り後ナデ	回転ナデ	良	良	C	1 重ね焼片付着、ゆがむ、高台稍円
284 3号窯 燃焼室	(17.6)	8.1	(5.3)	もみ	系切り後ナデ	不明	良	良	C	1 天場もの、カマツ付着、ゆがむ
285 3号窯 燃焼室	(15.6)	8.4	(5.3)	もみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良	良	C	2 重ね焼片・砂粒付着
286 3号窯 燃焼室	(16.0)	8.4	(5.2)	もみ	ナデ	横ナデ	良	良	D	1
287 3号窯 燃焼室	16.0	8.2	5.1	もみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良	良	C	1 内面体部に重ね焼片・砂粒付着、外面部が黒っぽい
288 3号窯 燃焼室	16.0	8.1	4.8	もみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良	最良	D	1 重ね焼片付着
289 3号窯 燃焼室	(17.6)	8.7	(4.9)	もみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良	良	C	1
290 3号窯 燃焼室	16.6	8.1	5.5	もみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1 重ね焼片付着
291 3号窯 燃焼室	16.7	底径9.1	5.2	-	系切り	回転ナデ	良	良	D	1 重ね焼片・砂粒付着、高台全てハクリ
292 3号窯 燃焼室	16.5	底径9.0	(4.4)	-	系切り	回転ナデ	良	良	D	1 砂粒付着、高台全てハクリ、ゆがむ
293 3号窯 燃焼室	(16.4)	8.5	(5.2)	もみ・砂	ナデ	回転ナデ	良	良	D	1
294 3号窯 燃焼室	(17.6)	(10.4)	(6.2)	もみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良	良	C	1
295 3号窯 燃焼室	16.4	8.6	5.1	もみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1
296 3号窯 燃焼室	(16.0)	8.8	(5.1)	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	C	1
297 3号窯 燃焼室	(17.0)	7.9	(5.5)	もみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良	良	C	1 高台稍円
298 3号窯 燃焼室	(17.6)	8.3	(5.0)	もみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良	良	C	1
299 3号窯 燃焼室	9.0	测定不能	もみ	系切り後ナデ	不明	良	良	C	1 天場もの、カマツ付着、ゆがむ	
300 3号窯 燃焼室	(17.2)	8.1	(5.3)	もみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1 重ね焼片付着
301 3号窯 燃焼室	16.9	8.9	5.5	もみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1
302 3号窯 燃焼室	(15.6)	9.6	(5.4)	もみ	系切り後ナデ	横ナデ	良	良	D	1 重ね焼片付着、内面底面全体に指ナデ
303 3号窯 燃焼室	9.0	测定不能	もみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1 ゆがむ	
304 3号窯 燃焼室	(16.2)	8.0	(5.0)	もみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1 重ね焼片付着
305 3号窯 燃焼室	(16.0)	9.0	(4.2)	もみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良	良	C	1 ゆがむ
306 3号窯 燃焼室	17.0	7.4	4.8	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	D	1
307 3号窯 燃焼室	(16.2)	8.2	(5.3)	もみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1
308 3号窯 燃焼室	16.5	7.8	5.0	もみ	系切り	回転ナデ	良	良	D	1 重ね焼片付着
309 3号窯 燃焼室	16.2	(9.0)	(5.3)	もみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1 重ね焼片付着
310 3号窯 燃焼室	16.4	8.9	4.9	もみ	系切り	横ナデ	良	良	D	1
311 3号窯 燃焼室	16.2	7.7	5.2	もみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1 重ね焼片付着、ゆがむ
312 3号窯 燃焼室	(16.2)	7.9	(4.8)	もみ	系切り	回転ナデ	良	良	D	1
313 3号窯 燃焼室	15.5	8.0	5.0	もみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1 ゆがむ
314 3号窯 燃焼室	(15.8)	8.1	(5.2)	もみ	系切り後ナデ	横ナデ	良	良	D	1 重ね焼片付着、内面底面全体に指ナデ
315 3号窯 燃焼室	(16.0)	7.8	(5.5)	もみ・砂	系切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1 重ね焼片付着、底部にひび割れ
316 3号窯 燃焼室	(16.6)	(7.9)	(5.3)	もみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1 重ね焼片・カマツ付着
317 3号窯 燃焼室	16.1	8.0	4.8	もみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1 重ね焼片付着、ゆがむ
318 3号窯 燃焼室	(16.1)	底径7.5	4.7	もみ	系切り	回転ナデ	良	良	D	1 高台付着していた形跡なし、体部にひび割れ
319 3号窯 燃焼室	(15.0)	8.5	(5.0)	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	D	1 重ね焼片付着
320 3号窯 燃焼室	(16.4)	底径8.6	(5.3)	-	系切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1 高台全てハクリ
321 3号窯 燃焼室	16.4	9.2	5.8	もみ・砂	ナデ	回転ナデ	良	良	D	1 重ね焼片付着、底部にひび割れ
322 3号窯 燃焼室	(15.2)	8.5	(4.9)	-	ナデ後7.5mm	横ナデ	良	良	D	1 重ね焼片付着
323 3号窯 燃焼室	(16.0)	7.6	(4.7)	もみ	系切り後ナデ	横ナデ	良	良	D	1 重ね焼片付着
324 3号窯 燃焼室	16.1	7.2	4.8	もみ	系切り後ナデ	横ナデ	最良	最良	C	1 重ね焼片付着
325 3号窯 燃焼室	16.3	8.1	4.8	もみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良	良	C	1
326 3号窯 燃焼室	16.2	8.5	4.4	もみ	系切り後ナデ	横ナデ	良	良	D	1 重ね焼片付着、底部にひび割れ、軸たれ
327 3号窯 燃焼室	17.1	8.8	5.3	もみ	ナデ後7.5mm	横ナデ	良	良	D	1 重ね焼片付着、ゆがむ
328 3号窯 燃焼室	16.5	8.3	5.1	もみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1
329 3号窯 燃焼室	16.6	8.8	5.0	もみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1 体部にひび割れ、ゆがむ
330 3号窯 燃焼室	(16.0)	8.7	(5.8)	もみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良	良	C	1
331 3号窯 燃焼室	15.9	9.0	5.3	もみ・砂	系切り後ナデ	回転ナデ	良	良	B	1
332 3号窯 燃焼室	(16.4)	8.8	(5.1)	もみ	系切り後ナデ	横ナデ	良	良	B	1
333 3号窯 燃焼室	(17.6)	8.3	(5.1)	もみ	系切り後ナデ	横ナデ	良	良	D	1
334 3号窯 燃焼室	15.1	8.9	5.1	もみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	2 天場もの、カマツ・付着、ゆがむ
335 3号窯 燃焼室	底径7.5	测定不能	もみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1 体基が壊くゆがみ平らになった所に重ね焼片付着	
336 3号窯 燃焼室	17.0	8.7	4.8	もみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良	良	C	1 重ね焼片付着
337 3号窯 燃焼室	16.4	8.2	5.1	もみ	系切り後ナデ	横ナデ	良	良	D	1 重ね焼片付着、底部にひび割れ、口縁・高台稍円
338 3号窯 燃焼室	(16.0)	7.8	(4.5)	もみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良	不良	D	1 重ね焼片付着
339 3号窯 燃焼室	16.2	7.5	4.7	もみ・砂	系切り後ナデ	横ナデ	良	良	D	1 重ね焼片付着
340 3号窯 燃焼室	(16.6)	7.9	(4.3)	もみ	系切り後ナデ	横ナデ	良	良	D	1 ゆがむ
341 3号窯 燃焼室	(16.6)	7.3	(5.1)	もみ・砂	系切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1 重ね焼片付着
342 3号窯 燃焼室	(16.4)	7.8	(5.1)	もみ・砂	系切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1 重ね焼片付着
343 3号窯 燃焼室	17.1	底径9.7	5.3	-	ナデ後7.5mm	横ナデ	良	良	D	1 高台付着していた形跡なし、砂粒付着
344 3号窯 燃焼室	16.5	8.1	5.5	もみ	ナデ	横ナデ	良	良	C	1
345 3号窯 燃焼室	16.0	8.1	5.6	もみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1 重ね焼片付着
346 3号窯 燃焼室	16.7	8.4	5.0	もみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1 重ね焼片付着
347 3号窯 燃焼室	16.2	8.1	4.8	もみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1 ゆがむ

第19表 3号窯碗類観察表 (その4)

遺物 番号	出土位置	法量 (cm)		高台底面 付着痕	底面外面	見込み	焼成	胎土	器形分類 部体 口縁部	備考	
		口径	高台径								
348	3号窯 燃焼室	16.2	8.4	5.0	のみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D 1	ゆがむ	
349	3号窯 燃焼室	16.7	7.4	4.5	のみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良 良	C 1	砂粒・カマクソ付着、ゆがむ	
350	3号窯 燃焼室	(17.2)	7.6	(5.0)	のみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良 不良	D 1	重ね焼片付着	
351	3号窯 燃焼室	(17.0)	7.6	(4.4)	のみ	系切り後シノイ板	横ナデ	良 最良	D 1	重ね焼片付着、ゆがむ、体部にひび割れ	
352	3号窯 燃焼室	(16.6)	7.3	(5.2)	のみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D 1	重ね焼片付着	
353	3号窯 燃焼室	(16.2)	7.8	(4.8)	のみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D 1	重ね焼片・輪付着、ゆがむ	
354	3号窯 燃焼室	16.7	(9.2)	(5.2)	のみ	系切り後ナデ	横ナデ	良 良	D 2	重ね焼片・カマクソ付着、高台はとんびハクリ、ひび割れ	
355	3号窯 燃焼室	16.6	8.2	5.2	のみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D 1		
356	3号窯 燃焼室	(16.6)	8.3	(5.4)	のみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D 1	重ね焼片・砂粒付着	
357	3号窯 燃焼室	(17.0)	8.5	(5.2)	のみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D 1		
358	3号窯 燃焼室	(16.8)	8.4	(5.2)	のみ	系切り後ナデ	横ナデ	良 良	C 1		
359	3号窯 燃焼室	(16.4)	9.3	(5.0)	のみ	砂粒	系切り後ナデ	横ナデ	良 良	C 1	
360	3号窯 燃焼室	15.2	8.4	5.0	のみ	系切り後ナデ	横ナデ	不良 良	B 2	生焼けっぽい	
361	3号窯 燃焼室	(15.1)	8.3	(5.3)	のみ	砂粒	系切り後ナデ	横ナデ	良 良	A 2	
362	3号窯 燃焼室	(16.5)	7.2	5.1	のみ	系切り後ナデ	横ナデ	良 不良	D 1	砂粒付着	
363	3号窯 燃焼室	(16.6)	底径8.4	(4.4)	のみ	系切り後ナデ	回転ナデ	不良 不良	C 1	高台付着していた形跡なし、砂粒付着	
364	3号窯 燃焼室	16.0	8.2	5.3	のみ	系切り後ナデ	回転ナデ	不良 良	C 1	ゆがむ	
365	3号窯 燃焼室	15.5	8.2	5.2	のみ	系切り後ナデ	回転ナデ	不良 良	C 1		
366	3号窯 燃焼室	(16.0)	9.2	(4.5)	のみ	系切り後ナデ	不明	良 良	C 1	重ね焼片付着、器面荒れる	
367	3号窯 燃焼室	(16.4)	底径8.8	(5.0)	のみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D 1	高台付着していた形跡なし	
368	3号窯 燃焼室	16.9	7.8	4.9	のみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D 3	砂粒付着	
369	3号窯 燃焼室	(16.4)	7.8	(5.4)	のみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D 3	砂粒付着	
370	3号窯 燃焼室	16.2	9.8	4.9	のみ	系切り後ナデ	横ナデ	不良 良	D 1	生焼け、ゆがむ	
371	3号窯 燃焼室	16.1	7.3	5.3	のみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D 1	体部ひび割れ、口縁黒円	
372	3号窯 燃焼室	(17.6)	7.1	(5.2)	のみ	系切り後ナデ	不明	良 良	D 1	砂粒付着	
373	3号窯 燃焼室	16.8	7.4	5.2	のみ	ナデ	回転ナデ	良 良	D 1		
374	3号窯 燃焼室	16.4	(7.5)	(5.4)	のみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D 2	高台はとんびハクリ、外腹底部黒っぽい	
375	3号窯 燃焼室	16.7	7.5	4.9	のみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D 1		
376	3号窯 燃焼室	17.2	8.1	5.5	のみ	ナデ	回転ナデ	良 良	D 1	砂粒付着、底部ひび割れ、ほぼ完形品	
377	3号窯 燃焼室	17.3	7.4	5.1	のみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D 1	重ね焼片・カマクソ付着、ゆがむ	
378	3号窯 燃焼室	(15.0)	6.6	(5.0)	のみ	系切り後ナデ	横ナデ	良 良	C 1		
379	3号窯 無口	(16.8)	(8.2)	(5.4)	のみ	ナデ	回転ナデ	良 良	D 3		
380	3号窯 無口	(17.2)	7.8	(5.1)	のみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D 3		
381	3号窯 無口	(18.2)	8.3	(5.4)	のみ	系切り後ナデ	回転ナデ	不良 良	D 2	生焼けっぽい、ゆがむ	
382	3号窯 燃焼室	(16.6)	8.0	(5.2)	のみ	系切り後ナデ	良 最良	D 1			
383	3号窯 燃焼室	16.4	(7.5)	(5.7)	のみ	砂粒	系切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D 3	
384	3号窯 燃焼室	17.3	(8.5)	(5.2)	のみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良 最良	D 1	口縁付近に0.4cmの孔1個	
385	3号窯 燃焼室	(15.8)	(8.0)	(5.7)	のみ	ナデ	回転ナデ	良 良	D 1	砂粒付着、ゆがむ	
386	3号窯 燃焼室	16.4	8.0	5.3	のみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D 2	砂粒付着、ゆがむ	
387	3号窯 黄口	(16.0)	7.8	(4.7)	のみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D 1		
388	3号窯 黄口	16.4	8.2	5.1	のみ	系切り後ナデ	回転ナデ	不良 良	D 2		
389	3号窯 黄口	17.5	(8.2)	(5.5)	のみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D 3	高台はとんびハクリ、外腹底部黒っぽい	
390	3号窯 黄口	17.3	7.4	4.7	のみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D 1	重ね焼片・砂粒付着、ゆがむ	
391	3号窯 黄口	(16.2)	7.5	(5.2)	のみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D 1	高台縁円	
392	3号窯 黄口	17.0	(9.4)	(5.4)	のみ	系切り後ナデ	横ナデ	良 良	B 1	重ね焼片付着	
393	3号窯 黄口	16.4	底径8.6	4.8	-	系切り後ナデ	横ナデ	良 良	D 1	高台付着していた形跡なし	
394	3号窯 黄口	16.3	底径7.8	4.5	-	系切り後ナデ	横ナデ	良 良	D 1	天場もの、内面に小石1個付着	
395	3号窯 黄口	17.1	9.1	5.6	のみ	系切り後ナデ	不明	良 良	D 1	天場もの、カマクソ・遺物片・重ね焼片付着	
396	3号窯 黄口	(17.4)	(8.7)	(5.3)	のみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良 良	B 2	重ね焼片付着、ゆがむ、口縁・体部にひび割れ	
397	3号窯 黄口	8.8	度2.9	度5.5	のみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良 良	B 1	ゆがむ	
398	3号窯 黄口	(16.4)	7.6	(4.5)	のみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D 1	見た目全体が茶色い、カマクソ・砂粒・重ね焼片付着、ゆがむ	
399	3号窯 黄口	(17.4)	8.9	(5.2)	のみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D 1	高台はとんびハクリ	
400	3号窯 黄口	16.2	8.4	5.0	のみ	系切り後ナデ	横ナデ	良 良	D 1	ゆがむ、体部にひび割れ	
401	3号窯 黄口	底径16.9	底径9.5	4.8	-	系切り後セニイ板	横ナデ	良 良	D 1	高台付着していた形跡なし、ゆがむ、口縁・底部縁円	
402	3号窯 黄口	16.2	8.6	4.8	のみ	砂粒	ナデ後セニイ板	回転ナデ	良 良	D 1	重ね焼片付着、ゆがむ

第19表 3号窯碗類観察表 (その5)

遺物 番号	出土位置	法量 (cm)		高台底面 付着痕	底面外面	見込み	焼成	胎土	器形分類	備考
		口径	高台径							
814	3号窯 燃焼室	(14.8)	8.2	(5.2)	のみ	砂粒	系切り後ナデ	不明	良 良	重ね枚数: 7枚 最上段は天場もの、カマクソ・砂粒・遺物片付着
815	3号窯 燃焼室	-	8.4	-	のみ	系切り後ナデ	横ナデ	良 良	重ね枚数: 3枚 最上段の内側底に「×」のようなキズあり	
816	3号窯 燃焼室	-	8.5	-	のみ	砂粒	系切り後ナデ	不明	良 良	重ね枚数: 8枚 最上段は天場もの、付着

第20表 3号窯重ね碗類観察表

III

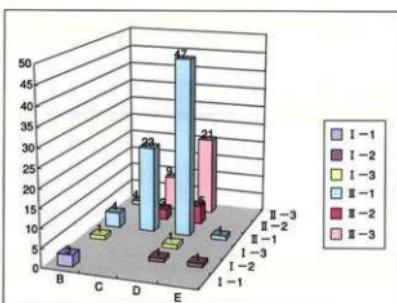
出土したもののうち、分類可能なものは121点である。これは、皿類で最も多く、43%を占めていた。

各部の法量は、口径が10.2~8.3cm、高台径が6.3~4.1cm、器高が3.4~2.5cmを測定した。その平均は、口径9.4cm、高台径5.2cm、器高3.0cmである。高台底面の付着痕は、糊痕106点(87.5%)、糊・砂痕4点(3.3%)、不明1点(0.8%)、高台なし10点(8.3%)である。底面外面の調整痕は、糸切り5点(4.1%)、糸切り後ナデ69点(56.6%)、ナデ45点(37.5%)、ナデ後板目1点(1%)、不明1点(1%)である。内面底部の見込みは、回転ナデ80点(65.8%)、横ナデ11点(9.1%)、不明30点(25%)である。胎土はすべて良である。焼成は良58点(47.5%)、不良63点(52.5%)である。ここでの焼成の不良は、浅黄橙色の生焼けの完形品かほぼ完形品のものが多く、そのほとんどが焼成室から見つかっている。

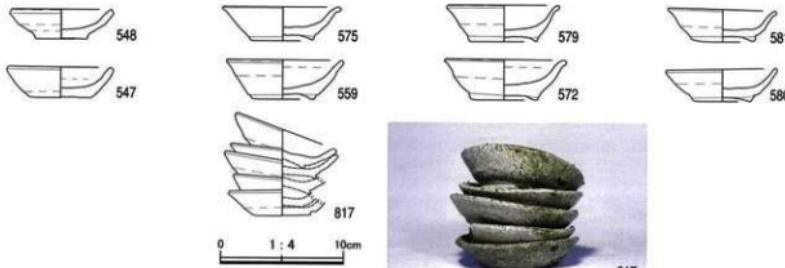
器形分類については、下記の表で記すことにした。

体部	高台 口縁端部									
	I系			II系			III系			総計
	1類	2類	3類	1類	2類	3類	1類	2類	3類	
B類	3(2.5%)	0	1(0.8%)	4(3.3%)	4(3.3%)	0	1(0.8%)	5(4.1%)	9(7.5%)	
C類	0	0	0	22(18.3%)	3(2.5%)	9(7.5%)	34(28.3%)	34(28.3%)		
D類	0	1(0.8%)	1(0.8%)	2(1.6%)	47(38.1%)	5(4.1%)	21(17.5%)	73(60.8%)	75(62.5%)	
E類	0	1(0.8%)	0	1(0.8%)	1(0.8%)	0	0	1(0.8%)	2(1.6%)	
総計	3(2.5%)	2(1.6%)	2(1.6%)	7(5.8%)	74(61.6%)	8(6.6%)	31(25.8%)	13(94.1%)	120(100%)	

第21表 3号窯出土皿類器形分類別組合せ表



第35図 3号窯皿類器形分類別組成図



第36図 3号窯皿類遺物実測図

写真36 3号窯皿類（その1）



写真36 3号窯皿類（その2）

遺物番号	出土位置	法器 (cm) 口径 高さ 極厚	高台底面 付着痕	底面外面	見込み	焼成	胎土	器形分類			参考	
								高台部	口縁部			
547	3号窯 焼成室	8.3 5.1 2.5	-	ナデ後板目	横ナデ	良	良	I	B	3		
548	3号窯 焼成室	(8.2) 4.3 (2.4)	-	糸切り	横ナデ	良	良	I	E	2		
549	3号窯 焼成室	8.7 4.4 2.9	もみ	ナデ	不明	良	良	II	C	1	砂粒付着	
550	3号窯 焼成室	9.1 5.1 3.0	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	II	D	1	ほぼ完形品	
551	3号窯 焼成室	9.5 5.3 2.7	もみ	ナデ	回転ナデ	不良	良	II	D	3	完形品	
552	3号窯 焼成室	8.9 5.4 2.7	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	II	C	1	ほぼ完形品	
553	3号窯 焼成室	9.4 5.1 2.9	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	II	D	1	砂粒付着	
554	3号窯 焼成室	10.0 6.3 2.7	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	II	C	1	砂粒付着	
555	3号窯 焼成室	8.9 4.8 2.6	もみ	ナデ	不明	良	良	II	C	3	ほぼ完形品、内面器面荒れる	
556	3号窯 焼成室	8.9 5.5 2.9	もみ	糸切り後ナデ	不明	良	良	II	C	1	完形品、砂粒付着	
557	3号窯 焼成室	9.6 5.8 2.9	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	II	C	1	生焼け	
558	3号窯 焼成室	9.5 5.4 3.1	もみ	ナデ	回転ナデ	不良	良	II	C	3	生焼け、ほぼ完形品	
559	3号窯 焼成室	9.3 5.2 3.2	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	II	D	2	生焼けっぽい、完形品	
560	3号窯 焼成室	9.6 5.4 3.1	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	II	C	3	生焼け	
561	3号窯 焼成室	9.7 5.8 3.1	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	II	D	1	生焼け	
562	3号窯 焼成室	9.1 5.3 2.8	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	II	D	3	生焼け	
563	3号窯 焼成室	10.1 5.5 2.9	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	II	D	1	生焼け、ひび割れ	
564	3号窯 焼成室	9.5 5.4 3.1	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	II	D	3	生焼け、完形品	
565	3号窯 焼成室	9.7 5.8 3.2	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	II	D	3	生焼け、完形品、ひび割れ	
566	3号窯 焼成室	9.5 5.2 3.0	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	II	D	1	生焼け、完形品、ひび割れ	
567	3号窯 焼成室	9.8 5.4 3.1	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	II	C	1	生焼け、ほぼ完形品、ひび割れ	
568	3号窯 焼成室	9.4 5.5 3.2	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	II	C	1	生焼け、ほぼ完形品	
569	3号窯 焼成室	10.0 5.4 3.0	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	II	D	1	生焼け、ほぼ完形品	
570	3号窯 焼成室	9.7 6.1 3.2	もみ	ナデ	回転ナデ	不良	良	II	C	1	生焼け、完形品	
571	3号窯 焼成室	9.7 5.4 3.0	もみ	ナデ	回転ナデ	不良	良	II	C	3	生焼け、完形品	
572	3号窯 焼成室	9.8 5.5 3.3	もみ	ナデ	回転ナデ	不良	良	II	D	1	生焼け、完形品	
573	3号窯 焼成室	9.0 5.7 2.8	もみ	ナデ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	II	C	1	生焼け、完形品
574	3号窯 焼成室	9.6 5.7 3.0	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	II	D	1	生焼け、完形品	
575	3号窯 焼成室	9.4 5.2 2.8	もみ	ナデ	不明	良	良	II	C	1	天場もの、完形品、砂粒付着	
576	3号窯 焼成室	9.9 5.4 3.2	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	II	D	1	生焼け、ほぼ完形品	
577	3号窯 焼成室	9.5 5.4 3.0	もみ	ナデ	回転ナデ	不良	良	II	D	3	生焼けっぽい、砂粒付着	
578	3号窯 焼成室	8.7 4.9 2.9	もみ	ナデ	横ナデ	良	良	II	D	1	内面器面に遺物片付着	
579	3号窯 焼成室	9.1 5.6 3.0	もみ	ナデ	不明	良	良	II	C	3	天場もの、完形品、砂粒・釉付着	
580	3号窯 焼成室	9.0 4.8 2.6	もみ	ナデ	不明	良	良	II	B	1	天場もの、完形品、砂粒・釉付着	
581	3号窯 焼成室	8.8 5.3 2.6	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	II	D	3		
663	3号窯 焼成室	8.8 4.9 2.7	もみ	ナデ	横ナデ	良	良	II	B	1	重ね碗片付着	
664	3号窯 焼成室	(8.6) 4.5 (2.4)	もみ	ナデ	不明	良	良	II	C	1	天場もの、砂粒付着	
665	3号窯 焼成室	9.2 5.0 3.0	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	II	D	1	重ね碗片・砂粒付着	
666	3号窯 焼成室	9.0 4.2 3.1	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	II	D	1	砂粒付着	
667	3号窯 焼成室	(9.6) (5.4) (3.0)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	II	D	1	生焼け	

第22表 3号窯皿類観察表（その1）

遺物番号	出土位置	法量(cm)		高台底面 付着痕	底面外面	見込み	焼成	胎土	器形分類		備考	
		口径	高台径						高台	部		
668	3号窯 焼成室	8.9	4.1	29	もみ	赤切り後ナデ	不明	良 良	B	D 3	砂粒付着	
669	3号窯 焼成室	8.8	5.2	30	もみ	赤切り後ナデ	不明	良 良	B	D 1	ゆがむ、砂粒付着	
670	3号窯 焼成室	9.8	5.2	30	もみ	赤切り後ナデ	回転ナデ	不良 良	B	C 3	生焼けっぽい	
671	3号窯 焼成室	9.3	5.1	30	もみ	赤切り後ナデ	回転ナデ	不良 良	B	D 1	生焼けっぽい	
672	3号窯 焼成室	9.8	5.3	31	もみ	赤切り後ナデ	回転ナデ	不良 良	B	D 2	生焼け	
673	3号窯 焼成室	10.2	(4.9)	33	もみ	ナデ	回転ナデ	不良 良	B	C 1	生焼け	
674	3号窯 焼成室	9.7	5.2	30	もみ	ナデ	回転ナデ	不良 良	B	D 3	生焼け	
675	3号窯 焼成室	10.0	5.3	28	もみ	赤切り後ナデ	回転ナデ	良 良	B	C 2	ひび割れ	
676	3号窯 焼成室	9.3	4.3	28	もみ	ナデ	回転ナデ	良 良	B	E 1	完形品、ゆがむ、砂粒付着	
677	3号窯 焼成室	9.4	5.1	29	もみ	赤切り後ナデ	回転ナデ	良 良	B	D 2	砂粒付着	
678	3号窯 焼成室	9.4	5.0	28	もみ・砂	赤切り後ナデ	不明	良 良	B	D 3	天場もの、砂粒付着、ほか完形品	
679	3号窯 焼成室	8.7	4.4	30	もみ	赤切り後ナデ	回転ナデ	良 良	B	C 1	砂粒付着	
680	3号窯 焼成室	9.2	4.3	29	もみ	ナデ	不明	良 良	B	C 1	天場ものの、砂粒・カマクサ付着	
681	3号窯 焼成室	9.4	4.8	30	もみ	赤切り後ナデ	回転ナデ	良 良	B	C 1	砂粒付着、ひび割れ、ゆがむ	
682	3号窯 焼成室	(9.6)	(5.1)	(30)	もみ	赤切り後ナデ	回転ナデ	不良 良	B	D 1	生焼け	
683	3号窯 焼成室	9.2	4.5	27	もみ	ナデ	不明	良 良	B	C 1	天場もの、砂粒付着、ほか完形品	
684	3号窯 焼成室	(8.8)	(5.3)	(25)	-	ナデ	横ナデ	良 良	B	B 1	天場ものの、砂粒付着	
685	3号窯 焼成室	(9.5)	5.4	(27)	もみ	赤切り後ナデ	回転ナデ	不良 良	B	D 3	生焼け、ゆがむ	
686	3号窯 焼成室	8.7	4.5	30	もみ	ナデ	回転ナデ	良 良	B	D 1	砂粒付着	
687	3号窯 焼成室	9.4	底径5.5	(26)	-	赤切り後ナデ	不明	良 良	B	D 1	高台全てハカリ、ゆがむ、砂粒・カマクサ付着	
688	3号窯 焼成室	9.5	5.0	30	もみ	ナデ	回転ナデ	良 良	B	D 1	ひび割れ	
689	3号窯 焼成室	9.1	5.2	31	もみ	ナデ	回転ナデ	良 良	B	B 1	ゆがむ、ひび割れ	
690	3号窯 焼成室	9.1	5.2	30	もみ	赤切り後ナデ	不明	良 良	B	D 1	天場もの、砂粒・カマクサ付着、ゆがむ	
691	3号窯 焼成室	9.1	4.8	29	もみ・砂	ナデ	不明	良 良	B	D 1	天場ものの、砂粒・カマクサ付着	
692	3号窯 焼成室	9.7	(5.3)	(28)	もみ	赤切り後ナデ	回転ナデ	不良 良	B	D 1	生焼け	
693	3号窯 焼成室	10.2	底径5.5	(29)	-	赤切り後ナデ	回転ナデ	不良 良	B	C 1	生焼け	
694	3号窯 焼成室	9.8	(5.3)	(33)	もみ	赤切り後ナデ	回転ナデ	不良 良	B	D 1	生焼け	
695	3号窯 焼成室	9.1	5.6	28	もみ	赤切り後ナデ	回転ナデ	不良 良	B	D 1	生焼け	
696	3号窯 焼成室	10.0	5.5	32	もみ	赤切り後ナデ	回転ナデ	不良 良	B	D 3	生焼け	
697	3号窯 焼成室	9.7	6.0	29	もみ	赤切り後ナデ	回転ナデ	不良 良	B	C 1	生焼け、ゆがむ	
698	3号窯 焼成室	10.0	(6.0)	(30)	もみ	赤切り後ナデ	回転ナデ	不良 良	B	D 1	生焼け	
699	3号窯 焼成室	9.7	5.4	32	もみ	赤切り後ナデ	回転ナデ	不良 良	B	B 3	生焼け	
700	3号窯 焼成室	9.8	5.5	31	もみ	赤切り後ナデ	回転ナデ	不良 良	B	D 1	生焼け	
702	3号窯 焼成室	9.9	5.2	32	もみ	ナデ	横ナデ	不良 良	B	D 1	生焼け	
703	3号窯 焼成室	9.8	5.5	31	もみ	赤切り後ナデ	回転ナデ	不良 良	B	C 1	生焼け	
704	3号窯 焼成室	10.2	5.6	31	もみ	赤切り後ナデ	回転ナデ	不良 良	B	D 1	生焼け	
705	3号窯 焼成室	10.2	5.7	30	-	ナデ	赤切り後ナデ	回転ナデ	不良 良	B	D 3	生焼け
706	3号窯 焼成室	9.6	5.4	34	もみ	ナデ	横ナデ	不良 良	B	D 3	生焼け	
707	3号窯 焼成室	(9.2)	(5.3)	(29)	もみ	赤切り後ナデ	回転ナデ	不良 良	B	D 1	生焼け	
708	3号窯 焼成室	9.7	5.7	31	もみ	赤切り後ナデ	回転ナデ	不良 良	B	C 1	生焼け、ゆがむ	
709	3号窯 焼成室	10.0	(5.9)	(31)	もみ	赤切り後ナデ	回転ナデ	不良 良	B	D 3	生焼け、高台ほとんどハクリ	
710	3号窯 焼成室	9.9	底径5.2	(31)	-	ナデ	回転ナデ	不良 良	B	D 1	生焼け、高台全てハクリ	
711	3号窯 焼成室	9.7	(5.2)	31	もみ	ナデ	回転ナデ	不良 良	B	D 1	生焼け	
712	3号窯 焼成室	9.9	5.3	33	もみ	赤切り後ナデ	横ナデ	不良 良	B	C 3	生焼け	
713	3号窯 焼成室	9.9	5.5	32	もみ	ナデ	回転ナデ	不良 良	B	D 1	生焼け	
714	3号窯 焼成室	9.9	5.3	34	もみ	ナデ	赤切り後ナデ	回転ナデ	不良 良	D 1	生焼け	
715	3号窯 焼成室	(9.4)	5.4	(33)	もみ	赤切り後ナデ	回転ナデ	不良 良	B	D 1	生焼け	
716	3号窯 焼成室	9.5	(5.1)	(31)	もみ	赤切り後ナデ	横ナデ	不良 良	B	D 2	生焼け、高台ほとんどハクリ	
717	3号窯 焼成室	9.5	4.9	32	もみ	不明	不良 良	良	B	D 3	生焼け、底座中心部分欠損	
718	3号窯 焼成室	9.9	5.0	32	もみ	赤切り後ナデ	回転ナデ	不良 良	B	D 1	生焼け	
719	3号窯 焼成室	(9.6)	(6.0)	(31)	もみ	赤切り後ナデ	回転ナデ	不良 良	B	D 3	生焼けっぽい	
720	3号窯 焼成室	8.5	4.8	32	もみ・砂	ナデ	赤切り後ナデ	回転ナデ	不良 良	B	D 1	砂粒付着、ゆがむ、ひび割れ
721	3号窯 焼成室	9.1	4.6	28	もみ	ナデ	不明	良 良	B	D 2	天場もの、カマクサ・横・重ね焼片付着	
722	3号窯 焼成室	10.0	5.6	32	もみ	赤切り後ナデ	回転ナデ	不良 良	B	D 1	生焼け	
723	3号窯 焼成室	10.0	底径5.7	(31)	不明	赤切り後ナデ	回転ナデ	不良 良	B	D 1	生焼け、高台ほとんどハクリ	
724	3号窯 焼成室	8.9	4.9	28	もみ	ナデ	不明	良 良	B	C 3	天場もの、砂粒・カマクサ付着、ゆがむ	
725	3号窯 焼成室	8.6	4.3	29	もみ	赤切り後ナデ	回転ナデ	不良 良	B	D 3	ゆがむ、砂粒付着	
726	3号窯 焼成室	(8.8)	(5.0)	(29)	もみ	ナデ	回転ナデ	良 良	B	D 1	天場もの、重ね焼片付着	
727	3号窯 焼成室	9.6	5.4	28	もみ	ナデ	回転ナデ	良 良	B	C 1	砂粒付着	
728	3号窯 灰口	9.7	(5.1)	27	もみ	系切り後ナデ	回転ナデ	良 良	B	C 2	天場もの、カマクサ・袖付着	
729	3号窯 灰口	9.7	5.3	29	もみ	系切り	不明	良 良	B	D 3	天場もの、カマクサ・袖付着	
730	3号窯 焼成室	(8.8)	5.0	(25)	-	ナデ	回転ナデ	良 良	B	B 1	ゆがむ	
731	3号窯 焼成室	9.2	5.5	29	-	系切り後ナデ	横ナデ	良 良	B	B 1	ゆがむ	
732	3号窯 焼成室	9.2	4.7	28	もみ	ナデ	不明	良 良	B	D 3	天場もの、重ね焼片付着、完形品	
733	3号窯 焼成室	(8.8)	5.0	(28)	-	系切り	回転ナデ	良 良	B	D 2	重ね焼片付着	
734	3号窯 焼成室	(8.4)	4.5	(30)	もみ	ナデ	横ナデ	良 良	B	D 1	天場もの、重ね焼片付着	
735	3号窯 焼成室	8.9	5.6	28	もみ	ナデ	不明	良 良	B	B 1	天場もの、重ね焼片付着、完形品	
736	3号窯 焼成室	(5.0)	5.3	(25)	もみ	ナデ	回転ナデ	不良 良	B	D 1	天場もの、重ね焼片付着	
737	3号窯 焼成室	(9.0)	4.6	(29)	もみ	ナデ	不明	良 良	B	C 1	天場もの、砂粒・カマクサ・重ね焼片付着	
738	3号窯 焼成室	9.5	(5.1)	32	もみ	系切り後ナデ	不明	良 良	B	D 1	天場もの、砂粒付着	
739	3号窯 焼成室	9.2	5.2	30	もみ	系切り	不明	良 良	B	D 3	天場もの、砂粒付着	
740	3号窯 焼成室	(9.6)	(5.0)	(32)	もみ	系切り後ナデ	回転ナデ	不良 良	B	D 1	生焼け	

第22表 3号窯皿類観察表（その2）

遺物番号	出土位置	法量(cm)			高台底面付着痕	底面外観	見込み	焼成	胎土	器形分類	備考
		口径	高台径	器高							
741 3号窯 燃焼室		8.7	4.9	2.9	もみ・砂	糸切り後ナデ	不明	良 良	D 3	天場もの、ゆがむ、ひび割れ	
742 3号窯 燃焼室		9.8	5.2	2.9	もみ	糸切り後ナデ	不明	良 良	D 1	天場もの、遺物片付着、ゆがむ	
743 3号窯 燃成室		9.2	5.1	2.9	もみ	ナデ	不明	良 良	C 3	天場もの、砂粒付着	
744 3号窯 燃成室		9.2	5.3	2.8	もみ	ナデ	不明	良 良	D 1	天場もの、カマクゾ・輪付着、ほぼ完形品	
745 3号窯 燃成室		9.2	4.3	3.0	もみ	糸切り後ナデ	不明	良 良	D 3	天場もの、砂粒付着	
746 3号窯 燃成室灰刷	(9.2) (6.0) (3.4)	もみ	ナデ	回転ナデ	不良	良	B C 2	生焼けっぽい			
747 3号窯 焼口		8.7	4.5	2.8	もみ	糸切り後ナデ	不明	良 良	D 1	天場もの、砂粒・輪付着、ほぼ完形品	
790 3号窯 燃成室		9.4	4.8	2.7	もみ	糸切り後ナデ	良 良	B C 1	重ね焼片付着、外画底部中心部分に穴あり		

第22表 3号窯皿類観察表（その3）

遺物番号	出土位置	法量(cm)			高台底面付着痕	底面外観	見込み	焼成	胎土	備考	
		口径	高台径	器高							
817 3号窯 燃焼室(8.6) 4.5 (2.1) -	-	-	-	-	糸切り後ナデ	不明	良 良	重ね枚数:3枚 最下層の遺物は高台なし、重ね焼片付着、最上段は天場もの、カマクゾ・輪付着			

第23表 3号窯重ね皿類観察表

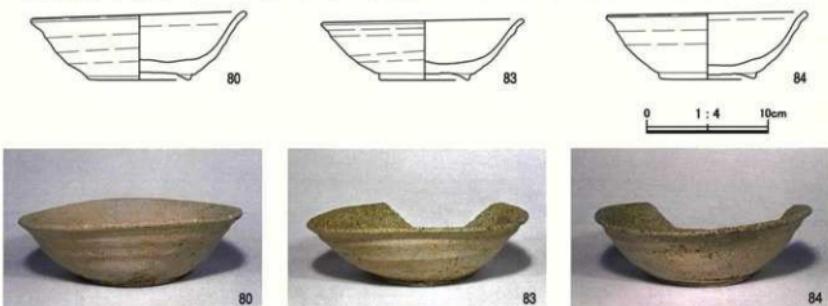
燃焼室焚口最終床面の上層赤茶色土層（のちに流入した土か？）含有遺物

最終床面に含まれていたものも含まれるが、ほとんどが上に乗っていた土から出土した遺物で床面下として遺物は取上げられている。また、燃焼室の床面から出土した遺物が少なかったためここに加えた。

碗

分類可能な遺物は27点出土している。各部の法量は、口径が17.7～15.7cm、高台径が8.5～7.0cm、器高が5.5～5.2cmを測定した。その平均は、口径16.8cm、高台径7.8cm、器高5.2cmである。高台底面付着痕は糊痕24点、糊・砂痕3点である。底面外観は糸切り後ナデ26点、ナデ1点である。内面底部の見込みは回転ナデ26点、不明1点である。焼成は良26点、不良1点、胎土はすべて良である。

器形分類は、体部がすべてD類である。口縁端部は、1類17点、2類1点、3類9点である。



第37図 3号窯床面上碗類遺物実測図 写真37 3号窯床面上碗類

遺物番号	出土位置	法量(cm)			高台底面付着痕	底面外観	見込み	焼成	胎土	器形分類	備考
		口径	高台径	器高							
80 3号窯 焚口 床面下		17.4	8.5	5.3	もみ・砂	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	D 2	完形品、底部にひび割れ	
81 3号窯 焚口 床面下		16.2	8.2	5.1	もみ・砂	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	D 1	ほぼ完形品、底部にひび割れ	
82 3号窯 焚口 床面下		16.4	7.5	5.4	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	D 3	ほぼ完形品	
83 3号窯 焚口 床面下		16.3	7.4	4.8	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	D 3	ほぼ完形品、砂粒付着	
84 3号窯 焚口 床面下		16.1	7.9	5.4	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	D 1	ほぼ完形品、砂粒付着	
85 3号窯 焚口 床面下		16.2	8.0	5.3	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	D 3	ほぼ完形品、砂粒付着	
86 3号窯 焚口 床面下		15.7	7.5	5.4	もみ・砂	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	D 1	ほぼ完形品、砂粒付着	

第24表 3号窯床面上碗類観察表（その1）

遺物番号	出土位置	法量(cm)			高台底面付着痕	底面外面	見込み	焼成	胎土	器形分類	備考
		口径	高台径	器高							
501	3号窯 截成窓 床面下	(15.8)	(8.0)	(6.1)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1
502	3号窯 焼口 床面下	(17.6)	7.0	(5.6)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	3
503	3号窯 焼口 床面下	(16.6)	8.2	(5.5)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	D	3
504	3号窯 焼口 床面下	17.0	7.8	5.3	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	3
505	3号窯 焼口 床面下	17.3	7.7	5.5	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1
506	3号窯 焼口 床面下	(15.8)	7.5	(5.3)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	3
507	3号窯 焼口 床面下	17.0	7.9	5.1	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1
508	3号窯 焼口 床面下	(17.6)	(8.2)	(5.3)	もみ	糸切り後ナデ	不明	良	良	D	1
509	3号窯 焼口 床面下	16.6	7.9	5.4	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1
510	3号窯 焼口 床面下	(16.8)	(8.1)	(4.5)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1
511	3号窯 焼口 床面下	(16.8)	8.0	(5.0)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1
512	3号窯 焼口 床面下	(16.6)	7.6	(5.3)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	3
513	3号窯 焼口 床面下	16.5	6.5	(2.4)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1
514	3号窯 焼口 床面下	(16.8)	8.0	(5.1)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	3
515	3号窯 焼口 床面下	17.3	7.9	4.7	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1
516	3号窯 焼口 床面下	16.6	7.5	5.3	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	D	1
517	3号窯 焼口 床面下	17.2	7.4	5.3	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1
518	3号窯 焼口 床面下	17.7	8.0	5.1	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1
519	3号窯 焼口 床面下	16.6	8.1	5.2	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1
520	3号窯 焼口 床面下	17.5	7.4	4.8	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1

第24表 3号窯床面上碗類觀察表(その2)

III

分類可能な遺物が19点出土している。各部の法量は、口径が9.9~8.9cm、高台径が5.6~4.2cm、器高が3.1~2.6cmを測定した。その平均は、口径9.3cm、高台径5.1cm、器高2.8cmである。高台底面付着痕はすべて糊痕で、底面外面は糸切り後ナデ9点、ナデ10点である。内面底部の見込みは回転ナデ13点、不明6点である。焼成は良15点、不良4点で、胎土はすべて良である。

器形分類は、体部がC類3点、D類16点、口縁端部が1類18点、2類1点、3類1点で、高台はすべてII系である。



第38図 3号窯面上皿類遺物実測図 写真38 3号窯面上皿類

遺物番号	出土位置	法量(cm)			高台底面付着痕	底面外面	見込み	焼成	胎土	器形分類	備考
		口径	高台径	器高							
599	3号窯 焼口 床面下	8.9	5.0	2.9	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	II	D 1
600	3号窯 截成窓 床面下	9.1	4.9	2.6	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	II	C 1
601	3号窯 焼口 床面下	9.1	5.6	2.8	もみ	ナデ	回転ナデ	不良	良	II	生焼けっぽい
602	3号窯 焼口 床面下	9.4	5.1	2.6	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	II	砂粒付着
791	3号窯 焼口 床面下	9.8	5.6	2.7	もみ	糸切り後ナデ	不明	良	良	II	D 1 天場もの、砂粒・カマクソ付着、ゆがむ
792	3号窯 截成窓 床面下	9.4	5.1	3.1	もみ	糸切り後ナデ	不明	良	良	II	D 1 天場もの、砂粒・カマクソ・輪付着、ゆがむ
793	3号窯 焼口 床面下	(9.8)	5.2	(2.6)	もみ	ナデ	回転ナデ	不良	良	II	D 1 生焼けっぽい
794	3号窯 焼口 床面下	9.2	4.6	2.9	もみ	糸切り後ナデ	不明	良	良	II	D 3 砂粒・重ね焼片付着、ゆがむ
795	3号窯 焼口 床面下	(9.4)	5.1	(3.0)	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	II	C 1
796	3号窯 焼口 床面下	(10.0)	5.1	(3.0)	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	II	D 1
797	3号窯 焼口 床面下	9.9	5.5	2.8	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	II	D 1 砂粒付着
798	3号窯 焼口 床面下	9.3	5.0	3.1	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	II	D 1 口縁端部、ゆがむ
799	3号窯 焼口 床面下	9.5	5.1	3.0	もみ	ナデ	回転ナデ	不良	良	II	D 1 生焼け
800	3号窯 焼口 床面下	9.2	5.0	3.1	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	II	D 1 カマクソ付着、完形品
801	3号窯 焼口 床面下	9.0	4.8	2.8	もみ	ナデ	不明	良	良	II	D 1 砂粒付着、完形品
802	3号窯 焼口 床面下	8.9	4.2	2.8	もみ	ナデ	不明	良	良	II	D 1 天場もの、砂粒・カマクソ・輪付着
803	3号窯 焼口 床面下	9.3	5.3	2.6	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	II	D 1 砂粒・小石付着、完形品
804	3号窯 焼口 床面下	9.7	5.4	2.6	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	II	D 2 生焼けっぽい
805	3号窯 焼口 床面下	9.5	5.2	2.7	もみ	糸切り後ナデ	不明	良	良	II	D 1 天場もの、重ね焼片付着、ゆがむ、完形品

第25表 3号窯床面上皿類觀察表

鉢

出土したもののうち、分類可能な遺物は4点出土している。各部の法量は、口径が19.8~19.6cm、高台径が9.6~8.5cm、器高が7.2~6.9cmを測定した。その平均は、口径19.7cm、高台径9.0cm、器高7.1cmである。高台底面の付着痕はすべて糊痕である。外面底面の調整痕は糸切り後ナデ2点、ナデ1点、不明1点である。内面底部の見込みは回転ナデ3点、不明1点である。胎土は最良3点、不良1点である。焼成は良2点、不良2点である。

器形分類は、体部がすべてB類である。口縁端部はすべて1類である。4点すべてが片口鉢である。遺物番号808はほぼ完形品で、遺物番号809は完形品ではあるが両方とも焼成が不良で生焼けである。



写真39 3号窯鉢類

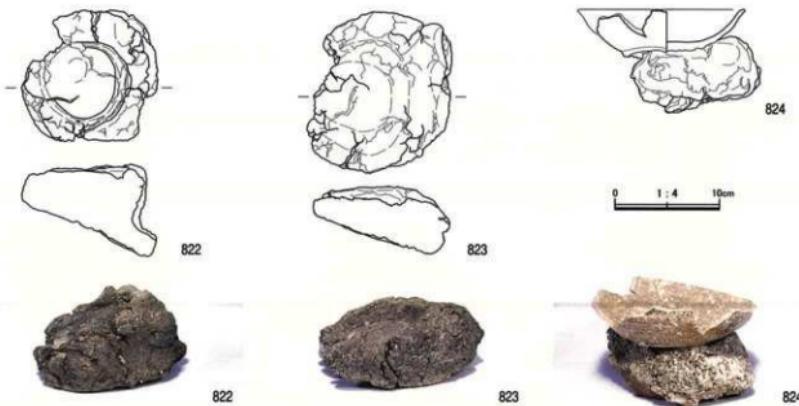
第39図 3号窯鉢類遺物実測図と写真

遺物番号	出土位置	法量(cm)		高台底面 付着痕	底面外面	見込み	焼成	胎土	器形分類	備考
		口径	高台径	器高						
807	3号窯 焼成室	(17.6)	(9.0)	(6.3)	6み	不明	不明	良	最良	B 1 片口鉢、カマクン付着、底部4/5欠損
808	3号窯 焼成室	19.6	9.6	6.9	6み	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	最良	B 1 片口鉢、ほぼ完形品、生焼け
809	3号窯 焼成室	19.8	8.9	7.2	6み	ナデ	回転ナデ	不良	最良	B 1 片口鉢、完形品、生焼け
810	3号窯 燃焼室	(18.9)	8.5	(6.5)	6み	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	B 1 片口鉢

第26表 3号窯鉢類観察表

焼台

窯道具として焼成室と燃焼室に残されていた。その中から状態の良いものを焼成室2点、燃焼室から1点を紹介する。最大長は12.4~13.9cm、最大幅は12.5~15.4cm、最大幅は5.5~7.4cmである。遺物番号822は上面平坦部に凹みのある馬蹄形をしている。遺物番号823は上面担部に凹みがあり、傾斜角度は緩やかである。色調は両方とも黒色である。遺物番号824は焼台に碗が1枚付着し、色調は黒色だが自然釉が付着している。



第40図 3号窯焼台遺物実測図 写真40 3号窯焼台

遺物番号	出土位置	法量(cm)			焼成	備考
		最大長	最大幅	最大高		
822 3号窯 焼成窯		139	125	7.4	良	一部欠損、遺物との接觸面にセンイ痕付着
823 3号窯 焼成窯		(129)	154	5.5	良	一部欠損、平たい
824 3号窯 燃成窯		124	134	—	判定不能	齒の遺物上1つ貼り付く

第27表 3号窯焼台観察表

灰原

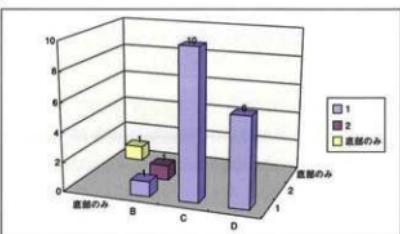
碗

出土したもののうち、分類可能なものは19点である。各部の法量は、口径が17.0～15.7cm、高台径が8.7～6.9cm、器高が5.4～5.3cmを測定した。その平均は、口径16.2cm、高台径8.1cm、器高5.4cmである。高台底面の付着痕はすべて紺痕である。底面外面の調整痕は糸切り1点(5.3%)、糸切り後ナデ14点(73.7%)、ナデ3点(15.7%)、ナデ後センイ痕1点(5.3%)である。内面底面の見込みは回転ナデ10点(52.6%)、横ナデ9点(47.4%)である。胎土は最良4点(21%)、良14点(73.7%)、不良1点(5.3%)である。焼成は最良3点(15.8%)、良14点(73.7%)、不良2点(10.5%)である。

器形分類については、下記の表で記すことにした。

体部	口縁端部			
	1類	2類	底部のみ	統計
B類	1(5.3%)	1(5.3%)	0	2(10.5%)
C類	10(52.6%)	0	0	10(52.6%)
D類	6(31.5%)	0	0	6(31.5%)
底部のみ	0	0	1(5.3%)	1(5.3%)
統計	17(89.4%)	1(5.3%)	1(5.3%)	19(100%)

第28表 3号窯灰原出土碗類器形分類別組合せ表



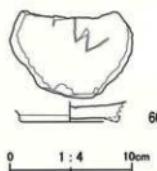
第41図 3号窯灰原出土碗類器形分類別組成図

遺物番号66は底部のみの遺物であるが、内面底部に「W」に類似した模様のある遺物である。



第42図 3号窑灰原碗類遺物実測図

写真41 3号窑灰原碗類



66

第42図 3号窑灰原碗類遺物実測図

写真41 3号窑灰原碗類

遺物番号	出土位置	法量(cm)			底面外面	見込み	焼成	胎土	器形分類		備考
		口径	高台径	器高					部体	口縁端部	
65	3号窑灰原	16.0	8.1	5.4	好み	糸切り後ナデ	横ナデ	不良	良	C	1
66	3号窑灰原	-	(8.2)	-	好み	ナデ	横ナデ	良	良	-	-
407	3号窑灰原	(16.0)	8.3	(5.3)	好み	糸切り	回転ナデ	最良	最良	D	1
408	3号窑灰原	(15.6)	6.9	(5.0)	好み	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	不良	D	1
409	3号窑灰原	(16.4)	8.4	(5.4)	好み	ナデ	回転ナデ	最良	最良	C	1
410	3号窑灰原	(17.0)	8.0	(5.0)	好み	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	C	1
411	3号窑灰原	(16.6)	7.9	(5.1)	好み	ナデ後センブ	横ナデ	良	良	D	1
412	3号窑灰原	(17.0)	(9.4)	(5.3)	好み	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	最良	B	2
413	3号窑灰原	(16.6)	8.6	(4.7)	好み	ナデ	横ナデ	良	良	D	1
414	3号窑灰原	(16.6)	(8.3)	(4.8)	好み	糸切り後ナデ	横ナデ	不良	良	C	1
415	3号窑灰原	15.7	8.6	5.4	好み	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	C	1
416	3号窑灰原	(16.8)	8.0	(5.4)	好み	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	C	1
417	3号窑灰原	(16.6)	7.9	(5.0)	好み	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	D	1
418	3号窑灰原	(17.0)	8.7	5.3	好み	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	B	1
419	3号窑灰原	(17.2)	(9.0)	(5.0)	好み	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	C	1
420	3号窑灰原	(16.0)	(8.8)	(5.5)	好み	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	C	1
421	3号窑灰原	(16.0)	8.2	(4.3)	好み	糸切り後ナデ	回転ナデ	最良	最良	C	1
422	3号窑灰原	(17.0)	7.8	(4.4)	好み	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1
423	3号窑灰原	(16.6)	8.0	(4.5)	好み	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	C	1

第29表 3号窑灰原碗類観察表

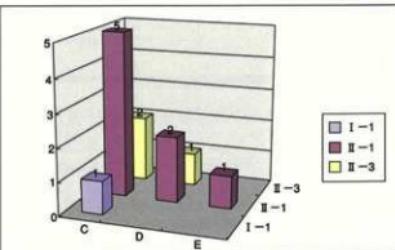
III

出土したもののうち、分類可能なものは12点である。各部の法量は、口径が9.1~8.5cm、高台径が5.2~4.2cm、器高が3.0~2.7cmを測定した。その平均は、口径8.8cm、高台径4.8cm、器高2.9cmである。高台底面の付着痕は糊痕11点、高台なし1点である。底面外面の調整痕は糸切り1点、糸切り後ナデ4点、ナデ7点である。内面底部の見込みは回転ナデ2点、横ナデ5点、不明5点である。胎土は良11点、不良1点である。焼成は全て良である。

器形分類については、下記の表で記すことにした。

高台	口縁端部					総計	
	I系	I系計	II系		II系計		
			1類	3類			
C類	1(8.3%)	1(8.3%)	5(41.6%)	2(16.6%)	7(58.6%)	8(66.6%)	
D類	0	0	2(16.6%)	1(8.3%)	3(25%)	3(25%)	
E類	0	0	1(8.3%)	0	1(8.3%)	1(8.3%)	
総計	1(8.3%)	1(8.3%)	8(66.6%)	3(25%)	11(91.6%)	12(100%)	

第30表 3号窑灰原出土皿類器形分類別組合せ表



第43図 3号窑灰原皿類器形分類別組合せ表



583



1 : 4 10cm



584



583



584



818



818

第44図 3号窯灰原皿類遺物実測図と写真

写真42 3号窯灰原皿類

遺物番号	出土位置	法量(cm)			高台底面 付着痕	底面外面	見込み	焼成	胎土	器形分類	備考
		口径	高台径	器高							
583	3号窯 灰原	9.1	5.1	3.0	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	II C	3
584	3号窯 灰原	8.6	4.7	2.7	もみ	ナデ	横ナデ	良	良	II C	重ね焼片付着
751	3号窯 灰原	(8.8)	(5.4)	(2.8)	もみ	ナデ	不明	良	良	II C	天場もの、砂粒付着
753	3号窯 灰原	(9.0)	(5.1)	(2.8)	もみ	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	II C	重ね焼片付着
754	3号窯 灰原	(8.8)	4.8	(2.4)	-	糸切り	横ナデ	良	良	I C	-
755	3号窯 灰原	(8.4)	5.0	(2.8)	もみ	ナデ	不明	良	良	II D	天場もの、輪付着、高台稍円
756	3号窯 灰原	(8.0)	5.2	(2.5)	もみ	糸切り後ナデ	不明	良	良	II D	天場もの、砂粒・重ね焼片付着
757	3号窯 灰原	(8.2)	4.2	(2.5)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	E	重ね焼片付着
758	3号窯 灰原	(9.0)	4.3	(2.2)	もみ	ナデ	不明	良	不良	II C	天場もの、砂粒・輪付着
759	3号窯 灰原	8.8	(5.2)	2.9	もみ	ナデ	不明	良	良	II C	重ね焼片付着、底部中心部分欠損
760	3号窯 灰原	(9.2)	4.6	(2.6)	もみ	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	II D	砂粒付着

第31表 3号窯灰原皿類観察表

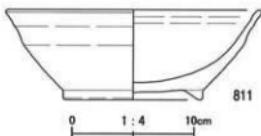
遺物番号	出土位置	法量(cm)			高台底面 付着痕	底面外面	見込み	焼成	胎土	器形分類	備考
		口径	高台径	器高							
818	3号窯 灰原	-	-	-	もみ	糸切り後ナデ	不明	良	最良	重ね枚数:5枚 最下層の遺物は高台あり、最上段は天場もの、カマツク・輪付着、ゆがむ	

第32表 3号窯灰原重ね皿類観察表

鉢

出土したもののうち、分類可能なものは1点である。各部の法量は、推定値を含む口径(20.7)cm、高台径11.4cm、器高(7.4)cmである。高台底面の付着痕は糊痕である。外面底面の調整痕は糸切り後ナデである。内面底部の見込みは回転ナデである。胎土は不良ながら、焼成は良である。

器形分類は、体部がA類、口縁端部が1類である。



811

第45図 3号窯灰原鉢類遺物実測図と写真

遺物番号	出土位置	法量(cm)			高台底面 付着痕	底面外面	見込み	焼成	胎土	器形分類	備考
		口径	高台径	器高							
811	3号窯 灰原	(20.9)	11.4	(7.4)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	不良	A	1

第33表 3号窯灰原鉢類観察表

壺

灰原から分類可能なものでは無いが、壺の体部の破片が1点出土している。色調は碗とよく似た灰白色で薄く自然釉がかかっている。胎土と焼成は最良である。



813

写真43 3号窯灰原壺類

S Kに関する遺物

S K 0 1

碗

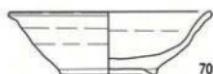
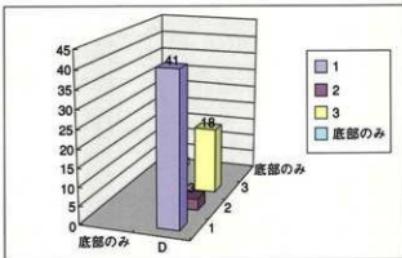
出土したもののうち、分類可能なものは64点である。2号窯内の遺物同様に碗全体の約12%を占めている。

各部の法量は、口径が17.9~15.6cm、高台径が9.2~7.2cm、器高が5.7~4.6cmを測定した。その平均は、口径16.9cm、高台径8.0cm、器高5.2cmである。高台底面の付着痕は、粉痕58点(90.6%)、粉・砂痕3点(4.7%)、高台剥離3点(4.7%)である。外面底面の調整痕は、糸切り後ナデ56点(87.5%)、ナデ8点(12.5%)である。内面底部の見込みは、回転ナデ56点(87.7%)、横ナデ2点(3.1%)、不明6点(9.3%)である。胎土は、最良1点、良63点である。焼成は良60点、不良4点である。

器形分類については、下記の表で記すことにした。

口縁端部					
体部	1類	2類	3類	底部のみ	総計
D類	41(64.0%)	3(4.7%)	18(28.1%)	0	62(96.9%)
底部のみ	0	0	0	2(3.1%)	2(3.1%)
総計	41(64.0%)	3(4.7%)	18(28.1%)	2(3.1%)	64(100%)

第34表 S K 01 出土碗類器形分類別組合せ表



第47図 S K 01 碗類遺物実測図

写真44 S K 01 碗類

遺物 番号	出土位置	法量(cm)			底面外観	見込み	焼成	胎土	器形分類		備考	
		口径	高台	器高					部体	口縁端部		
67 SK01		17.2	8.0	5.3	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D	1	内面体部に重ね焼片・砂粒付着	
68 SK01		16.2	7.5	5.3	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D	3		
69 SK01		17.6	8.9	5.7	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良	1		
70 SK01		16.4	7.9	5.1	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D	1	ほぼ完形品	
71 SK01		17.0	8.4	5.6	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D	1	砂粒付着	
72 SK01		16.1	7.8	5.0	もみ・鈴	糸切り後ナデ	不明	良 良	D	3	砂粒付着、ほぼ完形品、穴数点あり	
73 SK01		17.1	7.7	5.3	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D	1	砂粒付着、ほぼ完形品	
74 SK01		16.9	8.8	5.3	もみ	ナデ	回転ナデ	良 良	D	1		
426 SK01		(16.6)	8.0	(5.7)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D	1		
427 SK01		17.1	(7.5)	(5.1)	もみ	ナデ	回転ナデ	良 良	D	3	重ね焼片・砂粒付着	
428 SK01		16.7	7.9	5.3	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D	3	底部ひび割れ	
429 SK01		(16.4)	8.7	(5.4)	もみ・鈴	糸切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D	3	砂粒付着	
430 SK01			7.8	-	もみ	糸切り後ナデ	不明	良 良	-	-	底部のみ残存、砂粒付着・輸たれ	
431 SK01		(18.0)	8.2	(5.2)	もみ	ナデ	回転ナデ	良 良	D	1	ゆがむ	
432 SK01		(17.4)	(8.5)	(5.5)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良 良	D	3	高台稍円
433 SK01		16.8	7.8	5.1	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D	1		
434 SK01		16.6	9.0	5.0	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D	1	砂粒付着、口縁稍円	
435 SK01		16.4	8.4	5.3	もみ	ナデ	回転ナデ	良 良	D	1	重ね焼片・砂粒付着	
436 SK01			7.8	-	もみ	ナデ	回転ナデ	良 良	-	-	底部のみ残存	
437 SK01		17.1	8.1	5.2	もみ	ナデ	回転ナデ	良 良	D	1		
438 SK01		(17.0)	7.4	(5.5)	もみ	糸切り後ナデ	横ナデ	良 良	D	1	重ね焼片・砂粒付着・輸たれ	
440 SK01		17.7	7.9	4.7	もみ	糸切り後ナデ	不明	良 良	D	1	天場もの、砂粒付着、ゆがむ	
441 SK01		16.1	7.8	5.1	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	最良	D	3	砂粒付着	
442 SK01		(16.4)	7.5	(5.1)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D	3	重ね焼片・砂粒付着	
443 SK01		(15.6)	7.5	(5.2)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D	1	口縁に砂粒付着	
444 SK01		17.3	8.2	5.2	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D	3	砂粒付着	
445 SK01		16.4	8.3	5.0	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D	1	砂粒付着	
446 SK01		16.3	7.5	4.7	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D	3	重ね焼片・カマツク付着	
447 SK01		17.2	8.0	5.7	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	良 良	D	3	
448 SK01		17.0	7.8	4.6	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D	1	天場もの、砂粒・カマツク付着、口縁稍円	
449 SK01		(17.2)	7.7	(5.6)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D	1	口縁稍円	
450 SK01		17.2	7.8	4.3	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D	1	高台全てハクリ、砂粒付着	
451 SK01		17.4	7.9	5.1	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D	1	砂粒付着	
452 SK01		(17.4)	8.0	(5.0)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D	1	砂粒付着	
453 SK01		16.8	7.4	5.1	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D	1	重ね焼片・砂粒付着	
454 SK01		(17.3)	(8.2)	(4.7)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D	3	砂粒付着、ゆがむ	
455 SK01		17.2	底径8.6	4.7	-	糸切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D	1	高台全てハクリ	
456 SK01		16.9	7.7	5.2	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D	1	砂粒付着	
457 SK01			7.9	底径7.6	もみ	糸切り後ナデ	不明	良 良	D	3	重ね焼片・砂粒付着、ゆがむ	
458 SK01		(17.0)	8.0	(5.3)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D	1	重ね焼片付着	
459 SK01		(17.2)	(8.0)	(5.3)	もみ	ナデ	回転ナデ	良 良	D	3		
460 SK01		16.6	7.2	5.7	もみ	糸切り後ナデ	不明	良 良	D	1	天場もの、砂粒・カマツク付着、ゆがむ	
461 SK01		17.5	7.7	4.7	もみ・鈴	糸切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D	1	ほぼ完形品、口縁稍円、砂粒・カマツク・重ね焼片付着	
462 SK01		17.0	9.2	5.3	もみ	ナデ	回転ナデ	不良	良 良	D	2	
463 SK01		(17.2)	8.0	(4.8)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D	1	重ね焼片付着、底部にひび割れ	
464 SK01		16.6	7.8	4.9	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D	1		
465 SK01		17.3	(8.6)	(5.1)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D	1	高台ほとんどのハクリ	
466 SK01		16.8	(7.9)	(5.2)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D	2	砂粒付着	
467 SK01		(17.4)	(8.0)	(4.9)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D	3	ゆがむ	
468 SK01			(17.8)	底径8.7	(4.4)	-	糸切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D	1	高台全てハクリ
469 SK01		16.9	7.6	4.8	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D	3	底面にひび割れ、ゆがむ	
470 SK01		17.4	9.0	4.9	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D	1	高台稍円	
471 SK01		(17.2)	(7.4)	(5.1)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D	3	砂粒付着、ゆがむ、高台ほとんどのハクリ	
472 SK01		(16.4)	7.5	(5.3)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D	1	重ね焼片・砂粒付着	
473 SK01		(17.2)	7.5	(5.2)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D	1	砂粒付着、高台稍円	
474 SK01		17.1	8.5	5.7	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D	1		
475 SK01		17.5	7.3	5.3	もみ	糸切り後ナデ	横ナデ	良 良	D	1	遺物片・砂粒付着	
476 SK01		15.6	7.9	5.5	もみ	糸切り後ナデ	不明	良 良	D	1	天場もの、砂粒付着、ゆがむ	
477 SK01		16.7	8.1	5.1	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D	1	砂粒付着	
478 SK01		17.0	8.4	5.4	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D	3	底部にひび割れ	
479 SK01		17.9	8.7	5.7	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D	1		
480 SK01		(17.0)	(8.2)	(5.4)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D	1		
481 SK01		15.9	8.1	5.4	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D	1	ゆがむ、砂粒付着	
482 SK01		底定不確	7.9	底定不確	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良 良	D	2	ゆがむ、砂粒・カマツク・重ね焼片付着	

第35表 SK01 碗類觀察表

III

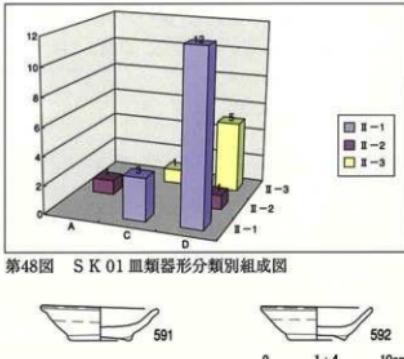
出土したもののうち、分類可能なものは23点である。

各部の法量は、口径が10.1~8.8cm、高台径が5.6~4.2cm、器高が3.2~2.4cmを測定した。その平均は、口径9.3cm、高台径5.0cm、器高2.8cmである。高台底面の付着痕は、糊痕22点、糊・砂痕1点である。外面底面の調整痕は、糸切り後ナデ14点、ナデ9点である。内面底部の見込みは、回転ナデ18点、横ナデ1点、不明4点である。胎土はすべて良である。焼成は、良18点、不良5点である。

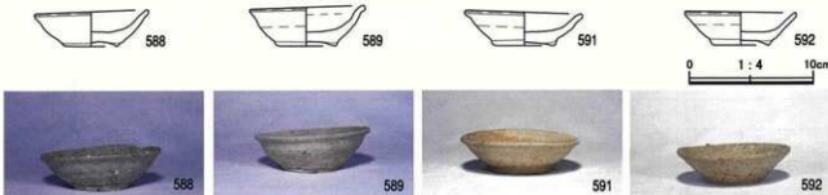
器形分類については、下記の表で記すことにした。

体部	高台 口縁端部			II系計	総計		
	II系						
	1類	2類	3類				
A類	0	1(4.3%)	0	1(4.3%)	1(4.3%)		
C類	3(13.0%)	0	1(4.3%)	4(17.4%)	4(17.3%)		
D類	12(52.2%)	1(4.3%)	5(21.7%)	18(78.3%)	18(78.2%)		
総計	15(65.2%)	2(8.7%)	6(26.1%)	23(100%)	23(100%)		

第36表 SK 01 出土皿類器形分類別組合せ表



第48図 SK 01 皿類器形分類別組成図



第49図 SK 01 皿類遺物実測図 写真45 SK 01 皿類

遺物番号	出土位置	法量(cm)			底面外観	見込み	焼成	胎土	器形分類			備考
		口径	高台径	器高					高台	体部	口縁端部	
585 SK01		9.2	(5.0)	(2.9)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	Ⅱ	D	1	
586 SK01		9.5	(4.9)	(2.9)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	Ⅱ	D	3	
587 SK01		9.3	5.5	2.7	もみ・砂	ナデ	回転ナデ	良	Ⅱ	D	1	重ね焼片・砂粒付着、内面底部にくぼみ
588 SK01		9.3	4.7	2.7	もみ・砂	ナデ	不明	良	Ⅱ	D	2	砂粒付着、ほぼ完形品
589 SK01		9.3	5.0	3.1	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	Ⅱ	D	1	生焼けっぽい、完形品
590 SK01		8.8	5.1	2.6	もみ	糸切り後ナデ	横ナデ	良	Ⅱ	D	1	重ね焼片付着
591 SK01		9.4	5.2	2.7	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	Ⅱ	C	1	生焼けっぽい、完形品
592 SK01		9.0	4.6	2.7	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不明	Ⅱ	A	2	天場もの、完形品、砂粒付着
593 SK01		8.9	4.2	2.8	もみ	ナデ	回転ナデ	良	Ⅱ	D	3	砂粒付着
594 SK01		9.3	5.0	2.8	もみ	ナデ	回転ナデ	良	Ⅱ	C	1	生焼けっぽい、完形品
762 SK01灰層		8.8	4.6	3.1	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	Ⅱ	D	3	生焼けっぽい、口縁円、ゆがむ
763 SK01		(9.2)	(4.8)	(3.2)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	Ⅱ	D	1	生焼け
764 SK01		9.0	4.2	2.4	もみ	糸切り後ナデ	不明	良	Ⅱ	D	3	天場もの、砂粒付着
765 SK01		(10.0)	5.0	(3.2)	もみ	ナデ	回転ナデ	良	Ⅱ	C	3	口縁指円
766 SK01		8.9	4.6	2.9	もみ	ナデ	回転ナデ	良	Ⅱ	C	1	カマクサ付着、ゆがむ
767 SK01		10.1	5.5	3.1	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	Ⅱ	D	1	ひび割れ、ゆがむ
768 SK01		9.6	5.6	2.6	もみ	ナデ	回転ナデ	良	Ⅱ	D	1	
769 SK01		(9.4)	5.2	(3.0)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	Ⅱ	D	1	生焼けっぽい
770 SK01		9.5	5.2	2.9	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	Ⅱ	D	1	ひび割れ、ゆがむ
771 SK01		9.4	5.3	2.9	もみ	ナデ	回転ナデ	良	Ⅱ	D	1	生焼けっぽい、ひび割れ
772 SK01		9.6	5.3	3.0	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	不良	Ⅱ	D	1	生焼け
773 SK01		9.0	5.3	3.0	もみ	糸切り後ナデ	不明	良	Ⅱ	D	1	天場もの、砂粒・カマクサ・輪付着、完形品
774 SK01		9.3	4.6	3.2	もみ	ナデ	回転ナデ	良	Ⅱ	D	3	生焼けっぽい、ひび割れ、ゆがむ

第37表 SK 01 皿類観察表

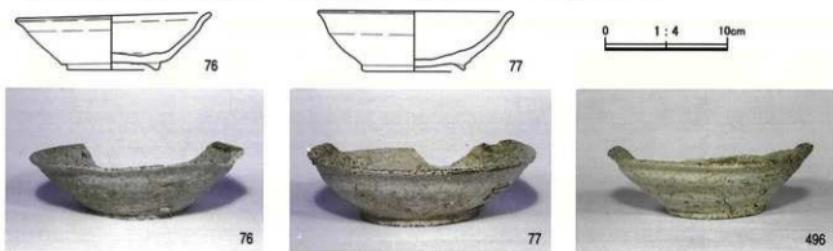
SK 02

碗

出土したもののうち、分類可能なものは19点である。

各部の法量は、口径が16.6～15.5cm、高台径が8.5～7.2cm、器高が5.3～4.4cmを測定した。その平均は、口径15.9cm、高台径8.0cm、器高4.9cmである。高台底面の付着痕は糊痕16点、糊・砂痕3点である。底面外面の調整痕は糸切り後ナデ15点、糸切り後センイ痕1点、ナデ3点である。内面底部の見込みは回転ナデ12点、横ナデ5点、不明2点である。胎土と焼成は両方とも良である。

器形分類は、体部がC類6点、D類13点で、口縁端部はすべて1類であった。



第50図 SK 02 碗類遺物実測図 写真46 SK 02 碗類

遺物 番号	出土位置	法量(cm)			高台底面 付着痕	底面外面	見込み	焼成	胎土	器形分類		備考
		口径	高台径	器高						体部	口縁端部	
75 SK02		16.6	7.7	5.0	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	C	1	重ね焼片・カマクソ付着
76 SK02		15.8	7.6	4.6	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	C	1	
77 SK02		15.6	8.3	4.9	もみ	ナデ	横ナデ	良	良	D	1	砂粒付着
483 SK02	(15.8)	7.6	(4.9)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1		
484 SK02	(16.6)	8.6	(5.3)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	重ね焼片・砂粒付着	
485 SK02	(16.4)	8.6	(4.5)	もみ	ナデ	不明	良	良	C	1	底部中心部分欠損、重ね焼片付着	
486 SK02	(16.2)	7.8	(5.0)	もみ	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	C	1	重ね焼片・カマクソ付着	
487 SK02	15.5	8.5	5.3	もみ・砂	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	C	1	ゆがむ	
488 SK02	16.1	8.4	4.5	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	重ね焼片・砂粒付着	
489 SK02	(15.6)	8.3	(5.0)	もみ	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	D	1	重ね焼片付着	
490 SK02	(15.4)	8.1	(5.6)	もみ	糸切り後センイ痕	回転ナデ	良	良	D	1	砂粒付着	
491 SK02	(16.8)	7.9	(4.9)	もみ・砂	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	D	1		
492 SK02	(15.2)	7.9	(5.4)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1		
493 SK02	(16.8)	7.5	(4.4)	もみ・砂	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	重ね焼片・カマクソ付着、ゆがむ	
494 SK02	(15.4)	(8.0)	(5.0)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	重ね焼片付着	
495 SK02	16.0	7.2	4.6	もみ	糸切り後ナデ	不明	良	良	D	1	天場もの、砂粒・カマクソ付着、釉たれ	
496 SK02	15.7	7.9	5.1	もみ	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	C	1	カマクソ付着	
497 SK02	15.7	8.1	5.1	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	ゆがむ、口縁稍円	
498 SK02	15.7	8.3	4.8	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	重ね焼片・カマクソ付着	

第38表 SK 02 碗類観察表

III

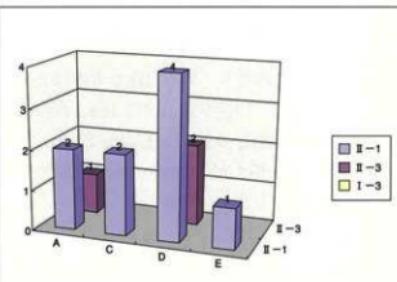
出土したもののうち、分類可能なものは12点である。

各部の法量は、口径が9.2～8.5cm、高台径が5.1～4.2cm、器高が3.1～2.7cmを測定した。その平均は、口径8.8cm、高台径4.8cm、器高2.9cmである。高台底面付着痕は糊痕11点、糊・砂痕1点である。底面外面の調整痕は糸切り後ナデ4点、ナデ8点である。内面底部の見込みは回転ナデ3点、横ナデ1点、不明8点である。不明なのはすべて天場ものだからである。胎土は良が11点、不良1点である。焼成はすべて良である。

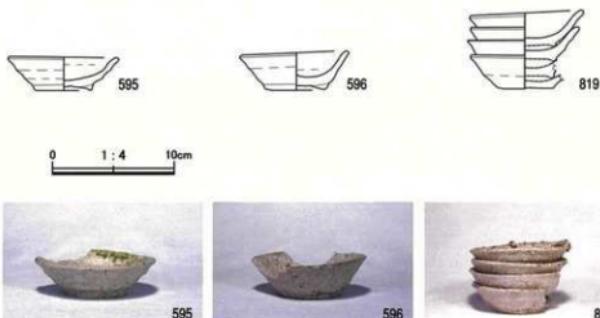
器形分類については、下記の表で記すことにした。

体部	高台 口縁端部		II系計	I系計	総計			
	II系							
	1類	3類						
A類	2(16.7%)	1(8.3%)	3(25%)	3(25%)	3(25%)			
C類	2(16.7%)	0	2(16.7%)	2(16.7%)	2(16.7%)			
D類	4(33.3%)	2(16.7%)	6(50%)	6(50%)	6(50%)			
E類	1(8.3%)	0	1(8.3%)	1(8.3%)	1(8.3%)			
総計	9(75%)	3(25%)	12(100%)	12(100%)	12(100%)			

第39表 SK 02 出土皿類器形分類別組合せ表



第51図 SK 02 皿類器形分類別組成図



第52図 SK 02 皿類遺物実測図 写真47 SK 02 皿類

遺物番号	出土位置	法量(cm)			高台底面 付着痕	底面外面	見込み	焼成	胎土	器形分類	備考
		口径	高台径	器高							
595	SK02	8.7	4.8	2.7	もみ	ナデ	回転ナデ	良	Ⅱ	Ⅲ	1 重ね焼片付着
596	SK02	8.6	5.1	3.1	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	Ⅱ	Ⅲ	1
775	SK02 灰屑	(8.8)	4.8	(3.0)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	Ⅱ	Ⅲ	1 粘粒付着
776	SK02 灰屑	8.7	4.8	2.9	もみ	ナデ	不明	良	Ⅱ	Ⅲ	1 天場もの、砂粒・カマクソ・輪付着、ゆがむ
777	SK02 灰屑	8.9	4.7	2.8	もみ	ナデ	不明	良	Ⅱ	Ⅲ	1 天場もの、砂粒・カマクソ・輪付着
778	SK02 灰屑	8.9	(4.7)	(3.0)	もみ	糸切り後ナデ	不明	良	Ⅱ	Ⅲ	1 天場もの、砂粒・カマクソ・輪付着
779	SK02	8.7	4.6	2.8	もみ	ナデ	不明	良	Ⅱ	Ⅲ	1 天場もの、砂粒・カマクソ・輪付着
780	SK02	9.0	4.2	2.8	もみ	ナデ	不明	良	Ⅱ	Ⅲ	1 天場もの、砂粒・カマクソ・輪付着
781	SK02	9.2	4.9	3.0	もみ・砂	糸切り後ナデ	不明	良	Ⅱ	Ⅲ	1 天場もの、砂粒・カマクソ・輪付着
782	SK02	(9.6)	5.1	(3.0)	もみ	ナデ	焼成ナデ	良	Ⅱ	Ⅲ	1 重ね焼片付着
783	SK02	8.5	4.6	2.7	もみ	ナデ	不明	良	Ⅱ	Ⅲ	1 天場もの、砂粒・カマクソ・輪付着、完形品
784	SK02	8.8	4.7	2.9	もみ	ナデ	不明	良	Ⅱ	Ⅲ	1 天場もの、重ね焼片付着、完形品

第40表 SK 02 皿類観察表

遺物番号	出土位置	法量(cm)			高台底面 付着痕	底面外面	見込み	焼成	胎土	備考
		口径	高台径	器高						
819	SK02	(8.8)	4.5	(2.7)	-	ナデ後センイ痕	不明	良	良	重ね焼数: 4枚 最下段の遺物は天場なし、最上段は天場もの、砂粒・カマクソ・輪付着

第41表 SK 02 重ね皿観察表

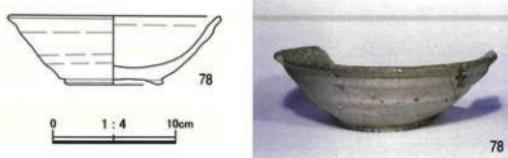
SK 0 3

碗

出土したもののうち、分類可能なものは2点である。

各部の法量は、口径が18.0~17.1cm、高台径が8.0cm、器高が5.6~4.8cmを測定した。その平均は、口径17.6cm、高台径8.0cm、器高5.2cmである。高台底面付着痕は糊痕1点、高台すべて剥離1点である。底面外面の調整痕は糸切り1点、糸切り後ナデ1点である。内面底部の見込みは回転ナデ2点である。胎土と焼成は両方とも良である。

器形分類は、体部がC類1点、D類1点である。口縁端部は、2類1点、3類1点である。



第53図 SK 0 3 碗類遺物実測図 写真48 SK 0 3 碗類

遺物 番号	出土位置	法量 (cm)			高台底面 付着痕	底面外観	見込み	焼成	胎土	器形分類	備考
		口径	高台径	器高							
424	南北トレンチ	16.1	9.3	5.3	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	C	2
425	南北トレンチ	(17.2)	9.3	(5.6)	もみ・跡	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1

第42表 SK 0 3 碗類観察表

皿

出土したもののうち、分類可能なものは3点である。

各部の法量は、口径が9.2~9.0cm、高台径が5.4~4.5cm、器高が2.9~2.8cmを測定した。その平均は、口径9.1cm、高台径5.0cm、器高2.8cmである。高台底面付着痕はすべて糊痕である。底面外面の調整痕はすべて糸切り後ナデである。内面底部の見込みもすべて回転ナデである。胎土と焼成は両方とも良である。

器形分類は、体部がC類1点、D類2点である。口縁端部がすべて1類である。高台はすべてII系である。



第54図 SK 0 3 皿類遺物実測図

写真49 SK 0 3 皿類

遺物 番号	出土位置	法量 (cm)			高台底面 付着痕	底面外観	見込み	焼成	胎土	器形分類	備考
		口径	高台径	器高							
597	SK03	9.0	4.5	2.8	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	II	C	1
598	SK03	9.1	5.2	2.9	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	II	D
785	SK03 灰層	9.2	5.4	2.8	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	II	D

第43表 SK 0 3 皿類観察表

南北トレンチの遺物

碗と皿含めて分類可能なものが3点出土している。

遺物番号	出土位置	法量(cm)			高台底面 付着痕	底面外面	見込み	焼成	胎土	器形分類		備考
		口径	高台径	器高						体部	口縁端部	
424	南北トレンチ	16.1	9.3	5.3	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	C	2	
425	南北トレンチ	(17.2)	9.3	(5.6)	もみ・莎	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	1	

第44表 南北トレンチ碗類観察表

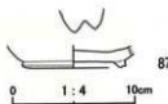
遺物番号	出土位置	法量(cm)			高台底面 付着痕	底面外面	見込み	焼成	胎土	器形分類		備考
		口径	高台径	器高						高台	体部	
761	南北トレンチ	(7.8)	(4.7)	(2.7)	もみ	ナデ	回転ナデ	良	良	I	D	1

第45表 南北トレンチ皿類観察表

表探

碗

表探からの出土ではあるが、底部のみの遺物で遺物番号87の内面底部にアルファベットの「W」に類似した模様のある遺物があった。



87

第55図 表探碗類遺物実測図

写真50 表探碗類

遺物番号	出土位置	法量(cm)			高台底面 付着痕	底面外面	見込み	焼成	胎土	器形分類		備考
		口径	高台径	器高						体部	口縁端部	
87	表探	-	8.5	-	もみ	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	-	-	底部のみ残存、「W」状の模様
521	表探	15.7	8.3	4.9	もみ	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	D	I	
522	表探	15.4	8.4	5.0	もみ	糸切り後ナデ	不明	良	良	C	I	天場もの、砂粒付着
523	表探	17.4	8.3	5.3	もみ	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	C	I	重ね焼片付着、ゆがむ、輪たれ
524	表探	(16.4)	8.2	(4.5)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	I	
525	表探	(16.6)	(8.9)	(4.9)	もみ	糸切り後ナデ	横ナデ	良	不良	B	I	
526	表探	(16.4)	9.7	(5.3)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	I	
527	表探	(16.4)	8.5	(5.0)	もみ	糸切り後ナデ	横ナデ	良	良	A	I	高台に1条入る
528	表探	(16.4)	8.0	(4.5)	もみ	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	D	I	砂粒付着

第46表 表探碗類観察表

皿

分類可能なものが1点出土している。

遺物番号	出土位置	法量(cm)			高台底面 付着痕	底面外面	見込み	焼成	胎土	器形分類		備考	
		口径	高台径	器高						高台	体部		
806	表探	(9.0)	5.1	(2.7)	もみ	ナデ	回転ナデ	良	不良	II	D	I	重ね焼片付着

第47表 表探皿類観察表

鉢

底部のみの出土ではあるが、今回出土した中で最大の高台径があり12.4cmを計測した。

遺物番号	出土位置	法量(cm)			高台底面 付着痕	底面外面	見込み	焼成	胎土	器形分類		備考
		口径	高台径	器高						体部	口縁端部	
812	表探	-	12.4	-	不明	糸切り後ナデ	回転ナデ	良	良	-	-	底部のみ残存

第48表 表探鉢類観察表

第3節 考 察

深廻間B古窯跡群は、第2節や遺物観察表をもとに考えると、主な生産品は碗類と皿類である。ここでは、碗類と皿類の法量のまとめと器形分類のデータなどの比較検討をしたいと思う。

遺物のほとんどが窯内から出土している。3号窯から最も多く出土し、続いて2号窯から多く出土した。窯以外からは、面積はあまりないが灰原からも多少出土している。3号窯の焚口付近の前部には、遺構が横一直線状に3つ並び、その中の1つには遺物が固まって出土した。それらを含めてデータの対象とした。

碗類は、全体で528点出土し、その内訳のほとんどは窯内からで、窯内だけで380点出土しているが、その割合は約70%占めている。その中でも、3号窯からの遺物は312点で大半の約60%を占める。

皿類は、全体で278点出土し、その内訳も碗と同様に窯内からで、窯内だけで238点出土し、全体の約85%を占めていた。1号窯からは5点しかなかったが、2号窯は76点で約27%、3号窯は120点で約43%の割合を占めている。

今回調査した遺跡から出土した碗類・皿類のすべての平均・最大・最小値と、各窯体の窯内遺物の平均も下記の表に記してみた。

器種	碗類			皿類		
	口径	高台径	器高	口径	高台径	器高
全体平均値	16.6	8.1	5.2	9.1	4.9	2.8
全体最大値	18.2	9.9	6.0	10.2	6.3	3.4
全体最小値	15.1	6.6	4.4	7.4	3.6	2.0
1号窯平均値	16.0	8.1	5.1	7.4	3.9	2.0
2号窯平均値	16.3	8.1	5.2	8.7	4.4	2.6
3号窯平均値	16.6	8.1	5.1	9.4	5.2	3.0

第49表 碗類皿類の法量比較表

1号窯の平均値は数が少ないので比較するのは難しいが、2号窯と3号窯を比較すると、3号窯のものが全体的にやや大きい事が分かる。

また、数枚だが碗類の中には、外面底面を糸切りなどしたのみで高台が明らかに付着しないものが存在した。2号窯と3号窯の窯内から出土し、体部と口縁端部の作りは他の碗類と同様に差異はなく、ただ高台が付着しないだけである。同じように、瀬戸市の太子A窯跡①という遺跡から高台のない碗が出土し「(平底)碗」として紹介されている。

大府市域内で発掘調査した他の窯業遺跡の平均値と比べて見ると、海陸庵古窯群の碗(平均値で口径15.9cm、高台径7.1cm、器高5.0cm)よりも大きく、ガンジ山A古窯群の碗(窯と灰原の平均値で口径16.4cm、高台径8.0cm、器高4.8cm)よりも若干大きく、神明古窯群の碗(2号窯の平均値で口径16.7cm、高台径7.9cm、器高5.2cm)ではほぼ同様であった。今回の調査区付近で、以前に調査している深廻間A古窯群の碗の法量は、窯と灰原の平均値で口径16.2cm、高台径8.2cm、器高5.0cmで、深廻間

B古窯跡群の方がやや大きいことがわかった。

次に碗の器形分類は、体部のほとんどがD類で曲線的に立ち上がるが、口縁付近で外反するもので396点であった。口縁端部については、1類の丸みを帯びたものが一番多く397点で、偶然にも体部より1点多かったのである。そのため両方とも全体の75%の割合を占めていた。当然組合せで一番多かったのは、体部がD類の口縁端部が1類の組合せ286点で、全体の54%を占めていた。

体部	口縁端部				
	1類	2類	3類	底部のみ	総計
A類	7	2	0	0	9
B類	10	3	0	0	13
C類	94	7	4	0	105
D類	286	31	79	0	396
底部のみ	0	0	0	5	5
総計	397	43	83	5	528

第50表 碗類器形分類別組合せ表

皿類についてはもう1つ比較対象となるものがある。それは、底面外面に高台を有するものと、高台がないものである。高台を有するものが201点(72%)で、高台が無いものが77点(27%)である。高台のタイプ別に各部の法量の平均と全体平均との変化を比べてみる事にした。その結果が次の表で、全体平均は上記の表のとおりである。

部位等	器形	
	I系	II系
口径	8.6	9.3
底径／高台径	4.4	5.1
器高	2.5	2.9

第51表 皿類高台別法量平均表

高台がないものは全体平均よりもすべてに於いてやや小さく、高台を有するものは全体平均よりもすべてやや大きかった。

碗と同じく市内の遺跡と比較してみると、海陸庵古窯群の皿(平均値で口径7.9cm、底径3.7cm、器高2.1cm)やガンジ山A古窯群の皿(窯と灰原の平均値で口径8.5cm、底径4.8cm、器高2.1cm)よりはやや大きく、神明古窯群の皿(灰原の平均値で口径9.3cm、高台径5.1cm、器高2.6cm)とはほぼ同じか、若干小さめという結果になった。以前に調査している深廻間A古窯群の皿の法量は、窯と灰原の平均値で口径8.8cm、高台径4.9cm、器高2.5cmで、碗類と同様に深廻間B古窯跡群の方がやや大きめである。

皿類の器形分類は、まず全体で見ると体部で多いのは、D類の体部が曲線的に立ち上がるが、口縁付近で外反するもので145点(52%)である。口縁端部は、1類が多く209点(75%)である。また、高台はI系が77点(28%)で、II系が201点(72%)で高台を有するものが多い。I系のものは、口縁端部は全体同様に1類が68点(24%)で多いが、体部はC類が26点と多く次にA・D類が多かった。II系のものは、体部がD類130点(46%)、口縁端部が1類141点(50%)である。

この結果から、皿で一番多く見られた組合せは、体部がD類で口縁端部が1類の高台がII系で90点（32%）の組合せである。

体部	高台 口縁端部								
	I系			I系計	II系			II系計	総計
	1類	2類	3類		1類	2類	3類		
A類	16	2	0	18	2	1	1	4	22
B類	7	1	1	9	5	0	1	6	15
C類	25	1	0	26	41	4	13	58	84
D類	13	1	1	15	90	7	33	130	145
E類	7	2	0	9	3	0	0	3	12
総計	68	7	2	77	141	12	48	201	278

第52表 皿類器形分類別組合せ表

また、2号窯と3号窯の高台の有無を比較してみると、2号窯に関する皿の遺物すべて合わせて81点出土しているのだが、そのうちI系が65点（80%）で、II系が16点（20%）でI系がやや多かった。それに対して、3号窯の関連遺物は152点出土し、I系が8点（5%）で、II系が144点（95%）で圧倒的にII系が占めていた。それに加えて、3号窯入り口付近で見つかっている3つのSKの遺構から出土している皿のすべてがII系の遺物であった。

これらのことから、今回の調査で出土した遺物を中野晴久氏による「赤羽・中野編年」②に従うと、2～3型式（12世紀後半から13世紀初頭）に相当すると思われる。なぜなら碗類は、全体の平均値や体部が曲線的に立ち上がるものが多いが、直線的に立ち上がるものも混在していることと、口縁端部が外反するがそのほとんどは丸みを帯びていて、これらの点が類似する。皿類は、碗類と同様に全体の平均値が類似し、高台を有するものが高台の無いものよりも多く出土している事から、2型式の傾向の強い時期であると考えられる。また推測ではあるが、皿類の高台の有無から2号窯と3号窯どちらが先に使用始めたのかを考えて見ると、3号窯の方が高台を有するものを多く焼成している事から、2号窯より以前に使われ始めたのではないかと思われる。

碗・皿類とともに、高台底面付着痕は頻が多く、底面外面調整痕は糸切り後ナデが、内面底部の見込みは回転ナデが圧倒的に多くを占めていた。また、深廻間A古窯群と類似している点が多く、2型式から3型式へ以降する時期に近隣で同じように窯業生産をしていたことが伺える。

この遺跡で主に焼成していたものは、碗類や皿類と鉢であるが、特殊なものとして壺の体部の破片が1点見つかっている。窯内から見つかっていないので生産していたかは不明である。

これまでに調査した市内の古窯と比較してみると、深廻間B古窯跡群は、神明古窯群よりも新しく、遺物の平均値が碗・皿類とともに深廻間B古窯跡群の方が大きいことから、近隣の深廻間A古窯群よりもやや前から始まっているのではないかと考えられる。

註①青木修『太子A窯跡』29頁（財瀬戸市埋蔵文化財センター、1997年）

註②中野晴久他『「全国シンポジウム」中世常滑窯をめぐって』資料集生産地における編年について』1994年

第4章 科 学 分 析



熱残留磁気測定調査風景

第1節 深廻間B古窯跡群の考古地磁気

富山大学理学部地球科学教室

広岡公夫、南 依里、成 亨美

はじめに

大府市内では、海陸庵古窯群、神明古窯群（広岡ほか、1996）とガンジ山A古窯群、深廻間A古窯群（広岡・佐竹、2005）について考古地磁気の測定がなされている。今回は、大府市長草町の深廻間B古窯群第1・2・3号窯について試料を採取し、考古地磁気測定を行なったので、その結果を報告する。

土が高温まで加熱されると、それに含まれる磁鉄鉱 (Fe_3O_4) や赤鉄鉱 (Fe_2O_3) など鉄酸化物の磁性鉱物は、それぞれの鉱物に固有の温度を超えると、それまで保持していた磁化を失ってしまう。この温度をキュリー点と称する。陶器窯の窯体を構成している地山の土が磁化を失ったキュリー点以上の高温の状態から、地球磁場が作用している地上で冷えると、再び磁化を有する能力が蘇り、地磁気の方向と同じ向きの残留磁化を獲得する。このような機構で獲得された磁化を熱残留磁化（thermoremanent magnetization、略して、NRM）という。焼土を伴う遺構は、したがって、その遺構で最終焼成が行なわれた時の地球磁場の方向を熱残留磁化として記憶していることになる。

これに対して、地球磁場の方向は、「地磁気永年変化」と呼ばれるゆっくりとした時間変化をしているので、地球磁場方向は時代が異なれば違った向きになっている。日本で地磁気（地球磁場）を直接観測した記録は、偏角については西暦1613年に九州の平戸でなされたものが最古である。伏角については、明治になってからの観測記録しか残されていない。これより古い時代に遡って地磁気の変動の様子を知るために、考古地磁気学の方法によるしかない。

東海・北陸から九州北部に至る西南日本の各地に分布する年代のよくわかった遺跡から試料を採集し、それらの考古地磁気測定を行なった結果、過去2000年間にわたって相当詳しい地磁気永年変化が明らかになっている（Hirooka, 1971；広岡, 1977）。このように考古地磁気学的に求められた永年変化を「考古地磁気永年変化」と呼び、観測記録から得られる通常の地磁気永年変化と区別している。焼土試料の残留磁化測定から得られた結果を考古地磁気永年変化曲線と比べることによって、考古地磁気学的に年代を推定することができる。

考古地磁気永年変化

西南日本の考古地磁気永年変化曲線は、上述のように西南日本各地の遺跡から得たデータをまとめたもので、年代はサンプリング当時のその遺構について考古学的に推定された年代（時代）によっているため、その当時の考古編年と独立ではないことに注意を払う必要がある。このことは、考古編年が改訂されると推定年代値も変更になることを意味するからである。

また、西南日本の地域内では、地磁気の方向に地域差はないという前提に立って作られている。しかし、考古地磁気データの蓄積によって、西南日本の中でもそれぞれの地域のデータ数が増し、それを詳しく見ると、時代によっては、地磁気の地域差が無視できない大きさになる場合が見られ、西南日本全体を一括りにして論することは適当でないことがわかつてきた。地方によっては非常に多数の

データが得られていて、その地域のデータのみによってその地域用の永年変化曲線が描けるようになった地域もある。地磁気の地域差は以前からその可能性が指摘されていた（広岡、1981）が、データの蓄積によって、その様相が次第に明らかになりつつある。例えば、17～19世紀では、九州北部から山口県にかけての西日本と東海・北陸地方とでは、偏角が数度異なることや、7～11世紀には中国・畿内と北陸で伏角に10°近い差があること（広岡、1989；1993）などが明らかにされている。北陸地方については、西暦550年～1550年の期間の考古地磁気永年変化が北陸版永年変化曲線として発表されている（広岡、1997）。

最近、藤澤（1996）は、瀬戸・東濃地域の考古地磁気データをまとめて、9世紀末から18世紀初頭までの永年変化を西南日本版永年変化曲線と比較し、やはり相当な地域差のあることを述べている。また、広岡・藤澤（1998）は瀬戸・東濃地域のデータを中心にして描いた東海地方版永年変化曲線試案を出している。

このように、考古地磁気学的に年代を推定しようとする時に、どの考古地磁気永年変化曲線を基準として採用するかによって、推定年代値そのものが違ってくることになる。

今回の深廻間B古窯群の測定結果は、主として、東海版永年変化曲線を用いて年代の推定を行なうこととする。

試料の採取

深廻間B古窯群では、1号窯から17個、2号窯から14個、3号窯から12個の、総計43個の試料を採集した。採取試料個数および試料番号は第53表に示されている。これらは全て、方位が詳しく測られた定方位試料である。定方位試料の採取法は、我々の研究室で以前から行なっている石膏で固めて、石膏表面に平面を作り、その面の方位を測定してから採る方法で、比較的短時間に精度のよい定方位試料が得られる。

方位の測定にはクリノメーター（考古地磁気試料採取用に改造した特製クリノコンパス）の磁針を用いているので、磁北を基準にした方位となる。したがって、磁北が真北からずれている角度（現在の偏角）分だけ偏ったものになっている。

遺跡現場の現在の偏角は、遺跡現場で太陽の方位観測を行なって求める。今回の深廻間B古窯群1・2・3号窯では、2号窯の左脇の地点にトランシットを据えて太陽の方位観測を行なった。方位観測の結果、深廻間B古窯群の遺跡現場の現在の偏角（D_p）の値は、西偏 6.01°（D_p = -6.01°）を得た。遺跡現場の緯度・経度とともに、D_pの値も第53表に載せてある。残留磁化測定結果の偏角はこの値を用いて真北を基準にしたものに補正されている。

残留磁化の測定には夏原技研製のリングコア型スピナーマagnetic（SMM-85型）を使用し、試料1個につき6回置き直しをして測定した。

試料が保持している自然残留磁化（natural remanent magnetization、略して、NRM）には、最終焼成後に付加された不安定な磁化成分も含まれており、それを除去するために、段階交流消磁を行う。消磁場の段階としては、2.5mT、5.0mT、7.5mT、10.0mT、15.0mT、20.0mTの6段階を設定し、NRMの測定の後、この6段階で消磁を行なった。段階ごとに磁化方向のまとまり具合、磁化強度の減少度をみて、最もまとまりがよくなる段階を判定し、それを最適消磁段階とする。その時の

平均磁化方向を考古地磁気データとして採用し、それで年代の推定を行なうことにしている。

それぞれの遺構についてのNRMおよび各消磁段階の個々の試料の残留磁化測定結果は、第54～74表にまとめられている。これらの表の中で、*印の付されている試料は同一遺構の他の試料の磁化方向から大きく外れた磁化をもつものを示している。これらの試料は、何らかの原因で、当時の地磁気の方向を記録している熱残留磁化とは異なった方向を示すものであると考えられるので、これらの試料は平均磁化方向を求める統計計算の際には除外されている。

各遺構の各段階の平均磁化方向およびばらつきの程度を表わすバラメータ（フィッシャーの信頼角： α_{95} と、フィッシャーの精度係数：K）を求める統計計算にはフィッシャーの統計法（Fisher, 1953）を用いた。統計計算の結果は第75表の通りである。同表の平均磁化強度を見ると、1～3号窯とともに10～3 (Am/kg) のオーダーの磁化強度を保有しているので、十分なTRMを獲得しているものと考えられる。

考古地磁気年代

第75表の考古地磁気データ（最適消磁段階のもの）の平均磁化方向（平均偏角・Dと平均伏角・Iから求められる）を、考古地磁気永年変化曲線上にプロットして、曲線のどの年代のところに来るかを見て年代を推定する。推定年代値の年代幅（年代誤差にあたる）は、 α_{95} の占める範囲となる。

第56図は西南日本版考古地磁気永年変化曲線（広岡、1977）と東海版曲線（広岡・藤澤、1998）を描いた図に、第75表の考古地磁気データを記入したものである。平均磁化方向は黒丸、 α_{95} はそれを囲む円で表されている。この図を見ると、3窯跡とも、それぞれの窯の平均磁化方向を示す黒丸が、他の窯の α_{95} の円内に入っているので、統計学的には誤差の範囲を考慮すると時代差はないといえる。また、図にも明らかなように、測定結果は西南日本版曲線からは相当大きく外れており、東海版曲線に近いところに位置することが良くわかる。これら両曲線を用いて、それこれから考古地磁気推定年代値を求めると、次のようになる。

東海版曲線

1号窯：A.D. 1150 ± 70 年
 -40

西南日本版曲線

A.D. 1210 ± 30 年

2号窯：A.D. 1150 ± 50 年

A.D. 1200 ± 30 年

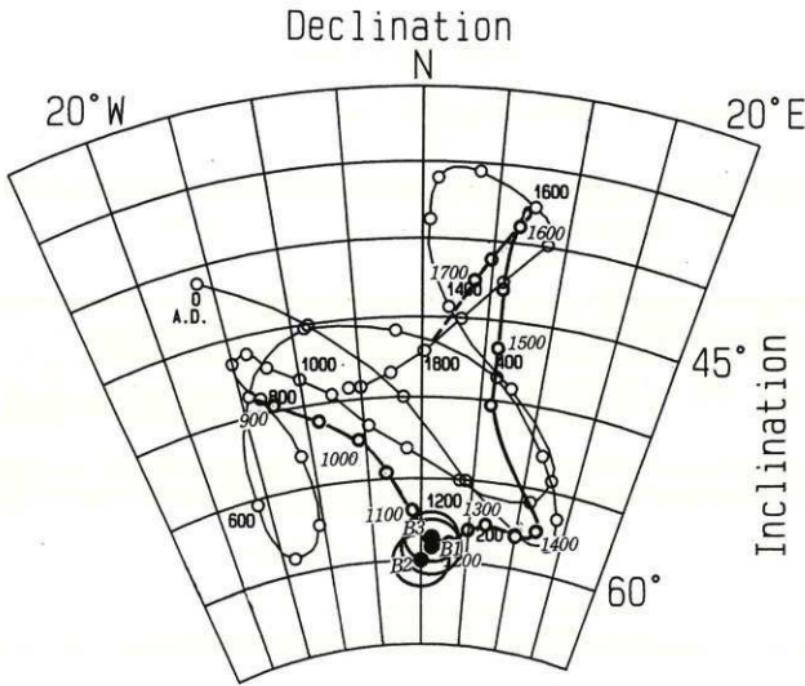
3号窯：A.D. 1140 ± 70 年
 -30

A.D. 1200 ± 20 年

しかし、先にも述べたように、瀬戸・東濃地域のデータを中心として描かれた東海版永年変化曲線は、まだ、試案の段階で、今後の検討の結果修正される可能性を含んでおり、修正が行なわれれば推定年代値にも変更が有り得ることを念頭において頂きたい。

引用文献

- Fisher, R. A. (1953) Dispersion on a sphere. Proceedings of Royal Society of London. Series A, vol.217, 295-305.
- 藤澤良祐 (1996) 考古地磁気推定年代の検討、月刊地球、vol.18, 339-343.
- Hirooka, K. (1971) Archaeomagnetic study for the past 2,000 years in Southwest Japan. Mem. Fac. Sci., Kyoto Univ., ser. Geol. & Mineral., 38, 167-207.
- 広岡公夫 (1977) 考古地磁気および第四紀古地磁気研究の最近の動向、第四紀研究、vol.15, 200-203.
- 広岡公夫 (1981) 考古地磁気による年代推定とその問題点、考古学研究、vol. 28, 69-78.
- 広岡公夫 (1989) 古代手工業生産遺跡の自然科学的考察、一考古地磁気学、古地磁気学の立場から一、「北陸の古代手工業生産」、北陸古代手工業生産史研究 会編、真陽社、225-284.
- 広岡公夫 (1993) 年代推定の手法、季刊考古学、第42号 (特集・須恵器の編年とその時代)、75-77.
- 広岡公夫 (1997) 北陸における考古地磁気研究、「中・近世の北陸、一考古学が語る社会史ー」、桂書房、富山、560-583.
- 広岡公夫、藤沢良祐 (1998) 東海地方の地磁気永年変化曲線、「考古地磁気の地域差とその年代推定への応用」、平成7年度～平成9年度科学研究費補助金 (基盤研究C) 研究成果報告書、広岡公夫編、147-160.
- 広岡公夫、水上裕美、川浪英子 (1996) 海陸庵・神明古窯址群の考古地磁気年代、「海陸庵古窯址群・神明古窯址群、～大府半月地区区画整理地内埋蔵文化財発掘調査報告書～」、大府市文化財調査報告書、第2集、愛知県大府市教育委員会、138-151.
- 広岡公夫、佐竹俊昭 (2005.3.1) 深廻間A古窯跡群の考古地磁気学的研究、「深廻間A古窯跡群、～大府特定深廻間土地区画整理地内埋蔵文化財発掘調査報告～」、大府市文化財調査報告書、第5集、愛知県大府市教育委員会、160-172.



図の説明

第56図 過去2,000年間の西南日本版考古地磁気永年変化（細線）（広岡、1977）および
西暦500～1550年の東海版永年変化（太線）（広岡・藤澤、1998）と深廻間B古窯
群の考古地磁気測定結果

B1:B1号窯、B2:B2号窯、B3:B3号窯

Declination: 偏角、Inclination: 伏角。

遺構名	個数	試料番号
1号窯	17	CT3011~3027
2号窯	14	CT3031~3044
3号窯	12	CT3051~3062

Lat. : 136° 57' 08" N, Long. : 35° 00' 49" E
 Dp = -6.01°

第53表 深廻間B古窯第1・2・3号窯で採取した考古地磁気試料番号

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 (×10 ⁻⁴ Am ² /kg)
CT 3011	-5.5	61.6	10.7
3012	-3.4	61.2	12.0
3013	-0.4	59.4	9.10
3014	-3.2	61.3	9.66
3015	-5.1	59.4	12.0
3016	0.9	56.5	10.4
3017	3.6	54.2	16.0
3018	5.5	58.5	8.55
3019	-2.1	58.5	10.8
3020	4.8	58.2	17.1
3021	9.6	58.1	11.1
3022	-0.1	56.9	15.3
3023	-1.1	62.3	8.66
*	3024	88.1	65.2
	3025	11.2	61.6
	3026	9.9	63.9
	3027	8.2	62.9

* : 統計計算の際に除外したもの。

第54表 深廻間B古窯第1号窯のNRMの磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ Am 2 /kg)
CT 3011	-7.0	60.1	10.6
3012	-1.7	60.9	12.0
3013	-0.2	59.2	9.05
3014	-3.8	61.2	9.58
3015	-8.5	60.2	11.9
3016	-1.7	57.0	10.3
3017	2.7	54.4	15.8
3018	5.7	57.1	7.87
3019	-5.3	59.3	10.5
3020	3.3	59.9	16.7
3021	4.7	56.8	10.9
3022	-1.5	57.0	15.0
3023	0.8	62.1	8.53
3024	3.1	66.8	4.87
3025	6.8	63.7	3.56
3026	10.9	63.9	5.03
3027	5.7	62.4	10.3

第55表 深廻間B古窯第1号窯の2.5mT消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ Am 2 /kg)
CT 3011	-10.4	60.3	10.4
3012	-2.1	60.9	11.7
3013	-1.8	59.2	8.86
3014	-3.1	61.3	9.37
3015	-11.5	59.3	11.5
3016	3.1	56.2	10.2
3017	1.9	54.3	15.5
3018	6.6	58.6	8.32
3019	-5.7	58.9	10.5
3020	4.2	57.5	16.6
3021	6.4	56.4	10.9
3022	-3.0	56.5	14.8
3023	-1.9	61.9	8.49
3024	8.5	64.4	4.93
3025	6.8	63.4	3.53
3026	9.7	63.2	5.07
3027	4.4	63.2	10.5

第56表 深廻間B古窯第1号窯の5.0mT消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ Am ² /kg)
CT 3011	-12.6	60.6	10.1
3012	-0.6	61.0	11.4
3013	-0.5	59.6	8.72
3014	-1.6	60.9	9.26
3015	-5.6	58.3	11.1
3016	-1.0	56.5	9.88
3017	2.9	53.8	15.1
3018	6.7	58.3	8.18
3019	-5.7	59.1	10.4
3020	3.8	58.2	16.4
3021	5.4	55.3	10.7
3022	-1.6	56.0	14.5
3023	-2.1	62.1	8.42
3024	7.2	64.7	4.87
3025	11.0	61.6	3.49
3026	12.2	62.5	4.97
3027	8.6	61.2	10.3

第57表 深廻間B古窯第1号窯の7.5mT消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ Am ² /kg)
CT 3011	-8.0	60.1	9.39
3012	-4.2	61.4	10.9
3013	0.4	58.9	8.34
3014	-2.3	61.2	8.97
3015	-6.4	58.7	10.7
3016	1.0	56.1	9.46
3017	2.4	53.7	14.3
3018	8.4	58.0	7.89
3019	-3.9	58.7	9.94
3020	4.0	57.9	16.0
3021	5.3	57.2	10.4
3022	-3.7	56.5	13.9
3023	-2.3	61.7	8.23
3024	3.9	65.2	4.69
3025	8.0	62.6	3.37
3026	8.3	63.2	4.81
3027	7.6	61.4	9.88

第58表 深廻間B古窯第1号窯の10.0mT消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ Am/kg)
CT 3011	-4.6	60.5	8.16
3012	-3.3	61.3	9.58
3013	-1.4	58.5	7.35
3014	-1.2	61.0	8.25
3015	-7.0	57.7	9.23
3016	-1.0	56.9	8.41
3017	3.6	53.4	12.4
3018	7.1	58.2	7.18
3019	-4.8	59.2	9.10
3020	3.8	58.2	14.8
3021	9.4	55.9	9.52
3022	-1.8	56.5	12.1
3023	-0.1	61.1	7.79
3024	4.1	64.1	4.43
3025	8.1	62.6	3.14
3026	8.8	62.8	4.50
3027	7.0	61.2	8.98

第 59 表 深廻間 B 古窯第 1 号窯の 1.50mT 消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ Am/kg)
CT 3011	-4.3	58.7	6.80
3012	0.3	60.4	7.96
3013	-0.9	57.0	5.97
3014	0.5	60.8	7.26
3015	-6.9	57.3	7.43
3016	-1.3	57.8	6.89
3017	3.9	52.5	10.1
3018	6.1	57.9	6.11
3019	-5.4	59.0	7.81
3020	1.3	58.5	12.8
3021	4.4	56.4	7.87
3022	-1.6	56.3	9.74
3023	1.5	61.1	7.23
3024	3.5	64.2	4.08
3025	5.9	63.3	2.79
3026	8.5	63.4	4.11
3027	6.7	61.0	7.94

第 60 表 深廻間 B 古窯第 1 号窯の 2.00mT 消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ Am/kg)
CT 3031	3.4	59.4	10.9
3032	-2.5	61.0	9.31
3033	-7.0	59.3	11.2
3034	-0.4	59.4	8.04
3035	-1.0	58.3	5.57
3036	-5.9	53.7	8.72
3037	3.6	59.5	8.06
3038	-8.1	61.3	15.2
3039	6.9	62.2	16.0
3040	0.2	59.3	15.2
3041	3.0	60.6	15.1
3042	-0.3	61.5	18.1
3043	9.1	63.3	15.6
3044	-6.3	55.3	23.2

第61表 深廻間B古窯第2号窯のNRMの磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ Am/kg)
CT 3031	2.8	59.8	10.7
3032	-4.5	61.0	9.26
3033	-4.4	58.9	10.9
3034	1.5	59.4	7.81
3035	0.1	58.2	5.44
* 3036	-7.0	52.0	8.55
3037	5.8	59.5	7.81
3038	-5.5	60.7	15.1
3039	9.8	62.1	15.8
3040	1.8	59.2	15.0
3041	2.0	59.8	14.9
3042	-3.8	62.0	16.8
3043	9.9	63.3	15.6
3044	-5.9	56.4	23.2

*: 統計計算の際に除外したもの。

第62表 深廻間B古窯第2号窯の2.5mT消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ Am ^f /kg)
CT 3031	1.3	59.3	10.8
3032	-6.4	61.2	9.19
3033	-10.4	59.4	10.8
3034	-0.8	59.6	7.71
3035	0.4	58.1	5.38
*	3036	-7.7	52.6
	3037	3.7	59.7
	3038	-8.5	61.5
	3039	11.5	61.2
	3040	2.4	59.3
	3041	1.5	60.7
	3042	-0.1	61.7
	3043	6.6	63.5
	3044	-8.1	56.4
			23.0

* : 統計計算の際に除外したもの。

第63表 深廻間B古窯第2号窯の5.0mT消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ Am ^f /kg)
CT 3031	4.7	59.0	10.6
3032	-4.2	60.5	9.05
3033	-8.2	58.8	10.6
3034	0.6	59.2	7.54
3035	-1.3	58.1	5.26
*	3036	-9.2	52.0
	3037	3.8	59.5
	3038	-4.2	60.5
	3039	8.9	62.0
	3040	2.1	59.5
	3041	4.1	59.5
	3042	-3.4	62.2
	3043	9.0	63.1
	3044	-5.1	56.3
			22.6

* : 統計計算の際に除外したもの。

第64表 深廻間B古窯第2号窯の7.5mT消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ Am ^t /kg)
CT 3031	2.1	59.9	10.3
3032	-6.1	61.3	8.91
3033	-4.4	58.8	10.3
3034	0.3	59.0	7.37
3035	-0.1	58.1	5.07
* 3036	-5.2	51.3	7.81
3037	3.8	59.6	7.44
3038	-6.2	61.2	14.5
3039	6.5	61.9	15.2
3040	2.5	59.0	14.4
3041	3.9	60.3	14.3
3042	-0.9	61.4	17.1
3043	7.7	63.0	14.8
3044	-6.2	55.7	21.9

* : 統計計算の際に除外したもの。

第65表 深廻間B古窯第2号窯の10.0mT消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ Am ^t /kg)
CT 3031	3.6	59.2	9.90
3032	-7.4	60.6	8.57
3033	-9.3	59.5	9.52
3034	0.1	59.1	6.84
3035	1.7	58.2	4.64
* 3036	-5.8	51.6	6.96
3037	4.2	59.2	7.04
3038	-5.2	60.5	13.8
3039	7.7	61.5	14.5
3040	0.4	59.3	13.8
3041	1.3	59.4	13.5
3042	-1.4	61.6	16.0
3043	9.3	62.6	13.9
3044	-6.4	55.9	20.1

* : 統計計算の際に除外したもの。

第66表 深廻間B古窯第2号窯の15.0mT消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ Am ² /kg)
CT 3031	3.4	58.9	9.18
3032	-3.0	60.8	7.98
3033	-6.1	58.5	8.54
3034	-0.5	59.0	6.42
3035	0.4	57.9	4.16
3036	-4.0	53.7	6.10
3037	3.1	59.9	6.66
3038	-7.0	60.6	13.0
3039	8.5	61.5	13.8
3040	0.4	59.3	13.0
3041	0.3	59.7	12.5
3042	-4.5	62.3	14.9
3043	9.6	62.3	12.7
* 3044	-18.2	36.4	15.2

* : 統計計算の際に除外したもの。

第67表 深廻間B古窯第2号窯の20.0mT消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ Am ² /kg)
CT 3051	2.1	57.9	54.0
3052	-2.6	57.3	62.5
3053	-0.2	55.8	33.4
3054	2.2	58.6	16.7
3055	6.0	56.9	12.9
3056	-6.5	59.7	9.52
3057	3.0	60.5	7.74
3058	1.7	59.1	13.9
3059	7.2	61.5	43.5
3060	2.3	58.8	41.1
3061	2.7	61.5	47.7
3062	-2.1	58.0	5.83

第68表 深廻間B古窯第3号窯のNRMの磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ Am 2 /kg)
CT 3051	1.6	59.2	54.0
3052	4.7	56.1	63.1
3053	1.1	55.2	33.1
3054	-0.1	55.6	16.6
3055	6.6	57.5	12.8
3056	-5.2	60.7	9.39
3057	6.9	59.5	7.63
3058	0.1	59.6	13.9
3059	10.0	59.2	42.9
3060	4.0	58.7	40.7
3061	2.1	62.1	47.3
3062	-3.6	59.3	5.64

第69表 深廻間B古窯第3号窯の2.5mT消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ Am 2 /kg)
CT 3051	2.5	58.9	53.3
3052	-1.9	56.0	62.5
3053	-0.7	55.5	32.8
3054	-2.0	57.6	16.7
3055	4.7	58.4	12.7
3056	-6.1	60.7	9.31
3057	4.6	60.2	7.57
3058	2.9	59.2	13.7
3059	6.5	62.3	42.3
3060	1.5	59.7	40.3
3061	2.4	62.0	46.6
3062	-3.6	58.9	5.39

第70表 深廻間B古窯第3号窯の5.0mT消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ Am/kg)
CT 3051	-0.5	59.3	52.9
3052	1.1	55.9	62.0
3053	2.1	54.6	32.6
3054	-2.0	56.9	16.5
3055	6.8	57.2	12.6
3056	-5.2	59.8	9.24
3057	6.9	59.0	7.54
3058	2.5	58.9	13.7
3059	6.1	62.7	41.2
3060	2.2	59.3	39.4
3061	3.7	61.2	46.2
3062	-1.2	57.5	5.11

第71表 深廻間B古窯第3号窯の7.5mT消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ Am/kg)
CT 3051	3.3	58.2	52.3
3052	-2.7	56.5	60.9
3053	0.1	54.8	32.1
3054	-1.1	55.9	16.3
3055	7.5	56.6	12.6
3056	-6.5	60.0	9.15
3057	6.3	59.4	7.44
3058	2.1	59.0	13.6
3059	7.1	61.3	39.9
3060	2.5	58.9	38.5
3061	3.9	61.0	45.4
3062	-4.4	58.7	4.67

第72表 深廻間B古窯第3号窯の10.0mT消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ Am ^f /kg)
CT 3051	1.7	58.4	49.5
3052	-1.2	55.8	57.8
3053	-0.0	55.1	31.0
3054	-0.3	56.3	16.0
3055	4.7	57.7	12.4
3056	-4.5	59.5	8.82
3057	6.8	59.5	7.15
3058	1.3	59.2	13.4
3059	6.4	61.7	35.7
3060	0.9	59.6	35.3
3061	2.0	61.9	42.2
3062	-2.5	57.6	3.77

第73表 深廻間B古窯第3号窯の15.0mT消磁後の磁化測定結果

試料番号	偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times 10^{-4}$ Am ^f /kg)
CT 3051	4.7	58.0	46.2
3052	-3.8	56.4	54.1
3053	0.4	55.0	29.3
3054	0.5	56.2	15.8
3055	6.0	57.0	12.1
3056	-5.3	59.9	8.49
3057	3.4	60.8	6.85
3058	-1.8	59.4	13.2
3059	6.1	61.9	32.1
3060	3.6	58.3	31.2
3061	1.8	61.7	38.0
3062	-3.0	57.7	3.04

第74表 深廻間B古窯第3号窯の20.0mT消磁後の磁化測定結果

遺構名	消磁段階	n/N	D (° E)	I (°)	α_{95} (°)	K	平均磁化強度 ($\times 10^{-4}$ Am/kg)
1号窯	NRM	16/17	2.0	59.8	1.73	454.1	10.7
	2.5mT	17/17	0.7	60.2	1.78	400.6	10.1
	5.0mT	17/17	0.6	59.9	1.90	353.4	10.1
	7.5mT	17/17	1.4	59.5	1.91	348.8	9.87
	10.0mT	17/17	1.0	59.7	1.76	412.6	9.48
	15.0mT	17/17	1.5	59.5	1.71	434.8	8.52
	【 20.0mT]	17/17	1.2	59.2	1.65	466.8	7.23
2号窯	NRM	14/14	-0.6	59.7	1.80	488.8	12.9
	2.5mT	13/14	0.6	60.1	1.66	626.5	12.9
	5.0mT	13/14	-0.7	60.3	1.85	502.1	12.9
	7.5mT	13/14	0.4	60.0	1.67	617.2	12.8
	【 10.0mT]	13/14	0.1	60.0	1.56	708.6	12.4
	15.0mT	13/14	-0.2	59.9	1.70	597.1	11.7
	20.0mT	12/14	0.3	60.1	1.58	756.5	10.2
3号窯	NRM	12/12	1.3	58.8	1.40	957.6	29.1
	2.5mT	12/12	2.4	58.6	1.65	695.7	28.9
	5.0mT	12/12	0.8	59.2	1.52	818.0	28.6
	7.5mT	12/12	1.8	58.6	1.58	751.4	28.2
	10.0mT	12/12	1.4	58.4	1.67	677.9	27.7
	【 15.0mT]	12/12	1.2	58.6	1.49	854.8	26.1
	20. mT	12/12	1.0	58.6	1.61	726.2	24.2

n/N : 採取試料個数／採取試料個数、D : 平均偏角、I : 平均伏角、

α_{95} : フィッシャーの信頼角、K : フィッシャーの精度係数。

【 】 : 考古地磁気データとして採用したもの。

第75表 深廻間B古窯第1・2・3号窯の考古地磁気測定結果

第2節 深廻間B古窯跡群出土炭化材の樹種同定

株式会社パレオ・ラボ 植田弥生

1. はじめに

当古窯群は大府市の中央部を北から南に流れる鞍流瀬川の右岸にある大府丘陵に所在し、周辺には多くの古窯が点在している地区である。深廻間B古窯跡群は、考古遺物から平安時代後期（12世紀末）から鎌倉時代初期（13世紀初頭）の窯跡と考えられている。ここでは、2号窯と1号窯の窯体内から出土した炭化材の樹種同定結果を報告する。窯体内に残る炭化材は、操業時に使用されていた燃料材と考えられ、この地域で窯業活動を支えていた燃料材樹種を明らかにする目的で、炭化材樹種同定は実施された。

2. 試料と樹種同定の方法

試料は、1号窯2試料と2号窯15試料である。一つの試料袋の中に1点の炭化材が取りあげられているものと、複数が入っているものがある。一試料袋の中（1地点から出土した炭化材）に複数の炭化材が含まれている試料は、すべて同一樹種である場合と、異なる樹種が混在している場合があった。また、同一樹種であっても明らかに形状が異なるものや、形状が同一であっても樹種が異なるものもあった。従って当時の燃料材の樹種構成を復元するためには、観察可能な炭化材はすべて観察し、異なる形状の炭化材は同一樹種であっても1点として集計した。

樹種同定は、先ず炭化材の横断面（木口）を実体顕微鏡で観察しておおよその特徴を捉え分類し、次に各分類群の典型的試料や確認を要する試料を走査電子顕微鏡で材組織を拡大して察し、同定を決定した。走査電子顕微鏡用の試料は、3断面を5角以下の大きさに整え、直系1cmの真鍮製試料台に両面テープで固定し、その周囲に導電性ペーストを塗り充分乾燥させた後、金蒸着を施し、走査電子顕微鏡（日本電子㈱製 JSM-T100型）で観察と写真撮影を行った。

3. 結果

1号窯と2号窯の17試料からは、クヌギ節27点、コナラ節12点、マツ属複維管束亞属6点、クリ1点、そして樹皮2点が確認できた（第76表）。樹皮はコルク質で厚みが約5mmと厚いことから、コナラ属で検出されているクヌギ節またはコナラ節の樹皮と思われる。

以下に同定の根拠と材組織の観察結果を記載する。

(1)マツ属複維管束亞属 *Pinus subgen. Diploxylon* マツ科 写真51 1a-1c (No464)

垂直と水平の樹脂道を持つ針葉樹材。早材から晩材への移行はゆるやかで、晩材部の量が多い。分野壁孔は窓状である。放射組織の上下端に複数層の放射仮道管があり、その内壁には鋸歯状の肥厚が認められる。このような形質からマツ属複維管束亞属のアカマツまたはクロマツの材であると同定され、放射仮道管内壁の鋸歯状肥厚が非常に顕著で鋭い試料が多いことから、アカマツを多く含む可能性は高い。

アカマツは二次林の代表樹種で、瘦せた乾燥地や陽光地に優占して生育する。

(2)コナラ属コナラ亞属 *Quercus subgen. Quercus sect. Prinus* ブナ科 写真51 2a-2c (No 053)

年輪の始めに中型の管孔が1層配列し、晩材部は薄壁で孔口が角形の非常に小型の管孔が火炎状・放射状に配列する環孔材。道管の穿孔は單穿孔である。放射組織は単列と集合状がある。

コナラ節は暖帯から温帯に生育する落葉高木でカシワ・ミズナラ・コナラ・ナラガシワがあり、山林や二次林（里山）に普通に生育している。

(3)コナラ属コナラ亜属クヌギ節 *Quercus* subgen. *Quercus* sect. *Cerris* ブナ科 写真51 3a-3c (No. 166)

年輪の始めに大型の管孔が1層配列し、晩材部は厚壁で孔口は円形の小型管孔が単独で放射方向に配列する環孔材。そのほかの形質は上記のコナラ節と同様である。

クヌギ節は暖帯の山林や二次林（里山）に普通の落葉高木で、クヌギとアベマキが属する。

(4)クリ *Castanea-crenata* Sieb. et Zucc. ブナ科 写真52 4a-4c (No.170)

年輪の始めに大型の管孔が密接して配列し、除々に径を減じてゆき、晩材部では非常に小型の管孔が火炎状に配列する環孔材。道管の穿孔は單穿孔、内腔にはチロースが発達している。放射組織は単列同性のみで、広放射組織はない。

クリは北海道西南部以南の暖帯から温帯下部の山野に普通の落葉広葉樹である。

4. まとめ

当古窯群の炭化材樹種構成は、クヌギ節・コナラ節・クリと針葉樹のマツ属複維管束亜属の4分類群であった。クヌギ節が最も多く検出され、次に同属のコナラ節が多く、この2分類群が圧倒的多数を占めていた。クリは、1試料から検出されただけである。従って当古窯跡群の主な燃料材は、クヌギ節とコナラ節を主体として、マツ属複維管束亜属が少し加わる組み合わせであったと推測され、クヌギ節は特に多く利用されていたようである。また、炭化材の形状は直径5cm以下の比較的細い材が多く、その年輪数は10年輪前後のものと20～25年輪前後のもののが多かった。このことからは、枝材を多く利用していたか、二次林を管理・維持する過程で伐採や間引きされた材が利用されていたことが連想される。

大府市内に分布する12～13世紀の古窯跡で炭化材樹種が報告されているのは、当窯跡の近くにある深廻間A古窯群（植田、2005）、大府丘陵の南部に分布する神明古窯群（小川、1996）と森岡第1号窯群（植田、1996）、鞍流瀬川左岸の尾張丘陵に分布するガンジ山A古窯群（植田、2000）である。クヌギ節・コナラ節・マツ属複維管束亜属の3分類群が主体で、かつマツ属複維管束亜属よりクヌギ節・コナラ節の出土数が多い当窯跡の結果は、深廻間A古窯群や神明古窯群と類似している。一方、ガンジ山A古窯群と森岡第1号窯群は、クヌギ節・コナラ節よりもマツ属複維管束亜属の出土数が目立つ。ガンジ山A古窯群や森岡第1号窯群のように、クヌギ節やコナラ節を随伴するがマツ属複維管束亜属が優占またはかなり多く出土する古窯跡は、尾張丘陵一帯に広く分布する中世窯に多い（山口・千野、1990、城ヶ谷、1992、植田、1998、植田2001a、植田2001b）。クヌギ節・コナラ節が優占する当窯跡や深廻間A古窯群そして神明古窯群は大府丘陵に位置するのに対し、尾張丘陵の西端に位置するガンジ山A古窯群ではマツ属複維管束亜属がやや多いのは、立地環境と関係した有意な違いなのか、単なる検討試料の偏りによるのかは、今後も調査地点を増やし検討する必要があると思われる。

一方、森岡第1号窯群からは、猿投山西南麓古窯群のながれをくむ13世紀前後の古窯からはあま

り報告例を聞かないアカガシ亜属・ミズキ属・エゴノキ属などの広葉樹材が検出されている。森岡第1号窯群は市南部を西から東に流れる石ヶ瀬川の水系に立地し、上流域は知多半島につながる。12～13世紀の知多古窯群の燃料材樹種は、マツ属複維管束亜属もあるが、常緑広葉樹のシイノキ属・アカガシ亜属・サカキ・ハイノキ属などが多く、そのほかにもコナラ節・クヌギ節以外のクマシデ属・ミズキ属など複数種類の広葉樹が検出され、猿投山西南麓古窯群とはかなり異なる樹種構成である。距離的にも知多古窯群に近い森岡第1号窯群からアカガシ亜属・ミズキ属・エゴノキ属などの広葉樹材が検出されたことは興味深く、水系などをを利用して知多半島から燃料材を入手していた可能性も、今後は考える必要があるかも知れない。また、深廻間A古窯群の1号窯床面下施設に敷き詰められていた丸太材は、二次林要素でもあるクリ（9点）とマツ属複維管束亜属（4点）であった（植田、2005）。一方、知多半島常滑市の金色東B古窯群から検出された1号窯床下施設の材は、照葉樹林の主要素であるツブライ（22点）やスダジイ（30点）である（パリノ・サーヴェイ株式会社、2004）。大府市は知多半島の付け根に位置するにも係らず窯跡から出土する樹種構成からは、大府市は落葉広葉樹のコナラ節・クヌギ節やマツ属からなる二次林が想定され、知多半島では照葉樹林が想定され、燃料材や施設材が現地調達であれば、隣接地でありながら大府市と知多半島では大きく当時の植生が異なっていたことになる。この点についても、今後資料の蓄積や花粉分析の情報も含め検討してみる必要があるのではないだろうか。

引用文献

- 山口慶一・千野裕道、1990、マツ材の形成および窯業へのマツ材の導入について、85-114、図版1-10、「研究論集 III」東京都埋蔵文化財センター。
- 城ヶ谷和広、1992、小田妻古窯跡群出土木炭の樹種同定、71-75、図版43、「小田妻古窯跡群」、愛知県埋蔵文化財センター。
- 植田弥生、1998、炭化材の樹種同定、141-143、「大高南地区遺跡発掘調査報告書」、名古屋市教育委員会。
- 植田弥生、2005、深廻間A古窯跡群出土炭化材の樹種同定、173-182、「深廻間A古窯跡群」、大府市教育委員会。
- 植田弥生、2001a、K-3・K-G-21の出土炭化材の樹種同定、108-114、「三好根浦特定土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書」、三次町教育委員会。
- 植田弥生、2001b、K-G-66・96出土炭化材の樹種同定、82-86、「北部畠総南工区曾和地区内発掘調査報告書」、三次町教育委員会。
- パリノ・サーヴェイ株式会社、2004、金色東B古窯群1号窯に関する自然科学分析、20-23、「金色東古窯群」、常滑市教育委員会。

試料No	窯跡	地区	地点など	検出樹種		備考
014	2号窯	VIE17q	焚口窯体内流入炭	クヌギ節	1	r:1cm 7年輪
017	2号窯	VIE17q	窯内流入	クヌギ節	1	ø4cm 19年輪
051	2号窯	VIE18p	焼成室窯内流入	樹皮	1	厚み:5mm
052	2号窯	VIE18p	焼成室窯内流入炭1	コナラ節	1	r:2cm 26年輪
053	2号窯	VIE18p	焼成室窯内流入炭2	コナラ節	1	r:1.3cm
054	2号窯	VIE18p	焼成室窯内流入炭3	コナラ節	1	破片
055	2号窯	VIE18p	焼成室窯内流入炭4	コナラ節	1	破片
				クヌギ節	1	破片
064	2号窯	VIE18p	焼成室窯内流入炭6	コナラ節	1	ø2.5cm 17年輪以上
				クヌギ節	1	r:0.8cmほか小破片複数
				樹皮	1	厚み:5mm
160	2号窯	VIE18p	焼成室	コナラ節	1	r:2cm 10年輪
166	2号窯	VIE19q	焼成室床面	クヌギ節	1	ø4cm 25年輪 樹皮付き
170	2号窯	VIE19q	焼成室遊離	クヌギ節	1	r:2cm
				クリ	1	ø2cm 7年輪
177	2号窯	VIE19q	焼成室遊離	クヌギ節	6	ø1.5~3cm
190	2号窯	VIE18g	焼成室窯内流入炭	クヌギ節	1	ø1.8cm 13年輪
231	2号窯	VIE19q	焼成室遊離	コナラ節	1	ø3cm
				クヌギ節	8	ø1以上
462	2号窯	VIE18g	焼成室床面灰	クヌギ節	1	r:1.5cm 15年輪
464	2号窯	VIE18p	焼成室床直	マツ属複維管束亞属	1	ø4cm
610	2号窯	VIE18p	焼成室窯内流入	マツ属複維管束亞属	5	ø1~2cm 2~5年輪
				コナラ節	5	ø1~3cm 10年輪前後
				クヌギ節	5	ø3.5~5cm 20年輪前後

第76表 深廻間B古窯群出土炭化材樹種同定結果一覧

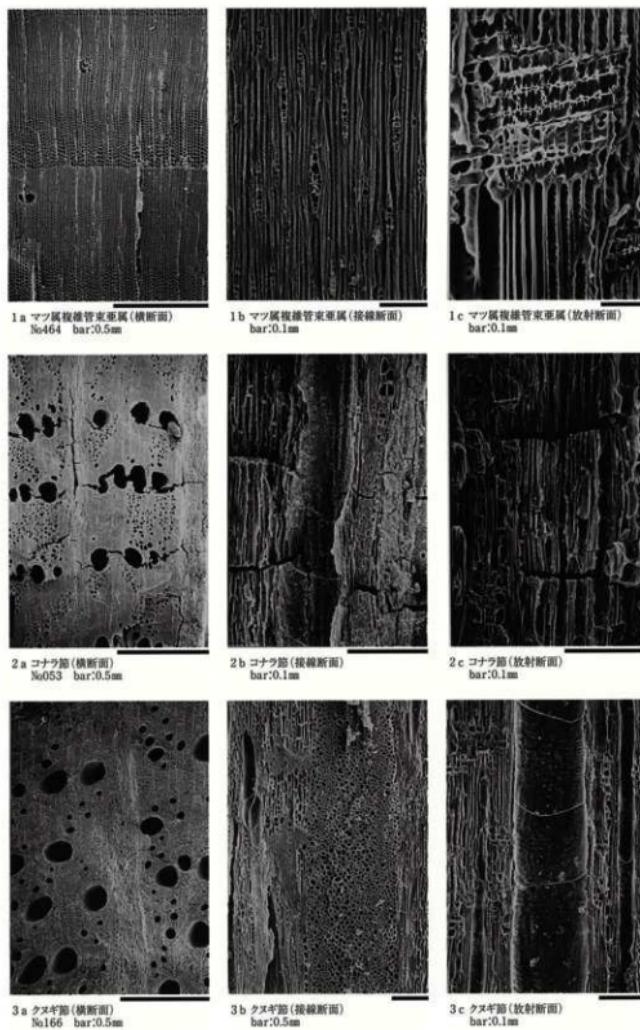


写真51 出土炭化材樹種 1

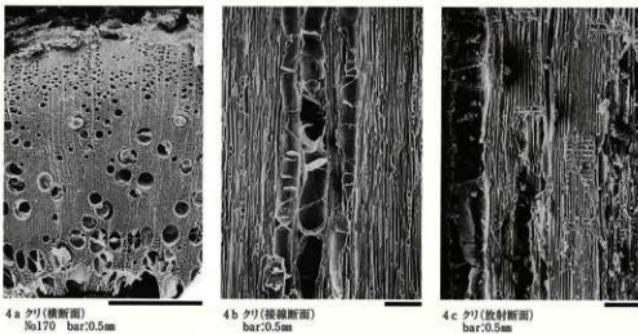


写真52 出土炭化材樹種 2

第5章 総論



発掘作業風景

まとめ

深廻間B古窯跡群は、市内で14例目の発掘調査である。窯業遺跡としては11例目である。本遺跡は3基の窯体と灰原からなる古窯跡群である。窯体は1基（2号窯）は、焚口から煙道部の床面の一部までは良好な残存状態であったが、他の2基は焼成室の上半部が削平されて消滅していた。前庭部は1基（3号窯）のみ残存しており、他の2基の前庭部は後世の土取りにより削平されて消滅していた。また灰原も一部が残存するものの、ほとんどが消滅していた状態であった。

深廻間B古窯跡群の立地する地域には、多くの古窯群が集中して築窯されている。本古窯跡群の北東約200mの地点に深廻間A古窯群が、北に約300mの地点に深廻間C古窯群が位置している。また南に約200mの地点に終山A古窯群、東に約130mの地点に終山B古窯群、約200mの地点に終山C古窯群が位置している。この中で深廻間B古窯群は、同一丘陵上の別斜面に築窯された一連の山茶碗窯であるので、最近本調査が実施された深廻間A古窯群と比較検討していきたい。

遺構について

3基の窯体の遺存状態は良好ではなかった。1基を除いて他の2基は焼成室上半部が消滅していた。焼成室は3基とも床面の改修が施されている。3基とも一次面を取り除いて二次面を築き、さらにその上に最終床面を築いている。しかし、3基とも改修の仕方は異なっている。2号窯では一次面の床面を20cm掘り込んで二次面を築いているのに対して、他の2基はこれほど掘り込まれていない。また3号窯では焼成室の上半分が大きく改修されているが、下半分には改修痕が見られないという特徴がある。深廻間A古窯群の2基の窯体は、ともに焼成室の床面が20cm以上深く掘り込まれ改修されていた。深廻間A古窯群の場合は、改修された床面下に碗などを伏せて並べた床面下施設と、それに続く排水溝が作られていたが、本古窯群の3基の窯体は床面の改修は施されていたが、床面下施設や排水溝などは作られていなかった。

焼成室についても、1号窯・2号窯とも焚口から分焰柱に向かって緩やかに下降しているのに対して、3号窯では分焰柱付近で22.5°の急傾斜で分焰柱に向かって下降している。このような例は知多古窯ではあまりみられないものである。

遺物について

本窯の出土遺物は、碗類と皿類の2種類が主な焼成器種で、他に鉢が数点出土しているなか、碗は528点、皿は278点が出土した。

碗類の平均値は、1号窯で口径16.0cm・高台径8.1cm・器高5.1cm、2号窯で口径16.3cm・高台径8.1cm・器高5.2cm、3号窯で口径16.6cm・高台径8.1cm・器高5.1cmである。

皿類の平均値は、1号窯で口径7.4cm・高台径3.9cm・器高2.0cm、2号窯で口径8.7cm・高台径4.4cm・器高2.6cm、3号窯で口径9.4cm・高台径5.2cm・器高3.0cmである。碗・皿とともに深廻間A古窯群よりも若干大きくなっている。皿類については、高台を有するものと、高台の無いものがあり、その比率は高台を有するものが72%、高台の無いものが27%であった。深廻間A古窯群では、高台を有するものが68%、高台の無いものが32%となっており、本窯の方が高台を有するものの割合が高い結果となつた。焼成時期が下るにつれて、碗・皿ともに大きさがやや小さくなる傾向があり、また皿類では高台が無くなっていく傾向がある。このことからみると、深廻間B古窯跡群の方が深廻間A古窯群よりも、焼成時期は若干古いものと考えられる。

炭化材について

本古窯跡群の1号窯と2号窯から炭化材が検出された。本古窯跡群から検出された炭化材樹種は、クヌギ節・コナラ節・マツ属複維管東亜属・クリの4分類群であった。この中でクヌギ節が27点・コナラ節が12点と多数を占めていた。深廻間A古窯群では、1号窯からクヌギ節が多く検出され、2号窯からはマツ属複維管東亜属が多く検出された。これは1号窯で豊富に生育していたクヌギ節を主要燃料として伐採したため、マツ属複維管東亜属を主要燃料としたと推定されている。本窯の場合はほとんどの試料が2号窯からのものであるため、深廻間A古窯群のような結果は得られていない。しかしクヌギ節・コナラ節が多いことは、深廻間A古窯群とは同じ丘陵であるため、この丘陵の植生に起因しているものと思われる。

築窯年代について

本古窯跡群では考古地磁気年代測定を行っている。西南日本版によると、1号窯はA.D.1210±30年、2号窯はA.D.1200±30年、3号窯はA.D.1200±20年という結果が出ている。これを東海版永年変化曲線に照合すると、1号窯はA.D.1150±40~70年、2号窯はA.D.1150±50年、3号窯はA.D.1140±30~70年という結果になる。このことから本古窯跡群の3基の窯体は、ほとんど同時期に操業されていたことがわかる。

次に3基の窯体の築窯順序についてみてみたい。造構からみると、残存状態が良好ではないため詳しくは不明である。特に前庭部は3号窯しか残存しておらず、また窯体構造も若干の違いがあるものの、築窯順序については特定できない。出土遺物の形状からみると、碗・皿ともに平均値が3号窯・2号窯・1号窯の順に小さくなっている。

これらのことから、本古窯跡群の操業時期は12世紀後半から13世紀初頭で、3号窯・2号窯・1号窯の順に操業されたものと考えられる。また深廻間A古窯群よりも若干早い時期であると思われる。

参考文献 「深廻間A古窯跡群」（大府市教育委員会 2005年）

報告書抄録

ふりがな	ふかはざまびいこようせきぐん							
書名	深廻間B古窯跡群							
副書名	大府深廻間特定土地区画整理地内埋蔵文化財発掘調査報告Ⅱ							
卷次								
シリーズ名	大府市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第7集							
編著者名	古田功治、鈴木智恵、広岡公夫、植田弥生、近藤英正							
編集機関	大府市教育委員会							
所在地	〒474-0011 大府市中央町五丁目70番地							
発行年月	西暦2006年							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °, ′, ″	東経 °, ′, ″	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
深廻間B古窯跡群	大府市長草町 深廻間28番地 ほか	232238	44067	35° 00'46. 1205"	136° 57'09. 7324"	991020 991221	1000m ²	区画整理事業
遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物	特記事項	
深廻間B古窯	古窯址	平安時代末期 鎌倉時代初期		窯体3基・ 灰原2・ 土坑3・ピット4	碗・皿・ 鉢・焼台・ 伊勢型鍋 など			

大府市文化財調査報告書刊行案内

タイトル	刊行年	値段	在庫
第1集 大府市山車調査報告書	平成7年	3,500円	在庫あり
大府市指定有形民俗文化財になっている藤井神社祭礼山車3輦と山之神社祭礼1輦の詳細調査の報告書で図面多数掲載。3分冊で構成。			
第2集 海陸庵古窯址群・神明古窯址群	平成8年	2,000円	在庫あり
平成6年から7年に発掘調査した前期中世山茶碗窯の遺構である。神明古窯址群からは大量の広口長頸壺が出土。			
第3集 円通寺古墓	平成9年	1,500円	在庫あり
平成6年に発見された江戸中期の経塚遺構。近世村落社会における庶民の信仰を探る資料。			
第4集 ガンジ山A古窯跡群	平成12年	1,200円	在庫あり
平成9年に発掘調査した中世山茶碗窯の遺構で、検出した窯跡1基から市内ではじめて床面下施設を確認した遺跡である。			
第5集 深廻間A古窯跡群	平成16年	2,400円	在庫あり
平成9年に発掘調査した平安末期から鎌倉初期にかけての中世山茶碗窯の遺構で、検出した窯跡2基に床面下施設を確認した遺跡である。			
第6集 羽根山古窯跡群	未刊		
平成10年に発掘調査した鎌倉期の中世山茶碗窯で、市内で過去に確認された最大規模の窯跡である。			



大府市文化財調査報告書 第7集

深廻間B古窯跡群

～大府深廻間特定土地区画整理地内埋蔵文化財発掘調査報告書II～

平成18年3月31日 発行

発行 愛知県大府市教育委員会

住所 〒474-0011

愛知県大府市中央町五丁目70番地

印刷 株式会社 愛知印刷工業

